
Dragon Nests ~ 竜影の宿りし者

カーティス・N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dragon Nests 竜影の宿りし者

【Nコード】

N6034F

【作者名】

カーティス・N

【あらすじ】

狼の精霊を宿す一族により見守られてきた石竜の影・高校1年の良は、その強大な力をもつ影に取り憑かれてしまった《青春冒険ファンタジー》

1・闇を歩む者（前書き）

- Dragon Nest : 龍穴 -

陰陽道、古代道教、風水術において、特別な力を有すとされる土地を現す。

多く、史上に名高い神社・仏閣、無名なるも人心を惹き続ける信仰地は、この龍穴上に在ると謂われる。

1・闇を歩む者

墨の膜を広げたような暗闇の中、滲んだ朱色の光が揺れていた。蠟燭を手にした二つの人影が、足音も立てずに進んでいる。

一人は長い黒髪の少女。十代の半ばであろうが、しっとりと落ち着いた顔つきに、強い意志を秘めた瞳を美しく煌めかせている。もう一人は長い顎髭を生やした老人。かなりの歳のように見えるが、その確たる足取りに危うさはひとかけらもない。

共に神に仕える者のように、純白の着物に身を包んでいる。

「もう少し、早く歩いてもよいのでは」
前を歩いていた少女が、立ち止まって振り返った。

「急ぐでない。地面の特徴をしっかりと足裏に刻みつけるのじゃ。たとえ暗闇でも、自由に移動できるように」

わかったわ。長老様」

少女は大切な物を撫でるように、そつと足を下ろしながら進みはじめた。

「それでよいのじゃ」

老人は喉を軽く鳴らして笑い、後に続いた。

二人が歩んでいる所は、山の懷にぼっかりと開いた洞窟の中だった。今から二億年ほど前、この辺りは海に浮かぶ珊瑚礁だった。それが地殻の隆起とともに、高く盛り上がり、ついには千メートルにも及ぶ山となったのだ。

元々珊瑚だった岩は、降り注いだ雨や地下水に溶かされていった。そして気も遠くなるほどの年月をかけて、深く広い、幾つもの枝に

分かれた洞窟が形成されたのである。

もっとも、この洞窟のことを知っている者は、ごく限られていた。山ができてあがる寸前に、頂上付近が大きく崩れ、硬い岩で覆われてしまったからだ。地質学者の行うありきたりの調査では、複雑に入り組んだ洞窟が地中深くに広がっているなど、思いもよらないことであつた。

洞窟は今もなお、年に一ミリほどの早さで拡がっていた。

ターン、ピシャン・・

遠く近くで、水の滴る音が響いている。

天井から伸びた大小の岩を伝い、しずくが落ちていた。その下の地面には、しずくに溶け込んだ岩の成分が固まり、柱のように育っているものもある。地面は、時にのっぺりと広がり、時にがたがたと段を作っている。目を凝らせば、人がすっぽり落ちてしまうほどの底知れぬ穴も開いていた。

「竜が光って、蛇が一匹、馬が一匹、羊が三匹・・それで兎が四匹で、皆で影へと詣でましょう。竜が光って・・」

少女は足裏に神経を集中しながらも、干支とその数を囁くように歌っていた。洞窟が枝分かれしているところでは、声に力を込めて歌った。

「・・兎が四匹」

目の前の暗がり、七つに分かれていた。

「やっと十一番目、兎は四匹」

炎をかざした少女は、大小の穴や亀裂のうち、壁に星印を刻まれたものを右から数え、四番目の穴に足を向けた。

囁いていた歌は、迷路のような洞窟を進むための口伝歌だった。これまで十の分かれ道を通じた。

「よいぞ、過ちはない」

「このぐらい、当たり前よ。私、もうすぐ高校二年なのよ」

老人のしゃがれ声に、少女は細めの顎をちょこりと上げ、また進ん

だ。やがて道は二手に分かれた。少女は揺れる炎を老人に向けた。
「次は竜。十二番目はどちらに進んでよいか、歌にはうたわれないわ」

「そりゃそうじゃ。それは我ら一族が、十六の歳を迎えた時に教えることになってるからの」

「長老様からの誕生日プレゼントってわけね」

「そうとも。こんな所でなんじゃが、おめでとう、蒼あおい。さあ、若き語り部よ。心を落ち着かせよ。誓いの儀式をはじめよう」

老人は優しく話し、少女の額に手を当てた。少女は丁寧に膝をついた。

「これより、我らが守ってきた影への道を伝える。おまえはそれを受け入れるか」

低く威厳に満ちた声だった。

「はい！」

少女は口をかたく引いた。

「影への道を知ってからは、おまえは歴史の語り部であるとともに、影を守る者ともなる。

いざとなったら、戦わねばならないこともある。それでもよいか？」

「はい」

少女は凜と返事をするともに、手にした蠟燭を高く掲げた。その黒い瞳に映る炎は、一瞬、四つ足の獣のような形となって揺らめいた。

「影を守ること。我と我が身に宿る者に約束いたします」

少女は瞳の中の光に語りかけるように、静かに息を吐きながら誓った。

「ならば伝えん」

老人は差し出された手から蠟燭を受けとると、一本を消し、白い煙がたなびく方とは別の、左側の道に炎をかざした。

「さあ、我らが守る影に触れに行こう。これから先は、どうするか

わかっておるな」

「もちろん」

少女は着物の袖から、青白く光る物を取り出した。小さな光が二つ三つ、ついたり消えたりしている。それは手の平に収まるような虫籠だった。数匹の虫がモゾモゾと動いている。洞穴や洞窟などに生息する蛍虫だった。

「いっそう、足元に気をつけよ」

老人は、もう一本の蠟燭も吹き消した。

闇が辺りに重々しく広がった。

籠の中の微かな光が、周囲の岩にてらてらと反射して見えるようになってから、二人はまた歩きはじめた。

少女の歩みはより慎重になってきた。先祖たちがずっと守り通してきたもの、これからは自分も守ることになったもの。それに触れることに恐ろしささえ感じていた。

「前に、前に・・・」

暗闇に虫籠を差し出す手を、老人がそつと支えた。洞窟は曲がりくねりながら続いていた。いったい何時間歩いたのだらう。いや、ほんの数分か。

突然、足元が揺れ、湿った空気が角笛のように鳴った。

「地震じゃー!」

老人は少女の小柄な体を抱きしめ、地面に伏せた。

キリキリと岩にひびが入る音、しずくが大粒の雨のように降り注ぐ音が、幾重にも重なってこだまし、やがて静まり返った。

「たいしたことはない。あうっ」

顔を上げたしわだらけの喉から、呻き声が絞り出された。

右に折れた洞窟の先に、燦った白い光があった。

「外からの光よ」

「今の地震で天井の岩盤にひびが入ったんじゃ。この先に、わしら

の守る影がある。明るい光の下、影はにわかには活性化したはず。影は今、命を宿した者を待っている、その体に取り憑こうとして」

「どうしたらいいの、長老様」

「蒼、大急ぎじゃ、入口で待っている聖とともに、地上の割れ目に向かうんじゃない！」

「お父さんと、で？」

「三人で結界を張り、割れ目を塞がねばならない。万が一にも、世の人が竜の影と出会ってはならない！」

老人は、少女から虫籠を受けとると、もときた道を早足で戻りはじめた。まるで足の裏に、目があるかのように複雑な形の地面を跨いでいる。少女も獣のようにしなやかな足取りで後に続いた。

2、トレイルラン大会

「うー、さぶ」

良は思わず肩をすぼめた。

突き刺すような冷たい風が、ほんの三センチほど開け窓から吹き込んできた。車中に淀んでいた暖気は、一瞬のうちに流れ去った。

「駄目よ、満が風邪を引いてしまうわ」

後の席で母が小さく言った。その横では、毛布を掛けられた弟の満が首をぐらつかせて寝ていた。

「なんか、目がショボついてしまって」

母の言葉に頷いた良は、パワーウィンドウのスイッチを押した。窓が閉まるのと同時に、乾いた熱風が顔を撫でた。目をしばつかせながら、ヒーターの吹き出し口を上に向けた。

「良、眠るなよ。大会がはじまる前に寝てしまうと、体は十分に動いてくれないからな。それに目がショボつくなんぞ、気合いが足らんということだ」

ハンドルを切りながら父が言った。

若い頃、陸上の短距離選手だったせいだろう、大会と名の付くものが絡むと途端に厳しくなる。

「わかってる。心に小さな炎を燃やしておくんだよね」

「その通り。小さくても熱い炎をな！」

喉の奥で唸りながら、父はにやりと笑った。

「村興しの小さなイベントじゃない。大袈裟に考えなくてもいいんじゃない。参加することに意義があるのよ」

母が欠伸をしながら言った。

「なんだってえ、そいつは違う。小さな大会でもオリンピックでも同じだ。参加するからにはな」

強い口調で話し始めた父だったが、道路に薄く張り出した氷を見つ

け、口を閉じた。

大川原高原まであと二キロ・・・
板切れに書かれた案内が、目の前を横切った。道の両脇の林には、雪がうつつすらと積もっている。

「新年雪中トレイルラン大会へようこそ」
分かれ道の中央に立つ松の木に、特大のプラカードが括り付けられていた。車はその矢印のさす方向に進んだ。

そう、良は今日、大川原高原という標高千メートル近い山の上で開催されるトレイルラン大会に出場するのだ。トレイルランとは、舗装されていない山中を駆ける競技で、単純に言えば、山登りと長距離走を掛け合わせたようなものである。

良の家は、ここから三十キロほど北西に下った所、四国の東側の徳島市という町にある。夏に阿波踊りが開催される所といえば、ピーンとくる人も多いかもしれない。

そこから、まだ正月気分まっさいちゅうの今日一月五日に、父の自慢の4WDで家族揃って出かけてきたのだ。

「雪中トレイルランなんて、うまいこと狙ったよね」

良は道端に盛り上がった雪を、目を細めて眺めた。

徳島は西部や山間部を除けば、雪は滅多に積もらない。積もったとしても日を越えて残っていることは稀である。盛り上がった雪など、見ているだけで浮き浮きしてくる。

「雪を見ながらのランニングなんて、普通じゃ体験できないしな」
まるで自分が出場するかのようになり、父は肩を揺らした。

大会は、午前中に中高校生の部があり、午後からは成人の部がある。良が出場する中高校生のコースは、山の山頂、中腹間を中学生三キロ、高校生五キロ走ることになっている。

「けど・・・」

想像していたよりも山の道は急だった。車のエンジンが高く唸っている。タイヤには小さなスパイクが生えているらしいが、カーブではズリツズリツと危うい音を立てている。

実際に走るコースは舗装などはされていない。しかも、雪の積もったなかを五キロも走るなんて。うきうき感が薄れてきた。

・参加した人は、おしるこ食べ放題なんだぜ、それも雪ん中で。最高だろ・

冬休み前に、高校のクラスメートでバンド仲間の圭太が誘った。良は「面白そうやん！」とホイホイ乗ってしまった。

後悔という言葉が頭の中を駆け抜けた。今さら「きつそうだから出なくてもいい？」なんて言えそうもない。

この大会に出るといった時、父は「そいつはいい。出場を断念した僕の方も頑張っておくれよ」と本当に嬉しそうだったのだ。

父は、秋の町内運動会で捻挫してしまった。自治会対抗リレーに出て、カーブで曲がり切れずにスッテーンと派手に転び、ついでに足首をグキリとやったのだ。

あれから三ヶ月も経っているのに、真面目に走るとまだズキリと痛むらしい。

「けどつて、なんだい？」

「うんや、なんでもない」

良は、小首を傾げた父に気付かれないように溜息をついた。

山道が開けた。

雪におおわれたならかな斜面が間近に見えた。何に使うのかはわからないが、大きなログハウスがぼつりと一件たっている。稜線に沿って十基あまりの風車が空に伸びて回転していた。

「さあ、到着だ」

熱い息遣いとともに、ハンドルが左に切られた。下からは見えなかったが、ログハウスのすぐ上に、学校の校庭ほどもある平らな土地

が広がっていた。すでに二十台以上の車が停まっている。水色に光るジャンパーを着込んだ男の人の案内に従がって、車は広場の奥に乗り入れた。

「ねえ、着いたの？」

薄い雪でおおわれた広場は、砂利が敷き詰められているのだろう。ビリビリと揺れる車体に、満が目を覚ました。

満は、良より三つ年下。中学一年だから、三キロのコースに出場できた。でも、しつこいほどに誘った結果が、

「せつかくの冬休みなんだから、のんびりしたいよ。それに兄ちゃんが出れば、家族も一杯はお汁粉食べられるんでしょ」というものだった。

これには「まあな」と苦笑いを返すしかなかった。

「外寒そう。僕、車の中で待ってる。お汁粉の時間になったら教えて」

どこに忍ばせてきたのやら、満はゲームを取り出してピコピコとやりだした。外に立っている人が、体を縮めて足踏みしているのを見たのだらう。

「ほれ、あんなに雪が積もってる。ちつとは出てみんか」

父が声を掛けた。そんな誘いに満が乗るわけがない。

「雪だなんて、小学生じゃあるまいし。犬だって小屋の中で丸くなってるよ」ときたもんだ。

「満が残るなら、私も車の中で待ってるわ」

言いながら母はバッグから携帯電話を取り出した。きっと良が走っている間に、ママ友とメールのやりとりをするに違いない。

「付き合いつて、本当大変」とぼやきながら。

「寒がり屋たちは、車に置いといて。さあ、行こう！」

顔をしかめながら父が言った。

「えっ、スタートの十時まで、まだ四十分もあるよ」

「ちょうどいい時間だ。ゆっくり体を温めてから走らないと、筋肉を痛めてしまうし、すぐにバテてしまう」

父は手袋をはめ、外に出た。ゲーム画面を見つめるぬくぬく顔を恨めしく思いながら、良はドアを閉めた。

「ぬー」

思わず声が漏れた。吐き出す息がやたらに白い。余裕があれば、煙草を吸う真似をしてへらへらと笑っていたところだが、そんな気持ちにはなれない。風はほんのそよ風でいどだったが、耳の付け根にピリピリと滲み込み、奥の方が詰め物をされたように重くなった。足を踏み出すと、凍り付いた雪がザクリと沈んだ。元旦にやっていた特別番組「南極からおめでとう」を思い出した。良にとって、山上の雪原は、南極にも等しい極寒の地だった。

「そーいや、天気予報で山間部は雪が降るかもって言ってたな」
父が空を見上げて言った。一時間ほど前、家を出た頃には、こちら方面には雲一つ見当たらなかった。でも今は、厚い灰色の雲が一面に広がっている。

「雪が降ってもやるのかな」良は聞いた。

「少しぐらいならな。冬山に雪が降るのは当たり前だろう」

「そりゃ、そうだけど」

もしかしたら中止になるかもという儚い望みは、あっけなく打ち碎かれた。

「つつ立っていたら凍ってしまう。ウォームアップをはじめよう」
父は早歩き程度のスピードで走りはじめた。左足を少し引きずっているが、振り返った顔は晴れ晴れしていた。

良も後を追った。フォームはしっかりしているが、体育の授業でタラタラ走ると同じぐらいのスピードだ。これなら本番がはじまる前に、へたってしまうことはないだろう。

ウィンドブレーカーのシャカシャカと擦れる音が、嫌な気持ちを消

していった。耳の痛みはかなりひどくなっていたが、やがて何も感じなくなった。

3・見えざるもの

十五分ほど走ったところで、広場に白色のランドクルーザーが入ってきた。運転しているのは、同じクラスでもう一人のバンド仲間、三田新一の母さん。

「なんで運動音痴の新一の母さんが？あいつ、出ないって言うたのに」

はて、と首をひねったところで、窓ガラスに鼻を押しつけて、こちらをのぞいている二つの顔が見えた。良をこの大会に誘った鈴木圭太と新一だった。二人とも熱い餅をふーふーと食べる仕草をしている。

「なるほどね」

良はくすりと笑った。

自分のことを棚に上げるのもおかしいが、新一も、結局は圭太の「お汁粉食べ放題だぜ」の誘いに折れてしまったのだ。無類の食いしん坊の天秤は、意外にすんなり傾いたのかもしれない。

車は停まったが、二人は出てこなかった。今度は下を向いて肩を小突き合っている。満と同じくゲームをしているのだろう。

「あれ良の同級生だろ。ウォーミングアップしないと、途中でへたっつてしまうぞ」

「自分たちのことだよ」

心配げな言葉に、良は小さく答えた。

実際、スポーツ万能の圭太はともかく、新一のことは気になった。体育の時のランニングではいつも歩いていた。そのぐらいのことでも、苦しそうに喘いでいた。

・・・まあ、いつでも棄権できるし、開催スタッフには医者もいるはず・・・そう思って心配を余所に置いた。

広場のあちこちで同年齢とおぼしき若者たちが軽く走っていた。運動部のユニフォームを着て、まとまって走っているグループもある。良は柔軟体操をしながら視線を飛ばしたが、二人の他は、知っている顔は見られなかった。

「あと五分で、新年トレイルラン大会、中学・高校生男子の部をスタートします。出場者はスタート地点に集まって下さい」

大会役員の腕章をはめたおじさんが、ハンドマイクを片手に話した。「どうだ、体は温まったか？」

「うん、ほかほかしてる。足がもう少し走りたいって疼いてるみたい」

「そいつはいい」

良はウインドブレーカーを脱いで、父に渡した。「32」青いゼッケンが、ジャージの腹と背中に縫われていた。

「じゃあ、行ってくるね」

「おお、しっかりやってこい」

軽く手を打ち合わせ、スタート地点に向かった。

五十人ほどはいるだろうか、背丈も学年も違う中高生が、ぞろぞろと集まってきた。各々の服につけられたゼッケンの色は、中学、高校に分けられていて、緑、青の二色。さすがに中学生の人数は少ない。三分の二以上は、高校生の青いゼッケンをつけている。走るコースは、道々に立っているゼッケンと同じ色の矢印に従えばよかった。

「うっ、ぶるっとくるね」

骨ばった体がぶつかってきた。ひよろりと背の高い圭太が顔をのぞかせた。

「あそこで、お汁粉、配るんだよね」

横には良と同じぐらい、170センチほどの身長ながら、かなり太った新一がいる。背伸びをしながら、広場の端の白いテントを見て

いる。

「おかしい。まだ用意していないや」

「昼までまだ二時間もあからな。それより大丈夫か。冬休み前より太ったみたいだぞ」

「ご心配なく。今も携帯ゲームで【オリンピック完全制覇】をやったんだ。たった五キロだから、大丈夫」

「それとこれとは違う」

良の気遣いをよそに、赤い頬は呑気に揺れていた。

「それより、おまえの父さん、力はいつてるな。うちなんかまだ家で寝てるよ」

向こうにちらりと視線を走らせた圭太がいった。テントの横で父が腕組みしてこちらを見ていた。

「確かに。ちよつとプレッシャーかな」

良は肩をすくめた。

「コースA、B、異常はありませんか・・・了解・・・間もなくスタートします」

役員のおじさんが、肩から吊した無線機で最後の確認をした。

スタートラインの後ろに皆がぎゅっと集まってきた。

「決して無理はしないように。調子が悪くなったら、近くにいる係員に申し出て下さい」

おじさんは煙のように息を吐きながら言い、ピストルを握った手を空に向けた。

「それでは、用意・・・」
「パーン！」

冷たい空気に、張り手をくらわすようにピストルが鳴った。耳を塞いでいる者もいたが、それほど大きな音ではなかった。数羽の鳥が、近くの藪の中から飛びたった。

良たちは一斉に走りはじめた。

圭太はあつという間に、前を走る集団に姿を消した。

『あいつ、準備運動さえしていないくせに』

予想はしていたことだが、まったく圭太には呆れた。

「良ちゃん、待ってえ」

掠れ声が聞こえた。振り返ると、タプンタプン体を揺すりながら、新一が走ってくる。情けないほどに遅く、すでにずーんと離れた最後尾にいる。

「オリンピック選手、お先に！」

良はにこりと笑い、前に向き直った。

足が雪に沈んだのは最初のうちだけだった。舗装されていない山道のコースはパワーシヨベルで踏み固められていた。だが、キヤタピラ跡が凸凹していて、ひどく走りにくい。おまけに下り坂に差し掛かると、ガツガツと足裏に響いた。

良は自分の温かい息を、頬で切りながら前に進んだ。

すぐにも、目の前に綿毛のような物が飛び交いはじめた。雪だ。鼻の先に浮かんだかと思うと、すぐに横に飛び過ぎた。

息が切れはじめた時、ちらりと後ろを見た。山肌に途切れながら見えているコースに、太った友人の姿はもはや見えなかった。見知らぬランナーたちが、白い息を吹き上げながら追いかけてくる。

『バツファローみたいだ』

衛星放送で観た古い西部劇の一場面が、目の前を横切った。自分も野生に生きる動物の一匹。余計なことを考えずに前に進む。

スウ ハツ ハツ

スウ ハツ ハツ

破裂しそうな肺から吐き出される息、それとも雪か？ 白い世界に、青い矢印が点々と過ぎていく。

「お先に！」

逆さ瓢箪ひょうたんのようなコースの括れ部分で、陽気な声が響いた。

緑色の小さな塊が横に揺れ、通り過ぎていった。振り返ると圭太の後ろ姿が見えた。緑色の手袋を力強く振っている。早くも中間地点

を過ぎて帰ってきたのだ。上り坂のはずなのに足取りは力強いままだった。

その後、他のランナーと抜きつ抜かれつを繰り返し、氷に浮いた砂利に滑りかかった所で、係員のおじさんに声を掛けられた。

「あと半分、頑張れ！」

渋い声の応援が、眠りかけていた思考回路に渴を入れてくれた。蛇行しながら前に伸びる道は、登りに切り替わろうとしていた。すぐにも脹ら脛にぐっと重みがかかり、思わず前のめりになった。足幅が極端に小さくなっている。息を吐くほどに頭が痺れるようになった。

苦しい・・・冬休みからはじめて1日3キロのジョギングで、トレイルランに挑むなど甘過ぎたのだ・・・
白い風景がただゆっくりと動いていった。

と、斜め前から青いゼッケンをつけたランナーが降りてくるのが見えた。良はやつと圭太と擦れ違った所に至ったのだ。

『あれは・・・』

足を引きずりながらヨタヨタと降りてくるのは、新一だった。自分で歩くというより、坂道で勝手に足が前に出ているようだ。時折り、目をつぶっている。

『えっ』

何を思ったのか、新一は急に左に折れた。その先には、葉の抜け落ちた黒い木々が並んでいる。そのまま林の中に歩いていく。

『そっちは違う』

近くに係員の姿は見えなかった。

良は頬を叩いて瞼を見開いた。灌木を跨いで下りコースに入り、太った体を追って林の中に入った。凍りついた雪の碎ける音、枯れ枝を踏む音が足元に響いた。

「新一！」

目の前を泳ぐように進む友人に、掠れ声を投げた。

「ゴールだ。ほら、神社の神主さんがきてる」

足を早めた新一が息も絶え絶えながら、喜びの声を漏らした。その目には、妙なものが映っているようだった。

「なにいつてる！」

喘ぎながら良はどなった。走るのを急にやめたせいか、頭がクラクラした。雪の積もった世界が、白黒に点滅している。

「やつ！？」

目の前に、新一が言った通りのものが見えた。白い着物をきた背の高い老人と男の人、もう一人は、たぶん同じ年ぐらいの少女が、三角を描くように立っていた。

三人は新一がなだれ込んでくるのを無視し、外側に向かって手を合わせている。何故か、囲まれている所は、木々は生えておらず、薄く雪を重ねた土が剥き出していた。大小の角ばった岩が転がっている。

「ど、どうなった？」

良は、頭を振って再び目を見開いた。新一が見えなくなるのと同時に、三人の姿も消えてしまったのだ。

『けど、間違いない、新一はあそこに進んだ！』

良はまっすぐに進んだ。少しふらつき、黒松の幹に体をぶつけた。

『おかしい』

確かにぶつかってははずなのに、なにも感じなかった。まるで擦り抜けてしまったみたい。手を伸ばしてみた。

『ない！ここに松の木なんかかない。僕は何を見ている？』

そのまま突進した。

急に、地べたにへたりこんでいる新一の姿が横に見えた。そして先ほどの三人。

『さっき見たのは本物だったんだ』

わけもわからず、足をもつれさせながら、辺りを見まわした時、不意に地面ががたついた。

「危ない！」

手を合わせていた少女が、こちらを向いて叫んだ。次の瞬間、あたりは暗闇に包まれた。

4・洞窟の中

水が滴る音が響いていた。朦朧とする意識のなか、良は薄く瞼を開いた。

暗闇に小さな炎が浮かび、三つの人影が揺れていた。

「長老、この若者、どうなさるおつもりですか」

「頭の後ろの傷の回復を見よ。影は既に宿ってしまっておる」

淡々とした声に、しゃがれた唸り声が続いた。

「では目覚める前に、命を奪わねばならないということでしょうか」

「それは駄目じゃ。もし、そうしたとしても、結果は同じ、影はわ

しらの誰かに取り憑く」

「ならばどうすれば？」

「方法は一つ。天井の穴と同様、洞窟の入口を塞ぐんじゃ。さすれ

ば、取り憑いた体を失った影は、元の場所に戻るじゃろうて」

「それじゃ、ここに閉じ込めて、死んでしまうのを待つってこと？」

高く悲しそうな声が割り込んだ。

「じゃが、他に方法はない。影を守るにはそうするしかない」

「でも、そんな見殺しだなんて・・・」

「それが、わしらの役割」

声が聞こえなくなり、あたりは闇に閉ざされた。

『夢だ。これが、今年の僕の初夢』

良は薄く開けていた瞼を閉じた。

タンッ

何かか額を打った。手で触れてみると濡れた感じがする。

良は目を開いた。暗闇の中、遠く近くで、水滴が落ちる音が響いている。空中に小さな青白い点がぼつりと浮かんでいた。

『ここは？』

背中は冷たく硬い物に当たっていた。滑らかだがゴツゴツしている。座りながら両手であたりをまさぐった。

『岩。そうだ。僕は新一を追いかけて穴に落ちた。するとここは？顔を上に向けたが、自分が落ちた穴から射しているはずの光はなかった。あるのはちっぽけな光だけ。』

手を伸ばしてジャンプした。だが、目の前にあるように思えた光はずっと上だった。

『どうなってしまったんだ』

先ほど夢の中で聞いた声を思い出した。

・この洞窟に閉じ込める・

まさか、そんなことあるがわけない。恨みや罰を受ける理由などまったくない。大丈夫。新一は穴に落ちたことを知っている。きっと誰かが助けに来てくれる。

『動いてはダメだ。じっとしていなければ』

良は再び、冷たい岩の上に座った。

頭の後ろが妙につっぱっていた。手を伸ばせば、右耳の後ろの髪の毛が、糊を付けたように固まっていた。少しだけべっとり手についた物があり、臭いをかいでみた。

「血」

自分は頭を打つたのだ、こんなに血が出るほどに。

でも、不思議なことに痛みはなかった。こぶもできていないし、気持ち悪くもない。傷は知らぬ間に治ってしまったらしい。

良は、ちっぽけな光を見つめながら助けを待った。外はあれほど寒く、雪も降りはじめていたのに、まったく寒くなかった。

洞窟の中は、夏は涼しく冬は温かい。何かのドキュメンタリー番組でやっていった。

腹がグルッと鳴った。昼はとうに過ぎているのだ。おまけに喉が乾いていた。

『新一、お汁粉にありつけたかな』

こんな時に、汁粉をを何杯もお代わりしている新一の姿が想像された。そしてすぐに、硬い顔をしている父、泣いている母、途方にくれた満の顔と入れ替わった。

『皆、心配しているだろうな』

良は立ち上がり、微かにてらりと光るところに歩いた。

チャブリ！

足元で音がした。水が浅く溜まっていた。思わず屈み、手にすくって口に運ぼうとした。

その時だった。地面が小さ揺れ、低い声が響いた。

- - わしの影を宿した者よ。はや、おまえはわしに影を返してくれるのか - -

慌てて水を捨て、あたりを見回した。

光の点の下あたりに、黒く巨大な物が浮かんでいるように見えた。

「誰かいるのか」

悲鳴のような声を喉から絞り出した。

- - おまえは、わしの影を宿した。そして今、その腐った水を飲み、わしに影を返そうとした。それはそれでよいことかもしれない - -

「いったい誰だ。いるなら出てこい」

- - わしはここにいる。はるか太古の昔から - -

声は、天井あたりから聞こえたようだった。でも、人がいる気配はない。

『誰もいないのに・・僕は頭を打って、おかしくなってしまったのか』

良は先ほどいたあたりに戻った。

低い声はそれからは聞こえず、やがて青白い光は弱まり、消えた。

自分の体があることさえ、忘れてしまうような漆黒の闇。

「助けはきつと来る」

大きく息を吸い、父が言っていたように、心に浮かぶ炎を想像した。今にも消えそうなか細い炎だった。なんとか赤く燃えさかる炎にしたかったが無理だった。どうしようもない寂しさと、底知れない怖ろしさが募っていく。

「頭がおかしくなったのなら、寂しさも吹き飛ばしてくれ」

どなった声がわんわんと反響した。手に触れた小石を力の限りに投げつけた。

一瞬、白い火花が暗闇に浮かんだ。もう一度、小石を探して壁に投げつけた。また光った。

「光！」

嬉しさで一杯になり、握り拳をぐんと高く突き出した。

穴に落ちた時に一緒に落ちたのだろう、地面をまさぐると、のっぺりとした岩の上に、他にも幾つかあった。二つの石を握って、強くかち合わせた。先ほどよりも明るい火花が飛び散った。

カチカチと石をぶつけながら辺りを見回すと、そこはテニスコートが一つできるぐらいの広さの洞窟だった。半分より向こうは、池のように水が溜まっている。

顔を上げながら火花を散らした時、思わず目をつぶった。

「怪物」

深呼吸してから、もう一度見た。

黒い天井から、ざくざくと牙を生やした顔がこちらを睨んでいた。

両脇にはウロコ模様のついた翼が、重々しく垂れている。

もちろん本物の怪物ではなかった。たまたま岩がそんな形になっているのだ。怪物の周りには氷柱のような岩が、猛獣の檻のように取り囲んでいる。

「なんていったつげ。そう、鍾乳石だ」

周囲の様子が分かったからか、急におかしくなってきた。笑いながら石を打ち鳴らした。何故か、火花が散る度に、力が沸いてくるよ

うだった。腹が空いていることや、喉の乾きはすっかり忘れていた。
『さつき、聞こえた声は？』
不意に思い出し、背筋を寒くして顔を上げたが、怪物の頭はなにも話さなかった。

良は火花を散らしながら、あたりを歩いた。でこぼこした壁に、三つの裂け目があった。

『ここで待つべきか、それとも出口を探して進んだ方がよいのか』
裂け目に向かいたいように、足はじわじわと地面をすった。

『ちよつと待て、よく考えるんだ』

新一はこの穴の場所を知っている。ずいぶん時間は経っている。なのに助けはこない。あいつは、あのちらりと見えた三人に、どうかされてしまったのかもしれない。

ならば、ここにいても、誰も助けにはこない。

「脱出だ！」

そう決心し、壁に開いた三つの亀裂のうち、一番大きなものに足を踏み入れた。

案内人もなしに洞窟の中を歩くということが、どんなに危険なことか。そんなことは考えもしなかった。

カツ！カツ！

火花をまき散らして進んだ。穴が枝分かれしている所では、一番大きなものを選んだ。

「いけるいける」

躓いてばかりだが、足取りはどんどん軽くなっていった。さすがに身をよじるほどに狭くなっている所では不安になった。それでもまた大きく広がると、「それ、当たりだ！」と大声を出して喜んだ。

前方にのっぺりとした広い通路が見えた時、調子に乗って走り出した。

ゴトリ・・足元の岩が滑るような音を立てた。
胃が小さく縮み、体中の毛が逆立った。既に足を置いたはずの岩は
なかった。

良は再び穴に落ちてしまった。

先ほどいた広い穴よりも、もっと深い縦穴に！

下には、突き刺す獲物を待つように尖った岩があるかもしれない。
たとえ平らであっても、体を強く打ちつけ、血を流すだけではおさ
まらないだろう。

カッ カッ カッ カッ

両手に握った石を夢中でかち合わせた。何もない空中でできること
といたらそのぐらいだった。体がぐるりと回って、頭が下になっ
たような気がした。

真下に、生け花の剣山のような岩が見えた。

『もう駄目だ』

硬く目をつぶった。

だが、岩に串刺しにされる最期の時はこなかった。そつと目を開け
ると、体はフワフワと宙に浮かんでいた。

何かに掴まっているわけではない。強烈な風が吹き上げているわけ
でもない。自分で宙に浮かんでいた。

『ここを出よう』

心に思うのと同時に体が上昇しはじめた。先ほど足を踏み込んだ場
所に、あつという間に行き着き、そのまま横に飛びはじめた。

一度も通ったことのない暗闇の道。なのに進んでいく道が正しいこ
とを知っていた。

目の前を、ぶ厚い扉が塞いでいた。

地面に降りて、全身の力を込めて押した。だが、びくりともしない。

城の門にあるような丸太を繋ぎ合わせた扉だった。

『畜生。やっぱり、僕をここに閉じこめた奴がいるんだ!』

無性に腹が立った。胸のあたりで、熱いものがぼつぼつと燃えだした。

「開ける!」

どこからともなく、太い炎の柱が飛びだした。

扉は、巨大なハンマーで打ち砕かれたように、燃え上がりながら飛び散った。炎はそのまま直進し、穴の前に立ち並んでいた木々を、あつという間に灰にしてしまった。

気付いた時には、黒く根元を焼け残した木々の間をまっすぐに歩いていた。

「家に帰れる」

もやもやとやけに明るい足元の向こうの暗闇の中に、街灯が小さくちらついていた。

山肌に、ぼつかりと開いた洞窟の入口の横では、小さな家が屋根を落として燃え尽きようとしていた。

渦巻く炎を背後に、三つの人影が遠離っていく若者の後ろ姿を見つめていた。

「よかった。あの子、助かったのね」

「彼は影の力を使って洞窟から抜け出した」

「これよりわしらが為すことは、彼の側に寄り沿い、その影を守ること」

「はい・・・」

5・佐那河内村役場

地元の人が使う林道か、良は、薄いアスファルトが敷かれた細い道を下っていた。

やがて道端にポツポツと民家が現れ、街灯の数も増えていった。その光を目にする度に体の内側に力がわき起こった。胸を騒がす高い音がどこか遠くで鳴っていた。

広い道に出てほどなく、煌々と明かりをともした建物の前に辿り着いた。

入口のステップでタバコをくわえていた男性が、こちらを見つめた。考え事をするように首をひねっている。と、急にタバコを落として駆け寄ってきた。

「君、もしかして、安西君？」

「はい」

良はこっくり頷いた。

人とのやりとりのおかげで頭がすっきりしてきた。ヴェールが払われたように、周囲の物音がはつきりしはじめた。

道路を走る車、街灯のジーという微かな音、それに遠くでなっているサイレン・・・鐘の音が混じっているので消防車だろう。

くつきりと色が戻った視界の前には、レンガ調の大きな建物がたっていた。

【佐那河内村役場】・・・庭園用の大石に刻まれている。

とにもかくにも洞窟から脱出し、山の麓まで歩いてきたのだ。けど、どうやって？

意識はしっかりしているのに、記憶の一部に霞がかかっていた。

「まあ、よくここまで辿り着いたね。さあさ、皆さんお待ちかねだ」男性が肩を抱きながら建物の中に案内した。

ドア口の古い置き時計は、午前の四時をさしていたが、内部は、昼間のように人が溢れていた。橙色の消防隊の服を着た人も数人いる。青いゼッケンのついたジャージを目にした人は、皆、口をあんどりと開け、目を見張った。

「安西良君、ただいまゴールしました」

男性が高らかに言い、居並ぶ人々の中に拍手が沸き起こった。フロアの奥から、母が髪を振り乱して走ってきた。

「良、良・・・」

それだけ言い続け、体を抱きしめると、床に膝をついて泣きだした。「安西さん。なんともまあ、よかったですな」

無線機を首に吊した恰幅のよい男が、顔をほころばして息をついた。

「ええ、ええ、村長さん、ありがとうございます」

「こんなところでは、風邪をひいてしまふ。静養室で休みなさい」
ついで優しくそうな若い女性が現れ、村長室の隣にある部屋に通された。しゃくり上げながら母もついてきた。

十分に暖房のきいた部屋の隅にはベッドが二台あり、一つには満が眠っていた。

「相変わらずマイペースだな。兄ちゃんが大変だったっていうのに、生意気な弟の寝顔がこんなに可愛らしいなんて、思ったこともなかった。」

「満、ついさつきまでフロアで起きてたのよ。大好きなゲームもやらずに」

「ごめん、心配かけたね」

良はそつと言った。ソファに腰を下ろした母の目から、涙がポタポタと床に落ちた。

ほどなくお盆をもった女性と、先ほどの村長がやってきた。

「良君だったね。ジャージの背中が破れているが、大丈夫かね」

村長の言葉に、顔をあげた母が背中をのぞき込んだ。

「まあ。ナイフで切りさかれたみたい！」

そのまま手を突っ込み、背中をまさぐった。くすぐるような乾いた手に、良は思わず身をねじった。

「中のTシャツも破れてるわ。でも、傷はないみたい。平気なの」「うん、ぜんぜん」

そんなこと、まったく気づかなかった。

「それより、父さん・・・」
聞きかけたところで、向かいのソファーに村長がズシンと腰を下ろした。

「ほんにまあ、山火事にも巻き込まれず、よくここまで辿り着けたもんだ」

「山火事？」

「おお、三時間ほど前に、いきなり山から火の手があがったんだよ。麓から目撃した人の話では、巨大な火炎放射器がブハーと吹き上げたみたいだったそうだ。

ちようど君が走っていたトレイルコースから二キロほど下の一带だよ。知らなかったのかい」

良は首を振った。どこかで見たようだが、映画だったか、夢だったか。

「冷めないうちに召し上がれ」

ソファーの間にあるテーブルに女性がお盆を置いた。二つのどんぶりにうどんとお汁粉が入っていた。熱そうな湯気をもくもくと立っている。

「トレイルラン大会の残り物だが。さあ、食べなされ。何も口にしていけないだろう」

村長がそっとお盆を押して勧めてくれた。と、突き出した腹の上の無線機から、くぐもった声が飛び出した。

「・こちら山林火災消防隊・・・」

「おう、こちら村長、どうした」

「報告いたします。火災は収まりました。雪のおかげで被害範囲

は少なかつたようです。負傷者はいません・

「山火事の鎮火、了解した。ご苦労様」

無線機を手にした村長は、良を見つめて微笑んだ。

「それと、そちらにいる安西さんに伝えておくれ。息子さんは、無事ゴールしましたと」

・・それはよかつた。承知しました・
弾んだ声が返ってきた。

「父さん、まだ、山にいたの？」

「そう、あなたが見つかるまで、絶対下りてこないって。自分は山火事で燃えてしまつても構わないって」

母はまた顔を押しさえて泣きだした。

「お母さんの涙のほうが、山火事を早く消せたかもしれないな」

村長は目を赤くにじませ、横に立つ女性と頷き合つた。

「さあ、わしらはここを出よう。村長などが前におつたら、ゆっくり食べれんだろう」

良の肩をぽんぽんと叩き、村長と女性は部屋を出ていった。

「うはあ、これ最高」

熱々のウドンとお汁粉は、感動的というほどに美味しかった。とつかえひつかえ三回もお代わりしたが、まだまだ食べられそうだった。

「大熱を出したあとの塩水づけキュウリは最高だぞ」

父の口癖を思い出した。

母は、良が食べ終わる度に、お代わりを取りに行っていたが、さすがに三回目は少し恥ずかしそうだった。それがなかつたら、あと五回はいったらろう。

食事の後くつろいでいると、消防隊員と一緒に片足を引きずつた父が帰ってきた。煤けた黒い顔に、白い筋が二本残っていた。

「正月早々、大きな厄払いができたよ」

良の無事な姿を見た時、そんなことを言って、天井に顔を向けた。

「嬉しい時には、子どもの前でも泣いていいのよ」

母がからかい半分に言ったが、父は顔を上げたまま小さく手を振った。

6・帰りの車中

山火事で怪我人が出るかと、診療所で待機していた医者が役場にまわってきて、良を診察した。その後、へとへの父が運転する車に乗って家路についた。

表立って異常はなかったが、目をシヨボつかせた年寄りの医者は、しきりに首をひねっていた。

「右耳の後ろに大量の血が流れた跡がある。鋭い物で頭を打ったはずじゃが、傷はない。それにジャージの襟は、バーナーで燃やしたように溶けとる。だのに、どこにも火傷はない。背中もおかしいといえばおかしい」

「先生、それは良いことなんですか、悪いことなんですか」

曖昧な言葉に、母は少しイライラして聞いた。

「医者はやはり首をひねって答えた。」

「異常がないのは良いことなんじゃが・・もしかや内部に傷があるかもしれない。念のために今日の昼にでも、大きな病院で診てもらいなさい」と。

「良、気持ち悪くなったりしてない？」

助手席から母が首を伸ばした。

「うっくん、ぜんぜんへっちゃら」

良は明るい顔をして答えた。隣では満が口を尖らせて寝ている。

役場で目覚め、良の顔を見た時は、部屋中を走り回って喜んでいたが、周囲の皆が、良ばかりに声をかけるので膨れてしまったのだ。

「圭太と新一は？」

良は運転席に言葉を投げた。

「ああ、圭太君はゴール直前で後ろの子に抜かれて二位だったよ。やっぱり、ウォーミングアップしておくべきだったと悔しがっていた。」

新一君はどんじり、ぼてぼて歩きながら帰ってきた。てつきり、おまえも一緒に帰ってくると思っていたんだが・まさかな」
父はハンドルを回しながらフツと吹き出した。大変なことがあったあと、人は変なところで笑うものだ。良も顔をほころばせた。

「それで、どうしたの？」

「当然、僕は新一君に聞いたよ、おまえのこと知らないかいつて。すると、おかしなものを見たっていうんだ。着物姿の人が祈っている所に迷い込んで、そこにおまえが助けに来てくれたつて。それでおまえは突然消え、気づいたら元のコースを歩いていたらしい」

「それからが大変だったのよ」
母が割り込んできた。

「コースに立っていた係の人は帰ってきたのに、良はこない。大会に参加していた人、皆で探しに行ったの。熱血漢の圭太君は、赤い顔をしてすぐに駆け出していったわ。

さつき役場で、穴に落ちたとかいってたけど、怪我はないみたいだし、どうしてたの」

良は返事に困った。穴に落ちたからのこともだが、その前後の出来事を整理しようとしても、うまくいかなかった。

でも、父が聞いた新一の言葉に、はつきりしたことがあった。

「確かに僕も三人の人を見た。おじいさんと父さんぐらいの男の人、それと女の子。穴に落ちる時に、その子の叫び声まで聞こえたんだ。それで真っ暗な洞窟の中にいて、落ちていた石をかち合わせて・・それからのは覚えている。気がつくまで道路を歩いていた。

あとは洞窟の中で、わけのわからない声が聞こえてたぐらいかな」
「ふーん、新一君とあなたが消えてしまった場所を探したけど、なにも見つからなかったわ。それにあなたたちが見たという三人は、どうしてしまったの。なぜ、穴に落ちた良を助けようとしなかったのかしら」

母は首をひねった。

「きつと良は神隠しにあつたんだよ。何しろ佐那河内村には、大昔に天照大神が隠れたという天岩戸に関わる伝説があるからな」
思いついたように父さんが言った

「それでな、二人が見た人たちは、神に仕える神官たちの霊なんだ。ランニングで頭がへるへるになつてしまつて、普通では目に映らないものが見えたに違いない。良が落ちた穴は、この世でない世界の入口だつたというわけだ」

良は半分頷き、半分首を傾げた。

「なんとなくごまかされているみたい。でも、そんな感じもするけど、神隠しつてなんで起こるの」

「そいつはわからんよ。何しろ神様の考えることだからな」

「ずるいよ。そんなら、なんでもありつてことじゃないか」

「そうそう」

父のガラガラ笑いに、良もつられて笑つた。

車は、町に戻つてきていた。

時間は朝の八時前。通勤の車で、道が混みはじめたところだつた

「あーよく寝た。これからどこか遊びに行くの？」

起きだした満が聞いた。

「会社には休みの連絡をしてあるが、そいつは勘弁だ。今日は家でのんびり昼寝でもしよう。良もゆっくり休まんとな」

父の言葉に母が首を振つた。

「だめよ。少し休憩したら、大学病院か県立病院に行かないと」

「つまらん」

満は口を尖らし、父さんは肩を落として頷いた。

7・病院での実験

天井の蛍光灯が、ワックスで磨かれた床に映っていた。

その上をひっきりなしに人が行き交っている。正月休みの後のせい
か、病院は患者でごった返していた。

咳をしている子ども、腰を曲げて目をつぶっているお年寄り、腕に
包帯を巻いた男性・

病院など滅多に来ることがない良は、新年早々、これほど具合の悪
い人が多いことに驚いた。でも、それ以上に驚くことがあった。

「座ってなさい」

ソファでうたた寝をしていた母が顔を上げて言った。

「さつきからフラフラして。高校生なんだから、少しはじっとして
いなさい」

「今、ちよつと実験しているんだ」

しかめ面の母にこそりと伝えた。

「え？」

「いい、今からあちこち歩くから、僕の周りで起こること、よく見
てて」

「ここは病院なのよ」

うんざり顔を後目に、良は広いロビーを歩きはじめた。少し経って
振り返ると、母は姿勢を正して目を丸くしていた。

良は再度、実験結果を確かめようと思い、泣きそうな顔をして赤ん
坊を抱いている女性の横に立った。

「あら、変」

女性は、赤ん坊の額や頬を触りながらつぶやいた。今までゼーゼー
と苦しそうに息をしていた赤ん坊が、ぱちりと目を開き、愛らしく
笑っていた。

『間違いない。僕が側に寄ると患者さんが元気になる』
良は確信した。

最初、ソファアで静かに待っている時に、このことを発見した。隣には辛そうな顔をした患者たちが入れかわり立ちかわり座った。が、すぐにも病院には相応しくない澆刺とした笑顔を浮かべたのだ。

「こんなに待たせるなら、もういい」と、帰ってしまった人も多い。
「見たでしょう?」

「ええ見たわ。でもね」

ソファアに戻った良を、母は首をひねりながら迎えた。

「疑がっているでしょう。僕が近づくと病気が治ってしまうなんて」

「そりゃそうよ。だっておかしいじゃない」

母は良の額やら体にペタペタと手を当てた。

「何してるの?」

「いや、あなたが変な病気になったんじゃないかと思って」

「病気を治す病気なんてあるかい」

良は笑いながら、また立ち上がった。

「おもしろいから、もうちょっとやってくる」

「はい、どうぞ、いつてらっしゃい」

さっきまでのしかめ面はどこへやら、母はよその人に話すように返事をした。頭が混乱してしまっただけらしい。

それから二時間も経って、良は診察室に呼ばれた。聴診器を当てられたり、レントゲンをとられたが異常はなかった。

「僕、わかったよ。人の病気を治してしまうぐらいなんだから、自分の怪我なんて、すぐに治ってしまうんだ」

駐車場に歩いていく途中で良は言った。母は相変わらず首をひねっている。

「ほらもう一人、患者さんがいる。その人を治したら母さんも信じ
てくれる?」

言いながら車のドアを開けた。中では、父がシートを倒して居眠り

していた。

「おつ、遅かったな。おかげで、じっくり休ませてもらった」
「ねえ、ちよつと車から出て」

良は、寝ぼけ眼の父を車から引きずり出し、周りをくると歩いた。
「いったいなんだい？それより、お医者さん、なんて言ってたんだ」
「なんもないって。さあ、父さん、体操の時みたいにジャンプして」
父は訳が分からんと首をひねりながら、ジャンプしはじめた。家に帰って着替えをして、今は黒い革靴を履いている。

「この靴で運動すると、すぐに足が痛くなって・・・おんや？」
ジャンプを繰り返した父は、目を見開いて笑いはじめた。

「ぜんぜん痛くないぞ。山中を歩き回って、あんなに痛みが強まっていたのに」

「ほらね」

振り返ると母は深く頷ぎいていた。

父は子どもみたいにはしゃいで跳ね続けた。通り過ぎる人は、見てはいけないもののように顔を背けた。

「もういいよ」

「なんだよ。おまえがやれっていったんじゃないか。良も、それ母さんも一緒に」

「あなた、いいかげんにしなさい」
とうとう母の鋭い声が飛び出した。

「僕、なにも悪いことしてないよ」

父は肩をすくめ、良や満の口真似をした。

「ってことは、良は、僕の足も治してくれたってわけか」
車を運転しながら、父は感心したように息を漏らした。

「そついや、山から下りて、良の近くに寄ってから、痛みはなくなつたような気がする」

「あなたがいつていた神隠しと、何か関係があるのかしら」
「たぶんな」

父はしばらく黙っていたが、やがて真面目な声で言った。

「良、その不思議な力のこと、誰にも話しちゃダメだぞ」

「どうしてだい？」

良は首をかしげた。自分が近寄るだけで様々な病気や怪我を治してしまう。すごく素敵なことだし、友人や知人、皆に話してもいいのに。

「いいかい。人っていうのは、不思議な力をもつことに憧れるけど、身近にそんな人がいると、妙に妬んだりしてしまうものなんだ。それと・・・」

「そんなに考えなくても・・・もつたいない気がするわ。重い病気で、今にも死にそうな人を助けられるかもしれないのよ」

『たぶん母さんは、去年、癌でなくなった祖父ちゃんのことを思い出しているんだ』

良は思った。

病院のベッドで、体の痛みを我慢しながら笑いかけてくれた祖父ちゃん。そんな人たちを救えるかもしれないのに・・・

「苦しんでいる人を助ける。それは素敵なことだと思う。でも、僕が本当に心配しているのは良自身のことなんだ。力という物には必ず源がある。不思議な力を使うことは、その度に何かがさっぴかれていると思うんだ。それがはつきりしないと、人への話もそうだが、力は使ってはいけない気がする」

「もしそうだとしたら、どうしたらいいんだい。僕の近くに病気の人が寄ってくれば、自分でも知らない間に、力を使ってしまうんだよ。これじゃ、どこにもいけないよ」

「きつと、解決する方法があるはずだ。そいつを探そう」

父は力強くいったが、母は黙ったままだった。

家に着いたのは、夕方の五時を過ぎ、空の色が薄黄色に変わりはじめた頃だった。

留守番をしていた満は、テレビの前にかじりついてゲームをしていた。三人が家を出たのは十時ごろで、その時からしていたらしい。菓子の空袋が、床に散らばっていた。

「お返り。早かったねー」

真っ赤に充血した目で振り返った。三人は呆れて満の顔を見つめた。

8・影の散歩

夕食は、良の大好物、野菜と肉団子の鍋だった。

食べるほどに腹が空くようで、白ご飯を六杯もおかわりした。明日の朝の分もと多めに焚いていたが、ほとんど無くなってしまった。

「役場に到着した時も、良の食欲ってすごかったのよね。家なら遠慮いらさないわ。たーんと召し上げれ」

母が嬉しそうに言った。

「それはそうと、いつもそんなに食べてたか？」

父が首を傾げた。

「いつも兄ちゃんは、僕より少ないくらいだ。おかしいぞ」
満が悔しそうに睨んだ。

「競争じゃないんだから、いいだろう」

良は弟の頭を軽く小突いた。

「なんだよ。ぶつなんてひどいぞ」

「軽くじゃないか」

「もう、よしなさいったら」

テーブル上のガヤつきをよそに、父が立ち上がった。何か閃いたように部屋を出ていくと、洗面所から体重計を持ってきた。

「ちつと、計ってみ」

良は言われるままに体重計に乗った。

「49キロ。冬休み前に計った時は54キロあった。5キロもやせたよ」

はっと気づいた。母も気づいたようだ。

「これって、僕があの手を使ったから？」

父は、そうだとばかりに口を結んだ。

「とりあえずだ。一つの手掛かりが見つかったな。力を使えば良の体重は減ってしまう。使い過ぎたらどうなってしまかわからない」

「じゃあ、たくさん食べれば、問題はないってことかしら？」

「それならいいが。いや、そういうことにしよう」

目を見開いて聞く母に、父は大きく頷き、自分の茶わんを突き出した。

「僕の足を治してくれたお礼だ」

「いいよ。まだ少しはお釜にあるんだから」

「そうよね、お父さんの箸でつつかれたご飯じゃね。待ってて。今、よそってくるから」

母が笑いながら、台所にいった。

頭に巻きついていた物が、少し解けたようだった。腹が減ったら食べればいい。

「兄ちゃんの力ってなに？僕、聞いてないよ」

父の顔をのぞき込んだ満に、台所から母が声をかけた。

「冷蔵庫にアイスクーキあったでしょう。ご飯、食べ終わったら、あれ食べてもいいわよ」

「えっ、いいの。じゃあ、ごちそうさま。アイスクーキ、お先に！」

満は台所に飛んでいった。

「単純というか、あの性格、うらやましい」

ぼやく良の前で、父は苦笑いを浮かべていた。

夜も九時をまわり、良は二階の自分の部屋に入った。大晦日の大掃除がまだ効いていて、深呼吸したくなるほどにきれいだった。

「冬休みもあと二日だけ。宿題もやってあるし、のんびり過ごそう
つと」

ゴロリとベッドに横になり、目をつぶった。

昨日からのことが、スライドを見ているように目の前を通り過ぎた。

・ 新一の後を追った ・ 不思議な3人がいて ・ 洞窟に落ちて ・
誰かの言葉を耳にした ・ 石を打ち合わせて ・ 山道を歩いていた ・

あれらは本当にあつたことなのだろうか。考えれば、すべてが夢だったような気がする。

『でも、僕には不思議な力が宿ってしまった。それは事実だ。しかも、人には話さないほうがいいし、使おうとさえしないほうがいい。そんな力、なんのためにあるんだろう』
胸の奥が苦しくなって目を開けた。

黄金色の月明かりが、窓からのびていた。優しい光に包まれ、ほんのりと気分が落ち着いた。

『そうだ。明日、新一の家に行こう。何か知っているかもしれない。ひよつとしたら、あいつも僕と同じ力を持っているかも。ああ、こんな時に携帯を持っていたら・・・』
良は舌打ちしながら、再び目をつぶった。新一は携帯を持っているが、良は持っていない。「電話は気軽にするもんと違う」と言う父さんの古い考えのおかげだ。

『まあ、持っていたら圭太みたいに料金オーバーのペナルティで取り上げられる可能性が高いけれど・・・』
息をつくと同時に疲れがとるとと流れ出した。心に張り詰めていたものも解れていく。全身でベッドの柔らかさを感じ、小さいけれど落ち着く部屋の広さを実感した。

目をつぶって周囲の感触を味わってみた。とても新鮮だった。本当は触れていないのに、想像の世界では、床に敷かれた絨毯の毛立ちまで感じる事ができるようだった。

『こりゃいい。もっとやってみよう』

月光に照らされた自分の影が伸びていく、そんなことを想像した。部屋の外に出た影が、スルスルリと階段を降りていく。玄関に凸凹と並んでいる靴の上を通り、ドアの下のわずかな隙間から外に出す。

『まるで、引き伸ばした影の散歩。こんな遊びができるなんて』

体はベッドの上に置いたまま、良の想像は町中に広がっていった。時に、ジワーツと踏みつけられ、時に様々なリズムでコツコツと叩かれた。

『これは、車や人が、影の上を通っているんだ』

あれこれ考えるのが面倒になり、想像された感覚の味わいに任かせていた。

と、急に何かに強く引き寄せられ、深い縦穴に落ち込んだようだった。その先はまた広がっている様子。

『僕は、どこかの井戸を考えているのか・・・ずっと底には、もう一つの世界があつたりして』

良はそつと微笑んだ。

「光もたらずお方よ」

不意に声が聞こえた・・・ぐーんと伸ばした影に糸電話のように音声が伝わったとでもいうのか？

『ははあ、井戸の底の世界の住人だね。声は聞こえても、見ることはできない』

良はゆとりに溢れていた。

「今のあなたは白く輝く霧のよう。これではお話ができません。わが祈りとともに姿を現し下さい」

また声が聞こえた。念仏を唱えるような歌が続く。

『何故、こんな想像を？不思議な力を持った自分のことを考えているからか』

「とうとう、あなたは姿を現して下さいました」

目の前に男が見えた。偉い人物に会った時のように、地面にひれ伏している。

大昔の人のような、すばんと被って腰紐を結ぶ服の上に、鈍い光を放つ羽織を着ている。短い髪の毛は銀色に光っている。

男性はゆっくりと顔を上げた。高い鷲鼻に瘦けた頬、青白い顔から

は、ろくな食物を摂っていないように見える。が、その目は、紫色に生き生きと輝いていた。歳は取っているらしいが、どのくらいかはわからなかった。

「あなたは、わが世界に豊かさを与えて下さる方」

低い声が響いた。

良は驚いた。真っ赤な口の中に、吸血鬼のような長い犬歯がのぞいたのだ。

「まるで鬼だ」

思わず漏らした。

「鬼！それは邪悪な者の呼び名。あなたは、我らに警告を与えるために現れたのか」

男は悲しそうな表情を浮かべた。

「確かに、我らは禁じられた食物を口にしています。しかし、豊かな食物がなくなった以上、他に方法はなかったのです。食べなければ、すでに滅びていたでしょう。」

光もたらずお方よ、教えて下され。我らはどうしたらよいのか」

なぜこんな展開になるのか、よくわからなかった。もしや、これは想像ではなく、実際に起こっていることなのではないか。

目の前に座る男の悲しく光る紫色の瞳、赤い唇の輪郭、髪の毛一本一本、あまりにもはっきり見えている。

想像などではない！

「そんなことって」

「では、あなたはどつしるとおっしゃるのか」

男の顔が歪んだ。気味が悪かったが、必死に尋ねる男が気の毒に思えてきた。

「禁じられていてもいいんですか。滅びてしまうよりはましですよ」

あまり考えずに答えた。

「おお確かに。まずは生きなければ。わしは考え過ぎていたのかも

しれん。あなたの言葉で、胸に重くだいていた不安は消えうせた」
男は節くれだつた腕を伸ばし、良の手？を握った。氷のような冷たさが引き伸ばされた影に伝わった。

「わしは、銀の衣の三郎太、お言葉をお聞きしたこと、決して忘れることはございません。いつぞやに、またお目にかかれますように」
男は地面にひれ伏した。

『早く戻りたい』

良は願った。

一瞬というわけではないが、数秒とかがらぬうちに、背中にベッドの柔らかさを感じた。

目を開けると、元の月明かりがさしていた。いつの間にか、時間が経っていたらしく、月は窓の縁に消えようとしていた。

ほっと息をついて目をつぶった。今度は余計な想像を膨らませなかった。自分を包んでいる布団の感触だけに意識を向けた。

やがて良は眠った。

9・不思議な老人

翌朝、洗面所で顔を洗おうとした良は驚いた。

左手の甲に、ミミズ腫れのような四つの筋があったのだ。痛くはないが、赤く膨らんでいる。そこは昨日の晩、鬼のような顔をしたあの男に握られたところだった。

「やっぱり、想像ではなかった」
つぶやきながら、後ろの体重計に乗った。

47キロ。体調はすこぶるよかったが、昨日より更に2キロも減っていた。

「ねえ、大丈夫？」

「うん、体重は減ってないよ」

洗面所をのぞいた母に明るく答えた。余計な心配をかけさせないための嘘だった。体重が減った原因はよくわからない。思い当たることといったら、夜に奇妙な散歩遊びをしたこと。その流れで、不思議な男と話をして、手を握られたことだった。

満と母が口をあんどくり開けて見つめる前、良は、食パン六切れをあつという間に平らげた。父さんは今日から仕事初めで、会社に出かけていた。

昨日は、新一の家に行こうと思っていたが、予定を変えた。

『それどころじゃない。僕は鬼に取りつかれてしまったのかも。鬼のことを調べなくては』

焦る気持ちを抑えながら、満とゲームをし、九時になるとそそくさと玄関に走った。

「どこに行くの？」

「ちよつと図書館に」

台所からの母の声に答え、ドアのステップの横に停めてある自転車に跨った。ペダルを踏み出してすぐに、ブレーキを握った。

誰か引つ越してきたのだろう。三十メートルほど走った先の空き家の前で、家具屋のトラックが道を塞いでいた。自転車を降り、横の用水に落ちないように注意して押した。

「ごめんなさいね」

明るい声に顔を上げれば、二階の窓から、同じ年ぐらいの女の子がのぞいていた。落ち着いた雰囲気からは、大学生のようにも見える。・・はて、どこかで会ったような・・

なんとなく引つかかったが、小さくお辞儀をして自転車に跨った。

ひょうひょうと風が顔を洗っていく。天気の良い春の日のように気持ちよかった。

商店街の中道通りに出た。福袋を持った人がいっぱいいる。抽選の回転盤をまわす音がジャラジャラと響いている。町は正月の活気に溢れていた。

図書館は立ち並んだ店を抜けた先にある。くねくねとハンドルをさばいて進んだ。

「まあ、あの子ったら」

幾人かが、良を見つめて目を丸めた。

「僕、トレーナーしか着ていない」

良は、自分の服装がおかしなことに初めて気がついた。

人々は、厚いコートやジャンパーを着込み、ほとんどが手袋をはめている。一方、自分ときたら、薄手のトレーナーとジーパン、それに裸足にサンダル姿。

いつも自転車に乗る時にしていた耳当てもすっかり忘れていた。そんなことに気がつかないほど、体は寒さを感じていなかった。

服装の見かけなんて気にする柄ではなかったが、いぶかしむような視線で突つかれるのはいい気持ちがいなかった。

商店街を抜けて、図書館の自動ドアが開いた時、ほっと息をついた。

閲覧コーナーのソファでは、おじいさんが三人、雑誌を見ていた。

奥の方、本棚の間や学習コーナーに人はいなかった。カウンターの向こうでは、係員が居眠りをしていた。

「えーと、鬼は・・・」

さっそく検索用のコンピューターの前に座り、「鬼」とキーワードを入力した。

画面にずらりと「鬼」と文字が入った題名が並んだ。ほとんどは子ども向けの絵本や童話ばかりだったが、中には鬼の歴史や鬼の民族学など、大人が読むような本もあった。

「うーん、難しそう」

溜め息をつきながら、メモ用紙に本を探す記号「7211オ」とタイトルを書いた。係員に探してもらおうとしたが、あいにく目は閉じたまま。小さく舌を鳴らして、700と数字の書かれた棚に向かった。お目当ての本をなんとか見つけ、手に取って開いてみた。

「うーむ」

また溜め息が出た。

ルビの多い難読漢字が並んだ文中に、銀の衣の三郎太と名のつた人に関係する内容を探そうとしたが、それらしいものは見つからなかった。

「坊や、何を探しているのかね」

いきなりだった。

ほとんど人はいないのに、近づいてくる気配を感じなかった。ぎこちなく振り返ると、仙人のように、白い顎髭をのばしたおじいさんが笑っていた。今時珍しく着物を着ている。線香の匂いが微かにした。

「ええ、ちょっと」

知らない人に、自分が探している本について話すなんてできなかった。何しろマニアックな鬼についての本なのだから。

「ほほう、鬼か」

良が手にしている本をのぞきこんだ老人は、興味深そうに髭をさす

った。

「そうなんですけど」

「で、その中に、探している鬼はいたかね」
ポイントをついた質問だった。

少し気味が悪いが、もしかこの人は何か知っているかもしれない。
えい、聞いてしまえ！

「僕、鬼に取り憑かれた人を助ける方法を探しているんです。ご存
じないですか」

「なんと！」

老人はすつとんきょうな声をあげた。係員がぎくりと目を覚ました。
「知り合いが、鬼に取り憑かれてしまったと？」

声を落とした老人は、目尻を下げて良を見つめた。

「そういうことなんです」

「その解決策の書かれている本は、たぶん、ここにはないじゃろう。
で、その人は、鬼にどんなことをされて、どうなったのかね？」

「悩み事を相談されて、手を握られて、それで体重が減ってしまった
んです」

老人は首を傾げた。

「はて、鬼のすることはもっと派手か、反対に嫌らしいぐらい地味
じゃと聞いておるが、その鬼とやらは、どんな様子だったのかな」
良は説明した。

老人は考え事をするように上を向いて髭をしごいた。

「おそらく、それは、まぼろし幻人じゃろう」

「まぼろしびと？」

「そう。今でこそなくなつたが、昔はよく神隠しというものがあつ
た。この世でない世界に行ってしまうことじゃ、現代の言葉で置き
換えるなら、平行世界とも言えるかもしれんな・・そこから帰って
きた者は、幻人に会つたと話したもんじゃ。鼻が高いから天狗、歯
が牙のようだから鬼という人もおつたがな。」

話からすると、幻人は体重が減ったこととは無関係じゃ」

良は思わずニヤついた。この人は父と同じようなことを言っている。でも、こちらの方が本格的だ。何か特別な研究をしている人なのだろうか。

「じゃあ、体重が減ったのはどうして？」

調子に乗って聞いた良に、老人はウインクをするように片目を細めた。

「体重が減るということは、体のエネルギーを消費したというわけじゃが。その人は何か特別なことをしたのではないかね。例えば不思議な力を持つ影を使ったとか」

「不思議な力をもつ影？あつ！」

昨日の晩は、自分が想像した影を町に伸ばしていた。それに病院では、明るい電灯の下にいた。

『僕は影を、他の患者さんの影に重ねていた。すると、僕は影の力を使っていたのか』

老人のくぼんだ目は、良の心の奥を見すかしているようだった。

「ピーンときたようじゃの」

「おじいさん、教えて下さい。どうしたら体重が減らないようにできるのですか」

自分のことであることは、とっくにバレているようだった。それならそれでいい。すぎるように聞いた。

「影の栄養は、光。体重が減らないように心に光を描き、それが体に充満することを祈ればよい」

「心に光を描いて、体に充満することを祈る。それだけ？でも、どうして、そんなこと知っているんですか」

「さてな。では、不思議な影をもった知り合いによろしく」

そう言つと老人は、クツと喉を鳴らして手を振り、ドア口に歩いていった。

慌てて後を追つて外に出たが、既にその姿は見えなかった。なんとこの素早さ。向こうの曲がり角までは、五十メートル以上もある。

いきなり現れたかと思えば、察しによすぎる話をしたり、もしや、本当に仙人だったのでは・ありえないこととはいえ、老人が飛んでいるかもしれないと、空に浮かぶ雲の合間に目を凝らした。と、自転車のベルが喧しく鳴った。

「おお、ビリケツ良ちゃん」

「帰ってきたら、ただいまぐらい、いってよ」

二つの陽気な声。のつぼの圭太と、太つちよの新一だった。

「ごめん、いろいろあって。それより今、髭をのばしたおじいさんを見なかつたかい」

二人は顔を見合わせた。

「あの着物姿の？」

「見たつていうか、角の自動販売機の前で、友だちを大切につて声をかけてきた」

「で？」

「なんも・そのままボチボチ歩いていった」

圭太の答えに少しがっかりしながらも、良は首をひねった。やはり老人は普通の人間だったのか。けどなんで、二人に声かけを？

「なんでもいいけど、こんな所に入らないで中に入ろうよ」

新一が体を縮めながら、鼻水をすすった。

良は図書館に戻った。

学習コーナーにどかつと腰を下ろした圭太と新一は、こわばった体をもぞもぞと動かした。

「それにしても寒いよな。天気予報では温かくなるっていったのに、大はずれだよ」

「良ちゃん、ジャンパーは？そんなんで寒くないの」

圭太に続いて、良の格好を見た新一が首を傾げた。

「うん、ちつとも」

良は寒さを感じない自分がおかしいことを改めて知った。これも、影の力に何か関係しているのだろうか。ということは、そんなことでも力を使っていることになる。

「それで、ここに何しに？図書館なんて、二人には合わないよ」
良はちらりと掠めた疑問を振り払いながら聞いた。

「読書感想文。冬休みの宿題だよ。家にいても、喧しくて落ち着かないからな。新一もやってないっていうし」

圭太が笑いながら、隣の太った肩を抱きしめた。

「良ちゃんは何？良ちゃんこそ、図書館は合わないよ。やっぱり宿題？」

「ブブー。宿題は大晦日までにやったよ。ちょっと調べ物があったんだ」

「先にやってしまっなんてずるい」

「そうだそうだ。良、俺たちに心配かけたぶん、感想文みせる」

圭太がテーブル越しに長い首を突き出した。新一はにんまり笑っている。

「それを言われてはな。でも感想文だよ。同じだったら、まずいでないの」

空中に、担任で現国担当の末本先生のフグのような顔がちらついた。宿題を写したのがバレたら、どんなペナルティを課せられるか・

「いけるって、全部写すわけじゃないし」

圭太の自信満々な顔に、良はしぶしぶ頷いた。

「やったー」

新一が喜びの声を出した。

「静かに！」

居眠りから覚め、棚に本を返しにきた係員が、テーブルを指で弾きながら通り過ぎた。三人はクツと忍び笑いした。

「さて、感想文は、良の家に行って書かせてもらうことにしてと。調べもの、すんだか」

圭太が声をおさえて聞いた。

良は首を振った。

「探していた本は見つからなかったんだ」

「俺たちも探してあげるよ。せつかくここまで来たんだから」

「そうしようよ。もうちょっと、ここでぬくぬくしてたいし」

圭太がいい、新一が頷いた。

「ありがとう。でも、もういいんだ。さっきのおじいさんが、いいことを教えてくれたし」

「なんだい、そりゃ」

二人は良の顔をのぞきこんだ。

「幻人^{まほろひびと}って知ってる？」

良は昨日の晩、経験したことを話し始めた。はじめ、二人は首を寄せて話を聞いていたが、途中から身を引くように椅子に背をつけた。

「何か気味悪いよ。禁じられた食べ物^{マカ}つてなに。第一、それって夢でないの」

「証拠はあるんだ。ほら」

二人は、突き出された赤い筋が残る左手を、怖々と見つめ、顔を見合わせた。もちろん良は、父親に言われたように、病気を治す力のことは省いて話した。そんなことまで知ったら、二人は余計に気味悪がるに違いなかった。

「新一、聞こうと思っていたんだけど、トレイルラン大会の時、変なもの見たんだよな。ほら、神社の神主さんが来てるって」

良の質問に、新一の小さな目が見開いた。

「うん、見た。着物を着た三人の人が立っていた。そこに良ちゃん^{りょうちゃん}が飛び込んできて、急に消えて、気がついたらコースを歩いていた。あれって本当だったの。あとで探したけど、そんな人たちいなかったし、僕、夢でも見てたんだと思ってた」

「僕も見ただ」

「俺はぜんぜん、気づかなかったぞ」

仲間外れにされたように、圭太がむくれた。

「幻人に会つたりとか、変なことが起こつたのは、あれがきっかけみたいなんだ。だから聞くんだけど、新一は大丈夫か。なにも起こつてないか」

「いやなにも。でもよかつた。夢じゃないんだ。他の二人は忘れたけど、僕、あの時に見た女の子の顔、はっきり覚えてるんだ。すごく可愛くてね」

新一は遠くを見つめるような目をして、だらしなく口を開けた。

「へえ、新一って、女の子に興味あつたのかよ。ゲームとか百科事典だけだと思つてたぞ」

「もしや、新一にも力がという期待が外れ、良が小さく肩を落とす一方、圭太が目を丸くした。」

驚くのも当然だつた。新一の話題といえば、ゲームのことが、百科事典で仕入れた妙な知識ばかりだつたのだ。

「そりや、クラスには、ちよつといない感じの娘だよ。なんていうかな、お姫様みたいな」

「その子、良も見たのか」

「うん。ちらつとだけだけど」

「畜生。俺だけ見ていないなんて。こらつ新一、もつと詳しく思い出せ！」

圭太が太った脇腹をくすぐつた。ヒーヒー言いながら、体をよじつた新一は、派手な音を立てて椅子から転げ落ちた。

「何度言つたらわかるんですか。おしゃべりは外でしなさい！」

眉をつり上げた係員が、つかつかと寄つてきた。

図書館を追い出された三人は、そのまま良の家までいった。

圭太と新一が感想文を適当に写した後、学園祭から放つておいたギターやベースをいじつたり、満も交えてゲームをして解散した。

『全部じゃないけど、二人に話してよかつた』

良は重荷をおろしたように、ほつと息をつき、遠ざかる友人の後ろ

姿を見送った。

その夜、良はまた奇妙な影の散歩をしてしまわないかと、ビクビクしながらベッドに入ったが、何も起こらなかった。

次の日の朝、こっそり体重計に乗ると、やはり体重は減っていた。昨日もそうだったが、母親の目を盗んで、非常袋の中のカンパンやチョコレートをむしゃむしゃと食べた。

その日は一日中、家でごろごろしていた。体重が減らないように、心に光を描いて体に充満することを祈ればいい。図書館であったおじいさんはいつていた。でも実際、どうやっていいのか、わからなかった。

せめてもと、ベッドを日のおたる窓際に引いていき、パンツだけになって光を浴びた。寒さを感じないことに首をひねりながらも、瞼の裏に広がる朱色の光に、体の隅々に広がるように祈った。

満や母がやってくる気配がすると、慌てて布団を被った。
「冬休み最後だから、のんびり昼寝」
のぞき込んだ二人に言った。

母は心配そうな顔をしたが、良の明るい顔を見て安心したようだった。

夕食の前に体重計に乗ると、冬休み前の重さに戻っていた。ご飯も茶わん一杯で腹一杯になった。

光への祈りは、すっかり効いたのだ。

このことは、両親そろった時に報告したかった。それで夜遅く、父が帰ってきた物音を聞きつけ一階におりた。居間のドアを開けると、ガサガサとなにかを隠す音がした。

「へっ、なに？」

父の後ろに回り込むと、非常袋が倒れていた。二十本以上ものチョコレートがこぼれ出ている。

「ほれ、災害への準備は怠るなというだろう」

「時々入れ替えないといけないから、食べてもいいわよ」

見え見えの取り繕いだった。良が非常袋の中身に手をつけていたことは、バレていたのだ。

「ありがとう。で、とりあえずだけど・・・」

良は、光への祈りについて二人に報告した。

はつきり解決したわけではないが、問題が取り組めそうなことがわかった両親は、「お祝いだ」とチヨコにむしゃつきながら喜んでくれた。

10・謎の転校生

一月九日、三学期初日の朝。ブレザーを羽おった良は、制服の上に厚いジャンパーを着込んだ満と 玄関を出た。山間部は別として、ずっと晴れが続いていた。しかし気温はまったく上がらなかった。自転車置き場の土に膨れ上がった霜柱は、踏みつけても壊れないほどに硬く凍りついていた。

「ほいじゃ」「ああ」

交差点で満と別れて高校に向かった。途中の道々で、街路樹の葉先の氷を叩き落したり、道端の薄氷を割ったり、寒さで身を縮こまらせない分、様々な楽しみを発見した。

高校が近づくとつれ、他の生徒達の姿も多く見られるようになったが、みな一様に防寒着をしっかりと着込んでいた。

「動きずらそ」

良は顔をしかめてつぶやいた。自分だけが薄着という違和感は体重減少への対策を知ったことでなくなっていた。

駐輪場に自転車を置き、校舎に入って階段を駆け上がった。二階の教室に入った良を迎えたのは、クラスメートたちの歓声だった。

「奇跡の生還、おめでとう」

皆、口々に話しかけてくる。普段は話をしない女子までもが、「すごいわ、暗い山道を一人で歩いたんだって」とにっこりしながら寄ってきた。

「へ？」

佐那河内村で起こった山火事のことには新聞に取り上げられていたが、良が、トレイルラン大会で行方知らずになったことは一部の人がしか知らないはず・・・

既に登校していた圭太と新一を睨んだが、「何も言っていないよ」とばかりに肩をすくめた。

理由はすぐにわかった。一人の生徒の父親が、あの村役場に勤めて

いて、それで噂が広まっていたのだ。

ヒーローのような扱いに、くすぐったいような感じがしたが、悪い気はしなかった。

やがて、チャイムが軽やかに鳴った。たった二週間だけの冬休みだった。が、懐かしく胸に響いた。生徒はそれぞれの席についた。

「ねえ、今日って、席がえあるよね」

隣の席の田代みずすが、目をぱちくりさせながら聞いてきた。

「まあ、新学期だからね」

「残念だけど、今日でお別れね」

良は苦笑いを浮かべた。まったく、そんなことよく言えたもんだ。みずすは圭太に憧れている。斜め前の背の高い少年にちらりと投げたトロリとした視線が、何よりの証拠だ。スポーツ万能で、話も面白く、おまけにスタイルもいい圭太に憧れている女子は多かった。

建てつけの悪い引き戸をガタつかせながら、担任の末本先生の大きな体が、ぬうつと入ってきた。新学期なのに、いつものよれよれのジャージ姿。それがパンパンにふくれている。きつとぶ厚いセーターを着込んでいるのだろう。

「皆さん、新年、あけましておめでとーございます」

スポーツ刈りの頭を丁寧すぎるほどに下げた。

「どうしちゃったの、そんなよそむけの挨拶して」

ひとりの女子が茶化した。ずばらな先生がすっかり挨拶するなど、四月の担任紹介以来だったのだ。

「新年ともなれば、僕だって気を引き締めるさ。それに、今日は新しいクラスメートもやってきたしな」

先生は頭をすりと撫でて笑うと、おもむろに廊下に顔を向けた。

「こちらにどうぞ」

高校で転校生があるなど、ひどく珍しいこと。えーとばかりに皆がのぞきこむ中、一人の少女が教室に入ってきた。

長い黒髪の少女は、教壇に立つと深く頭を下げた。その動きは、まるで猫のようにしなやかだった。そしてゆっくりとあげた顔に、大きな瞳が黒く輝いていた。

「あっ！」

中央列の一番前に座る新一が声を出し、圭太と良に振り返った。小さく前を指さし、祈るような手の形を作った。

新一が言おうとしていることはすぐにわかった。圭太も気付いたよ
うだ。

『トレイルラン大会で見た女の子、この子だよ』

今度は、圭太が振り返った。

『本当かよ、良』

良は曖昧に首を捻った。でも見覚えはあった。家のすぐ近くに引越してきた女の子だった。

「なんだ、知り合いか」

末本先生が首を突き出し、ぎょろりと新一を見た。

「いや、どこかで会ったかなあと思っただけです」

新一は恥ずかしそうにうつむいた。教室に笑い声が溢れた。

「慌てん坊の新一はさておいて、転校生を紹介しよう。佐那河内村から引越してきた犬神蒼君だ。本校の佐那河内分校に通っていたのだが、家が、先日の山火事にあい、こちらに転居、転校となった。いろいろ大変なこともあるだろうから、皆、協力してあげてくれ」

「犬神 蒼です。よろしくお願いします」

再び深く頭を下げた少女に、皆は盛んに拍手を送った。少女は顔をしっかりと上げ、にこやかに微笑んだ。

「うっ！」

良は思わず声を立て、椅子から落ちそうになった。

ほんの一瞬だったが、少女と目が合ったのだ。その瞳は青白く光り、口は耳元まで大きく切れ込んでいた。長い黒髪には、大きな耳が突き出していた。まるで狼だった。

先生が呆れた顔を向けるなか、良は目をしばたいた。今見たのは錯覚か、大柄な体の横に立っているのは、自分より少し小柄な可愛らしい少女だった。

「どいつもこいつもといったところだが」

苦笑いを浮かべた先生が、教卓の下に置いていた模造紙を取り出した。黒板に広げながら丸磁石で留めていく。教室がざわついた。

「皆が年末にくじ引きした席替えの結果だ。よく見て、席を移動しなさい」

みずずは、茹で上がったような赤い顔になっていた。ついに憧れの圭太の隣になったのだ。良には目もくれずに、ふらりと立ち上がり、机を引きずって廊下側に移動していった。

良の席は窓際が一番後ろになった。隣はおらず、一人だけはみ出ししている。

「良、寂しがるなよ」

腰を下ろしたところに、先生が、教壇の横にあった机を高々と持ち上げながらやってきた。後ろには、椅子を運ぶ少女の姿があった。

「おまえの隣は蒼君だ。新年早々ついてるな」

こそりと耳打ちし、先生は教壇に戻った。良は体がカチンと固まってしまった。隣に座った転校生には目を向けず、じつと窓の外を眺めた。

よく覚えていないが、自分が落ちた穴の近くにいた少女。一瞬だけだったが、狼に見えた少女。その娘が隣にいて、しかも、近所に引っ越してきた。

偶然だとは思えなかった。もしやこの娘は、神隠しから脱出した自分を見張りにやってきたのか。

いや、穴に落ちる時、「危ない！」と叫んだような気もする。すると、悪いものから守ってくれるためにやってきたのか。

「あのう」

澄んだ声がした。良は首の筋肉を軋ませながら、なんとか顔を横に向けたむけた。日の光の当たる中、色白の顔が笑っていた。

「私、町の学校のこと、あまり知らないの。いろいろ教えてね」
愛らしい話し方に、心にほんわかと温かいものが広がった。

『イカン！うわべの可愛いらしさに油断してはダメだ！とにかく、この娘は何かを隠しているに違いない』

廊下側の席でみずずにうつとりと見つめられている圭太が、チラチラとこちらを見ていた。また列の先頭になってしまった新一は、気掛かりなように首を揺らしていた。

「いいか皆、これは大切なことだぞ」

末本先生の声が教室に響いた。

たぶん、これからの行事予定や、新学期のお決まりの話をしているのだろう。心が騒いでいるせいか、何を言っているのか頭に入っていないかった。

やがて、黒板の上のスピーカーからくぐもった声が聞こえはじめた。いつもなら体育館でする始業式だが、あまりの寒さに、教室で校長の話聞くことになったのだ。

末本先生の大きな体が横を通った。

「背筋、伸ばしてな」

丸まっていた背中を、大きな手で叩かれ、良はよけいな思いを振り払った。

その後、休み中の課題を各教科の係に提出して、生徒たちは各々の掃除場所に散っていった。良は玄関掃除。席が隣なので、当然、転校生の蒼は同じ場所だった。箒を握って横目で様子を窺っていたが、蒼は、他の女子にわからないことを聞き、ときばきと動いていた。掃除を終えて教室に戻る時、圭太と新一が走り込んできた。

「良ちゃん、転校生、何か言っただけだった？」

「うんや、なんも」

「でも、可愛いよな。新一の女の子を見る目もなかなかのもんだ」

「それほどでもないよ」

珍しく圭太に誉められ、新一はにたりと頬を弛めた。

良は、二人の脳天気さを分けてもらおうと、無理矢理にかにかと笑った。

11・交通事故

昼を過ぎた二時、野球部の掛け声がグラウンドから聞こえている。殆どの生徒が帰ってしまった後、良たち三人は、たらたらと自転車を漕いで校門を出た。

「ああ、腹減った。おまえのせいだぞ。漢字ぐらい見ておけよ」
良は、体を縮めている新一に言った。

「面目ない」

新一はうなだれながら頭を小さくかいた。

「そう言うなって。俺たち仲間じゃないか」

圭太が腕を伸ばして肩を叩いてきた。

「まったく。こんな時に仲間かよ」

良は唸った。不思議な転校生のことは、すっかり頭から抜け落ちていた。

三人は学活を終えて教室を出る時に、末本先生に呼び止められた。冬休みの宿題の読書感想文を写し合ったことがバレってしまったのだ。掃除の時間、先生は皆が感想文を出したかチェックしていたのだが、そこに妙なものが出てきた。

二つの感想文の本の題名の漢字が、同じように間違っていたのだ。

「はて・・・」と内容を見てみると、まったく一緒。

「では、他に同じ題名の本は」と探せば、もう一つ出てきた。書かれた内容は二つとほとんど同じ。先生は太い腕をまわして三人を捕まえると、楽しそうに言った。

「選んだ本も感想も一緒のお友だち。今日は高校生の必修漢字にチャレンジしよう」

と、三人は、わら半紙の裏表を埋め尽くすほどの漢字を書かされた。それでさつき、やっと解放されたところだった。感想文はもう一度、書かされるはめになった

良は、ハンドルをふらつかせ、下を向いている新一が可哀想になった。不器用なほどの正直さがある新一の失敗を見過ごした自分も悪かった。

「もういいよ。気にするなって」

「そうくると思った」

新一はにこりと顔を上げると、とぼけたように寄り目にした。

「今日は反省のために、ずっとこの顔をしておくよ」

三人は笑い声をあげながら大通りに出た。

「じゃ、また明日」

「おう、バイバイ」

交差点で三人が別れてすぐのことだった。

良の耳に甲高いきしみ音が突き刺さった、続いて重い衝突音。胸騒ぎがして、ハンドルを切り返して走った。見れば、交差点から少しはずれた歩道に、白い軽自動車が乗り上げていた。ブロック塀にボンネットごと自転車をめり込ませている。

そこから十メートルほど離れたところに、赤いダウンジャケットを着た人が倒れていた。

『まさかそんな』

横断歩道を渡った良の目の前で、頭から血を流して横たわっているのは、さっき別れたばかりの新一だった。

「新一！」

呼びかけたが返事はなかった。息をしているのかさえはつきりしない。

「動かしちゃだめだ。誰か救急車を」

新一に手を伸ばそうとしている良に、自転車で走り込んできた圭太が厳しく言った。集まってきた大人の一人が、ふと気づいたように携帯電話を取り出した。

永遠とも思えるほどの時間だった。周りにある物が全て止まって見えた。どこかでサイレンの音が聞こえる。まだずっと遠い。

『もしや、病院でしたようにできるかも』

良は稲妻が走るように閃いた。立ち上がって自分の短い影が、横たわった体に当たるようにした。

『お願いだ、息を吹き返してくれ』

でも、新一の目は閉じたままだった。圭太が押さえている頭からは赤い血が溢れている。

『こんな時に駄目なのか』

ウオオーン！

どこからか、高い遠吠えが聞こえた。

「安西君、そっちじゃないわ」

少女の声が響いた。交差点の向こうに、犬神蒼が立っていた。

大きくふった腕の先は、あるところを指している。黒いタイヤの筋がついたの縁石のあたり、軽自動車が乗り上げた所。

そこに新一がいた。

輪郭がかなりぼやけ、ざらついた白黒写真のようだが、間違いなく新一だ。別れた時と同じように寄り目をしている。どんどん透けてきている。

「消えちゃだめだ！」

良は、もう一人の新一の元に駆け寄り、腕をまわした。手は体を突き抜けた。触った感覚はないが、ドライアイスの煙のように冷たかった。新一の魂みたいなのは、確かにここにいる。

「不思議な力、影の力、なんでもいい。新一を助けて」
必死に祈った。

一瞬、自分の影に漆黒の液体が広がったように見えた。すぐにも、それはペロりと地面から剥がれた。黒いヴェールのように新一の魂をおおっていく。膝がガクガクと震えはじめた。体の力がどんどん抜けていく。

気がつくくと、目の前にいた新一はいなかった。背後から歓声があが

った。振り返った先に、新一が立っていた。

「よかった。助かったんだ」

救急車が停まるのを見た良は、地面に崩れた。

むりやり担架に乗せられて走り去った新一を見送ったあと、立ち上がろうとした。しかし、だめだった。体に力が入らない。油断すると、このまま横になってしまいそう。そこに一台の車が走り寄った。「蒼、影は、まだその子に？」

運転していた男が窓を開けて聞き、側に寄っていた蒼が頷いた。

男はそのまま車から降りると、力の抜けた体を軽々と抱きあげ、後部座席に運び入れた。

『誘拐？いや、男は彼女の名前を言った。謎の転校生の仲間。僕はどくなつてしまっただ』

抵抗しようにも、体には力が入らず、声も出なかった。すぐに蒼も横に座った。そっと腕を伸ばし、良の手を握りしめた。

男が運転席についた時だ。助手席のドアが勢いよく開き、圭太が乗り込んできた。

「おじさん、良をどうかしようつたつて、そうはさせない！」

「鈴木君、今、安西君は、自分の影のエネルギーを使い果たしてしまったの。早く助けないと、今度は、安西君の命が危ないわ」

顔を上げながら蒼が言った。

その真剣な顔に、圭太は今にも男に殴りかかろうとしていた手を引っ込めた。

「じゃあ、どうするっていうんだい」

「この人は、私のお父さん。これから私の家について、エネルギーを元に戻すのよ」

「この子は？」

「クラスメートの鈴木君よ。車にひかれた子もそうだけど。二人ともこの前、山に来ていたの。少しだけど、話も聞いているみたい」

「鈴木君とやら、わしらは君の友人を救おうとしている。これから目にするごと、誰にも話さないと約束できるなら、君も連れていこう」

圭太は、うつつ！と唸りながらも頷いた。

運転席の男、蒼の父は静かにアクセルを踏み込んだ。

12・エネルギーの復活

五分とかならなかつたに違いない。車はすぐに蒼あおいの家についた。休む間もなく、良は二階の一室に運び込まれ、縦に並べられた座布団の上に寝かされた。

瞬きもせずに睨みつけている圭太を後目に、蒼の父はてきぱきと動いた。

長押の両端に太い紐を張り、姿見のような大鏡を、二枚重ねて吊り下げた。そして一度部屋を出ていき、戻ってきた時には、フェンシングの剣のような鋭い棒を握っていた。

「何を」

漏れ出した圭太の声に応えることもなく、棒を天井にぐいと突き上げた。

ゴツ！

屋根瓦か、重い物が割れた音がした。そして小さく穴の開いた天井に、これまた小さな透明な石をはめ込み、黒い蓋でおおった。

蒼は良の横に座り、ずっと手を握り締めてくれていた。その手から流れてくる温かいものがなければ、すぐにも意識を失ってしまっていたに違いない。

ほどなく静かにドアが開き、老人が入ってきた。

「遅いわ、長老様」

「町なかで、おまえの呼び声は聞いたんじゃが。なにせ、昼間から変化へんげして駆け戻ってくるわけにはいかんでの」

老人は良を見下ろして微笑んだ。

「坊や、体重が減ってしまう知り合いは救えたかの」

古風な着物姿に、長い白髪と髭を生やしている。図書館で会ったおじいさんだった。

「凝集性をなくして消えゆく生体の光を元に戻すには、想像もつかぬほどの力を必要とする」

「また、このじいさんだ。何を言っているんだい？」

圭太が蒼に聞いた。

「安西君は、この世から消え去ろうとしていた三田君の魂に、事故で受けた大怪我さえ治してしまうようなエネルギーを注いで元の肉体に返したの。それで、自分の命のエネルギーをほとんど使ってしまったの」

「そう言われれば、わかったような気がするけど」

煙に巻かれたような顔をした圭太は、とりあえず頷いた。

窓の外にしめ縄のような物をぶら下げた蒼の父は、ガタつく雨戸を閉めた。

「ならば、はじめよう」

老人の声とともに、蒼は握っていた手をそつと離れた。

鼻を摘まれてもわからないような暗闇の中、良の意識は突然に消えた。

気がつくと、周囲を数匹の獣が息を荒立てて走っていた。熱気が体を包み込んでいる。内緒で父のウイスキーを飲んだ時のように、心臓がバクバクと音を立てていた。

上方で何かが外れ、耳の横に転がった。

暗闇の先に、パチンコ玉ほどの大きさの青白い光が浮かんでいた。見覚えがあった。洞窟の中で見た光だ。

ウオウオーン・・・

獣たちは身の毛もよだつ吠え声を立て、さらに勢いを増して走りはじめた。その生気を吸収するように光は強くなっていく。やがて、それは夜空に浮かぶシリウスのごとく輝きはじめた。

と、体の上に闇よりももっと黒い物が浮かび上がった。それは煌めく光の中で、翼を伸ばして羽ばたきはじめた。

まるで嵐の中に迷い込んだかのように、風が強く体を打った。

「うわっ」

圭太の叫び声が聞こえた。

「捕まえるのじゃ。影の力を我がものに！」

しゃがれた声が唸った。

心臓のバクつきに押されるように、良は立ち上がった。自然に両腕が上がり、羽ばたくように動いた。すぐ上にある黒いものの翼と重なっていく。

体がふわりと浮かび上がった。胸の辺りが燃えるように熱い。

『どこかにこの熱を吐き出したい』

「今じゃ」

ガタリと雨戸が引かれる音がした。

焼き付くような光が体をおおった。鼻の先に、牙を生やした黒い怪物がいた。

背中に蝙蝠のような翼をもった怪物は、見る間にも大きくなっていく。それがカツポリと口を開いた。

「坊や、鏡に 真の我が身をのぞくのじゃ」

「安西君、自分を取りもどすのよ」

『たしかに僕は安西良。でも、目の前の怪物も自分のような気がする。じゃあ、僕は？』

バリッ！

鏡が割れ、怪物の姿が粉々に砕けた。代わりに見慣れた自分の顔が見えた。と思つたら、急に体が沈み込み、腰を強く打った。

「痛たた・・・」

良は座布団の上で、体を丸めて唸った。足には圭太がしがみつき、すぐ横には、手から血を流した蒼が立っていた。周囲には割れた鏡が散らばっていた。

光が射し込む窓際で、老人がにこやかに笑っていた。蒼の父も口元

をほころばせている。皆、嵐の中を歩いてきたかのように、髪の毛がクチャクチャになっていた。

「こんなに汗をかいたのは何年ぶりじゃろう。たまには変化して思う存分駆け巡るのもいいものじゃ。雪の積もった森の中じゃったら、なおさらに気持ちよかったじゃろうて」

「確かに」

落ちくぼんだ目を若者のように輝かせて話す老人に、蒼の父が頷いた。

「俺、すごいもの見たような気がする・・暗い中だったけど、犬神さんたちは狼になっていて、良は蝙蝠の化け物になっていた」
畳の上にへたりこんだ圭太が呆然といった。

「犬神さん、教えてくれるよね。今、何が起こったか。君たちが何者か」

良は、滴る汗を拭いている蒼に聞いた。

「いいわよね。長老様？」

「今さらこそこそしても仕方あるまい」

蒼の問いかけに老人は頷いた。

13・影を守る一族

ピン、ポロン

間抜けたような音を立て、チャイムが鳴った。

「お客さんじゃ。おそらく、坊やの救った魂がここに導いたのじゃろう。下に降りよう」

良と圭太は、老人の後について階段を降りていった。蒼とその父は、割れた鏡を片付けるために部屋に残った。

居間のソファーにぎこちなく座った二人の前に、老人に案内された新一が、目玉をキョロキョロさせながら現れた。

「あれっ、良ちゃんに圭太君、なんで？」

不思議そうに首を傾げている。

「おまえこそ、なんで来たんだよ」

「さては犬神さんがお目当てだろう」

「違っつて。救急車で病院に運ばれて、母さんが飛んでやってきてお医者さんが診ただけけど、なんもなくて・・そんで家に帰って、ぼんやりしてたんだけど。急に自転車に乗りたくなって、そんでママチャリを借りて・・気がついたら、この家のチャイムを押していたんだ」

新一は赤い顔をしてべらべらと話した。

「言い訳するなって」

突っ込む圭太の横に、鼻を膨らませた新一がどっかと座った。

ソファアの空気が移動して、反対側に座る良の体が十センチばかり飛び上がった。いつもなら、このままランポリン遊びがはじまっただろうが、そんな場面ではない。

「仲よし三人組がそろったの」

昔ながらのストープの上にヤカンを置いた謎の老人が、三人の前に座った。新一が先日のおじいさんだよねとばかりに、膝の上で指を

立て、そうだとばかりに圭太が頷いた。

「どうしちゃったの。三人とも、借りてきた猫みたい」

二階から降りてきた蒼が、笑いながら老人の横に座った。蒼の父は向かいにあるテーブルの椅子を引いて腰掛けた。

「坊や、いや、安西君。どこから話をはじめたらよいかの？」

老人が質問を投げた。

「えーと」

良は困った。

たった今、二階であったこともインパクトがありすぎたし・・・彼らは自分の後をつけるみたいに引越してきたし・・・天井に鈍く光る蛍光灯を見ながら、あれこれ考えた。

「もしかして、おじいさんも、トレイルラン大会の時に祈りしていた？」

新一がいきなり口を開いた。

「おう、そうじゃ。まずは、そのあたりからじゃな。蒼、説明してあげてくれ」

老人は、すっかり汗のひいた蒼に顔を向けた。

「私たちは、竜の影を守る一族なの」

いきなり、すっ飛びそうな話からはじまった。でも驚きはしなかった。不思議なことを説明するのに、変な話をするのは、むしろ当たり前だ。

三人は透き通った声に耳を傾けた

「あのトレイルラン大会のコースの下には、普通の人々が、誰も知らない洞窟が広がっているの。その中に、自然が何万年もかけて作り上げた竜の形をした岩があるの」

「竜・・・えーと、あの牙を剥き出した怪物みたいな形の？」

良は思わず身を乗り出した。

蒼は頷きながら続けた。

「ええ、あの鍾乳石でできた岩は、洞窟の天井から地上に伸びた水晶が導いた光を、浴び続けていたの。さつき青白く光る石を見たでしょう。あれが、その水晶のかけらよ。その光で、岩はごく薄い影をもち、その影は力を蓄えていったの。そしてあの日、洞窟に落ちた安西君に、影が宿ってしまったのよ」

「確かに洞窟の中で光の点をみた。けど竜の影といっても、ただの岩の影でしょう。なんで、力など持つことができるの」

「あの洞窟の真上には、ずっと昔、大きな祭壇があったわ。日々のように人が訪れては、日の光が途絶えることのないように祈っていたのよ」

「太陽信仰だね。農業の豊作や、病気にならないように祈ったりしてたっていう」
新一が呟いた。

学校の成績は悪いのに、妙なことはよく知っている。それもきつと百科事典に載っていたことだろう。

「そう。ここがポイントなんだけど。ねえ、明るい光を望んでお祈りする時に、一緒に存在するものってなんだかわかる？」

「そりゃ、明日天気になりますようにとか、好きな女の子と上手くいきますようにとか、光と一緒に祈りすることって、いろいろあるよ」

圭太が答えた。

「まあ、それはそうだけど」

「それは影とか、暗闇だよ。光が見えるためには、その輪郭をあらわす暗さが必要なもの。光だけが溢れていたら、光があることさえわからなくなってしまう」

今度は良が答えた。

先日、一日じゅう太陽に当たっていて、そのことは十分に実感していた。ずっと日なたにいたら、最初に感じた、眩しさがわからなくなっていた。

「その通りよ。人々が明るい光を強く願えば、それと一緒にある暗

い影へも、心のエネルギーが注がれることになるの」

「それで、祭壇の下の洞窟にあった岩の影に、祈りの力が溜まっていった・・・」

圭太がまだわからんと唇を歪ませた。

「ええ、神秘的な一致なのだけど、祭壇の遺跡には、太陽の影として竜の形を刻んだ石盤があったわ。」

人々は地面の下に、大自然が作った竜の像があると知ってか知らずにか、光を求めながら竜の影を強く念じていたのよ。それで地下にある影は、地上での祈りと強く同調して、力を蓄えていったの。影が力を持つからには、鍾乳石でできた像も単なる岩とは言えないわ。それで、私たちは、竜と呼んでいるの」

「うーむ」

あれこれ想像するように新一が手をまさぐる横、圭太が納得したように深く息を漏らした。一方、良の口からは、今にも言葉が飛び出さんとしていた。

「僕は、その竜と言葉を交わした、あれは単なる鍾乳石などではない・・・

自信はあった。けど、はて どんなことを話したか・・・

「でえーと、犬神さんたちは、穴の周りで何をしていたの」

グツと言葉を飲み、霞がかかった頭を切り換えて聞いた。

「それは穴を塞ぐ時間がなかったからよ。あの日の朝、地震があった、洞窟の天井に穴が開いてしまったの。運悪くトレイルラン大会も始まってしまった。私たちは結界を張り、人の目には見えないようにしていたの」

「けど、頭がフラフラの新一と僕には見えただね。で、僕は落ちた。でも、おかしいよ。気づいた時には、穴なんて開いてなかったよ」

「その話は、蒼には荷が重い。わしが話そう」

話しくそうに口をつぐんだ蒼に代わって老人が答えた。

「わしらは、安西君が落ち込んでから、近くにあった岩を移動して穴を塞いだ。それでへたりこんでいた友だちを道路に担ぎ出してから、洞窟の奥に戻った。」

案の定、安西君には竜の影が宿ってしまった。影は、岩に頭を打ちつけ重傷を負ったはずの君さえ、すでに治していた。

そんな力をもつ影を宿した者が、この世に現れたら。どんなことが起こるかわからない。

わしらは洞窟の中で、君が命を落とし、影が離れるのを待つことにした。それで入口も塞いだ」

「そいつはひでえ話だ」

圭太が顔をしかめた。

「もちろん、蒼は反対したんじゃが」

「でも、僕は脱出した」

「わしらは見落としていた。祭壇の遺跡の周囲に火打ち石が落ちていたことを。たぶん安西君は、無意識のうちにそれを使って、竜の影を呼び起こし、力を使ったんじやろう。誠に怖ろしい力じゃ、山に縞模様をつけるような、炎の柱を吐き出すなぞな」

「じゃあ、あの山火事の犯人は、僕だったってわけ」

良は身震いした。そんなこと覚えてもいない。ただ、ジャージの襟が焦げ付いていただけだ。

老人は、良の目をじっと見つめた。

「影の力が使えるようになった君じゃが、そのあと、かの力だけを使うことはなかった。むしろ人間が元々持っている自分の影の力を中心に使っていたのじゃ。」

ほれ、今にも死にそうな人は、影が薄くなっているというじやろう。ただの譬えと思われとるかもしれんが、実際に、命ある者がもつ生体の光が弱くなり、その作用体として外に投影される影も薄くなっておるんじや。」

我々にとって、影は、単なる光による縁どりではない。光は影を支え、影もまた光を支えておるのじゃ。

君は病人たちや友人に、自分の光の作用体を重ねて力を与えた。強い影を取り戻した彼らは、命の光を再び輝かせて元気になった」

『病人・・病院での、あの実験・・』
良は驚いた。

自分は、この老人にずっと見張られていたのだ。とりあえず、悪いことは起こってないし、見守られているともいえるが。まあ、そのことは後回しだ。

「僕は影の力を使った。かわりに体重が減ってしまった。それで、光に体に充滿するように祈って元にもどったんだ。つまり、生体の光を強めた。

じゃあ、たった今、僕が元気になったのはどうして？光に祈ったわけでもなく、小さな星のような光を見ただけなのに」

「良ちゃん、今、具合が悪かったの？」

新一が初耳とばかりに首を伸ばした。

「こいつ何者だよ。良が具合悪かったかときたもんだ。おまえ、なんで病院に担ぎ込まれたんだよ」

圭太が呆れたように肩をすくめた。

「だから、それがわからないんだって。白い自動車が飛び込んできて、あとはさっぱり」

「本当に何も覚えていないのか」

「うん」

「くそう、僕のおまえへの友情は伝わらなかつたってわけ」

「そんなことないわ。安西君の思いは、しっかり三田君の魂に刻まれたのよ。だからこそ、こうやって訪ねてきたんじゃない」

軽く言った言葉だったが、蒼が真面目に反論した。

老人が咳払いをして話を続けた。

「安西君が元気になったのは他でもない、その体に取り憑いている影の力を使ったからじゃ。わたらの呼びかけと、自分を作り出した

光の源に、竜の影ははつきりと目覚めた。

友だちを救いたい一心で、元々の自分の影の力をほとんど使ってしまった安西君は、外に現れた竜の影と体を重ねて十分な力を取り戻したんじゃ」

「ほんと、さつきはびつくりした。良があのまま怪物になってしまっ
うんじゃないかと思った」

「漲る力に圧倒され、竜の影そのものに変化し、人としての心を忘れてしまうギリギリのところだったが、影の映し身を壊され、元の肉体に戻ったんじゃ。」

一度、いや洞窟からの脱出も含めると、おそらくは二度目の経験。

これからは、もっと楽に元に戻るかもしれん」

「これからって」

それは、また自分が変なものに変身してしまうかもしれないということ？良は全身にぞわりと鳥肌が立つように感じた。

「大丈夫よ。私たちがいるわ」

蒼が優しく話した。その手には、血が流れた跡が残っていた。化け物の姿を映した鏡を壊してくれたのは、蒼だった。

「ありがとう、君のおかげだったね」

良は丁寧に頭を下げた。

「竜の影を守る。それは、その力の使い方を、宿り主に教えることでもあるわ。それが私たちの仕事よ」

蒼の言葉に、大人たちが静かに頷いた。

少しして良は尋ねた。

「僕、今日、犬神さんの顔が一瞬、狼に見えたんだ。さつき圭太も言っただけど、僕の周りを走っていた獣って、犬神さんたちだよな。それが影を守る仕事と関係しているの？」

蒼はにつこりと眉をあげた。

「私たちには、影を守る狼の精霊が宿っているの。必要があれば、その力を借りて変身するわ。影の力をもつあなたには、その姿が見

えてしまったのかもしれない」

「狼・・・」

新一が背中を引いた。蒼のかわいらしい外見に惹かれていたので、シヨックを受けたらしい。老人が遠い目をして話した。

「はるか昔のことじゃよ。わしらの先祖の一人が、あの洞窟の前で、一匹の雌狼に矢を射た。ところが彼は二つの命を奪ってしまった。狼の腹の中にいた赤子まで殺してしまったんじゃ。狩人として犯してはならないことをした先祖は、命を絶とうと洞窟に入り込んだ。だがそこで彼は、この世に生まれ出ようとしていた赤子の精霊に宿られてしまったんじゃ。」

精霊は言った。

《光を見ようとしていた私の命を奪った者。おまえは生きなければならぬ。そして、光と共にある大いなる影を守り続けるのだ》と。それからじゃわい。先祖の血を受け継いだ我ら一族が、竜の影を守るようになったのは。一六の歳を迎えた者は、それぞれが誕生の日ごとに、影の元に向かい、大いなる力の波を感じとりながら、見守ってきた」

「どう、わかってもらえたかしら」

良は頷いた。隣に座る二人もこっくりと頭を下げた。

14・育みの気

ストーブの上、ヤカンの蓋がカタカタと震えだした。

蒼が立ち上がり、皆の前に茶碗を並べてお茶を入れてくれた。まったく、このかわいい娘に狼の精霊が宿っているなんて・・クラスの連中に話しても、誰も信じてはくれないだろう。

「犬神さん、お母さんは？」

お茶をすすりながら新一が聞いた。良も気になっていたが、失礼なことかと黙っていた。圭太がきつい目をして新一を睨んだ。

「鈴木君、気にしないで」

蒼は朗らかに言った。

「お母さんは私が小さい頃に亡くなったの。光の神を信じる一人の修験者に殺されたのよ。こんな話、しないほうがいいかしら」

良と圭太はうつむいたままだったが、

「うん、もつと聞きたい」と新一が答えた。圭太がその太腿をぎゅつとつねった。

「犬神さんが、嫌でないんなら」

良は顔をあげ、声を詰まらせながら言った。

「せっかく、いろいろ話したのだから」と蒼は話を続けた。

竜の影を守る一族は、十年ほど前には、二十人以上もいたそうだ。

山の一角に大きな結界を張り、麓の人には知られずに暮らしていたところがある日、光の神を信じる一人の修験者に発見されてしまった。修験者は、一族の人が狼の精霊を宿していることを見ぬき、さらに邪悪な影を守る者と思ひ込み、攻撃を仕掛けてきた。

人々は狼に変化して戦ったが、修験者のクギウチの術によって動きを封じられ、次々と殺されていった。最後に残ったのは、一族の長老と、蒼とその両親だけだった。修験者は、熊をも打ち倒す太い杖を振って四人を追いつめた。

最初に蒼が狙われたが、母がそれを庇って打ち倒された。二人を守ろうとした父も激しく打たれた。

まだ狼に変化する方法を知らなかった蒼は、倒れている二人の横でただ泣くしかなかった。近くにいた長老が、息も絶え絶えに訴えた。「おまえの信じる光の神は、子どもの泣き声さえきこえないのか」と。

その言葉に「わからぬ」と答えた修験者は、急に狂ったように叫び、山の奥深くに駆け込んでいったという。

それから修験者は、姿を現していない。

結局、一族のなかで生き残ったのは三人だけだった。

三人は、竜の影の眠る洞窟近くの家に住み、鍾乳石で作った装飾品を町の雑貨屋におろして生計を立てていた。

蒼は、昼間は山の麓の学校にかよい、夜は、一族の歴史を途絶えさせないように、様々な知識を長老から教え込まれていた。

重い話だった。

車で一時間も走れば行きつくような山の中で、そんなことがあったなんて。

竜の影。遙か昔から、一族の人に守られてきたもの。多くの人々が犠牲になった原因。それを守るために、蒼たちは近所に引越してきた。

「もしや、君の家が火事で焼けたというのは、僕が・・・」

「それは事の流れというものよ」

良の肩に、蒼の一族の歴史がズンと置かれたようだった。

「さて、安西君、君に聞きたいことがあるのじゃが」

老人、影を守る一族の長老の声が、静まり返った部屋に響いた。

「君は、銀の衣の三郎太と名のる幻人から、禁じられた食べ物を食べてもよいものかと尋ねられたそうじゃが、それが、どういう物かは聞いておらんかね？」

良は長老の声に、我に返りながら答えた。

「それについては何も」

長老は、蒼の父に顔を向けた。

「ここ数日、わしは「育みの気」が減ってきているように感じるのじゃが。先ほど変化した時も、ごくわずかな息苦しさを感じた。どう思う？ 聖」

「たしかに長老のおっしゃるとおりです。わしも感じます。ここ数日の異常な冷え込みは、育みの気が減少しているせいかと思われるます。しかし、そのことと、幻人たちが口になっている禁じられた食物が関係しているとは、はっきりとは申せません」

今まで黙っていた蒼の父が話した。落ち着いたものの言い方だった。いつもべらべらしゃべり、時どき、話の要点がわからなくなる良の父とは大違いだった。

「うーむ、昼を過ぎても、葉についた霜は消えず、温度は下げるばかり。木々そのものも凍り始めた。川の水さえも、一部凍っている。一方、天気予報では、昼間は温かくなるといっておる。科学の目では、育みの気は見えないということか」

「そう、はずれてばかり。動物園でも凍え死んでしまった動物が出たって、ニュースでいってた」

新一が口を挟んだ。黙っているとばかりに、圭太がその膝を叩いた。

「「育みの気」って、いったいなんですか」

良の質問に、長老は深呼吸をするように大きく腕を広げた。

「それは、我らは感じるができるが、一般にはまだ知られていないものじゃ。未発見の素粒子とも言えるじゃろうか。「育みの気」は自然界が必要とする力・大地と共にあり、それにより地は活力を得て、太陽の温かさを吸収する。また、気を吸収した水は、川となって流れ、注ぎ込む海に豊かさをもたらす。木々や草が、春になって芽吹くのも同じ力によるもの。もしそれがなくなれば、自然は全て凍りついてしまっじやろう」

「人間もですか」

長老は複雑な表情を浮かべた。

「人間は、純粹に自然のなかで生きているわけではない。ただ、自然界が生み出したものにちがいはない。何かきっかけがあれば、やはり他のものと同じように凍りつくじやろう」

「長老さん、ほら、良の宿している影の力があれば、怖いものなんてないんでしょう？」

圭太が明るく聞いた。

「たとえ莫大な力をもつ竜の影でも、自然界全体を支える「育みの気」の力にはとても及ばない」

長老は少し顔を歪ませて良を見つめた。その顔には、掴み所のない笑顔も混じっていた。良の胸に不安がよぎった。

「そんな重大な話を聞かせるなんて。長老さん、僕に何かやらせよう？」

「育みの気がこのまま減ったとして、何が起こるかは、はっきりとはわからない。

しかし、もしもの時に動けるのは君じゃ。君は竜の影を宿している。もちろん、わしらは影を守るために、精一杯に君を助ける」

力強く話した長老は蒼に振り返った。

「あれを出しなさい」

「はい」

老人の声に頷いた蒼は、胸に掛けていた小袋から、透き通った石を取り出した。それは先ほど天井にはめ込まれた水晶だった。

「この石を通る光によって、竜の影は力を蓄えた。持っけていても損はないものじゃ。渡しておこう」

言いながら長老は、テーブルの上に石を置き、横にあった文鎮を叩きつけた。そして二つに割れた石をもった手は、圭太と新一に伸ばされた。

「えっ、俺たちに！」

圭太が驚いた。新一は差し出された石を嬉しそうに受け取った。

「もし、安西君が行動を起こしたら、君たちの支えが必要になるかもしれない。旅は道連れ。そのお守りというやつじゃ」

長老の言葉に、圭太は唇をかみしめながら石を受け取った。新一は慌てて返そうとしたが、もはや老人の手は引っ込んでいた。

「透明な容器に入れて、首から吊しておきなさい」

二人はしずしずと頷いた。

15・影を引きつける穴

二人の友人と別れた良は、家の玄関の前に立っていた。

長老がクラスメートを招いて、引越しのパーティをしていると嘘の電話を入れてくれていた。始業式の日にしては遅くなりすぎたが、怒られることはないだろう。

『けど、きつと先生は家に電話している。居残りはばれてしまってる』

こっそり庭に廻った。窓の隅からのぞいて、母の顔が引きつっていないかを確かめるために。

松、柊、赤い花を咲かせた椿・

庭木は全て凍っていた。冷え込みは朝よりもひどくなっていたが、寒さを感じない良にとっては、別世界の出来事のようなだった。物干竿の下に黒ずんだ小さな塊が落ちていた。

「雀」

腰を屈め、手の中に包み込んだ。羽毛におおわれた体は、冷たく硬かった。いくら寒くても、鳥が凍ってしまうなんて・

『長老さんが話していた通り、育みの気が減ってきているんだ。母さんに怒られる？そんなことを気にしている場合でない』

頭の中でチャンネルが切り替わったようだった。変な影を宿したことについては、きつちり説明されて、不気味さは抜けていた。代わりに、さらりと聞いた育みの気の話が、現実味を帯びた怖さを持ち始めていた。

家に明かりがともった。

テレビの前でスナックの袋に手をかけている満、台所のカウンターに向こうの母さんの姿が浮かびあがった。

いつも通りの光景だった。人間は、植物や動物のように凍ったりしないのかもしれない。でも、何かのきつかけがあったら・

「どうにか できることなのだろうか、どうにか・・・」
つぶやきとともに、開いた手から、雀が飛びたった。

「死んではいなかった」

また凍りついてしまわないかと、ひやひや見つめていたが、小さな点は無事、夕焼けの空の彼方に消えていった。

喜びとともに頭がクラクラした。あんなに小さな生き物でも非常に力を使うのだ。もしも、人が凍りついてしまったら、とてもではないが、たやすく助けることはできそうもなかった。

『ただ、僕にはできることがある！』

見当もつかなかったが、良は、自分が何か途方もないことに足を突っ込んだことに気づいていた。ブルリと武者震いをして玄関に戻り、力強くチャイムを押した。

「早く開けて、お腹ペコペコだよ」

夜も十時をまわり、良は自室に入った。

居残りをさせられたことについて、母さんは怒ったりはしなかった。良が、感想文を書いていたことを知っていたからだ。それでも、帰宅が遅くなることについて、自分で連絡しなかったことを注意された。

都合よく、昼ご飯は残してくれていたので、夕食と一緒に、あつという間にたいらげた。食事の量はすごかったが、「今日は、お祈りしてなかったからね」と、ご機嫌な様子で寢床についた良に、父さんも母さんも、ほっとしたように「お休み」と言った。

「さて、仕事のはじまりだ」

口元を引き締めた良は、カーテンを開けて電気を消し、ベッドに横になった。

『幻人が口になっているという禁じられた食物。犬神さんの父さんは首を捻っていたが、きっとそれが、育みの気の減少に関係している。』

あの三郎太という人にもう一度あって、話をしなければ』
やることは一つ。数日前にしたように、影で散歩するのだ。

あいにく空には薄雲が張り出し、射し込む月の光は弱かった。そのせいか、なかなか目に見えない感触を広げることができなかった。

『リラックス リラックス』

自分に言い聞かせ、ゆっくりと息を吐いた。

心に青白い光が浮かんだ。竜の影を育てた石の光・・・。

体が急に軽くなったように感じた。背中から影が伸びていく。絨毯の感触、玄関の靴のでこぼこ、そして外に出た。

さあ、どちらに行こう。思い切ってイソギンチャクの触手のように、影を放射状に伸ばしてみた。

『できた！』

家を中心として、影は町中の道に広がっていった。アスファルトを這いずるザラザラとした感触を、体全体で受け止めた。

あちらで車のタイヤに轆かれ、こちらで人の足に踏みつけられた。犬か猫か、時おり素早く走り去るものがあつた。

と、ある場所で、地面の下からナイフのように鋭い物が突き出してきた。良は本能的にその切っ先を避けたが、歩いてきた人の足がその上に置かれた。次の瞬間、その足元から分かれた何かが、良の影にしがみつこうとしてきた。

それは、交通事故にあつた新一の魂に似ていた。掴み所のない煙みたいな感じはまったく同じ。でも、ほのかな温かみがあつた。

『この人は、温かさをなくすまいと、もがいている』
良は悟つた。

ついに、人々までが凍り始めたのだ。

『今はあなたを助けることができない』

必死に掴まろうとする温かさを、辛うじて振り切つた。たとえ、強力な力を持った影を宿していても、凍つた人を溶かす力には限界がある。自分がへたつてしまつたら、この奇妙な事件の中で動ける者

がいなくなる。

やがて、人の足元から分かれた温かさは消えてなくなった。後には、棒切れのように立つ二本の足が残るばかり。

良は重い気持ち振り払いながら、影を前に進めた。

その後も、地面から突き出る刃物に貫かれ、温かさをなくす人々の足とすれ違った。

『何が起こってる？これは「育みの気」の問題なんかじゃない。誰かが地面の下から人を突き刺して温かさを奪っている』

あちこちで影の触手は、何かに引きつけられた。でも違う。あの時の吸引力は、もっと強かった。そのうち、町の中心部に伸ばした触手の一本がぐぐつと引きつけられた。

『ここだ』

他の触手との位置を考えると、ちょうど市役所の南側ぐらい。即座に触手をまとめ、一本の先に集中させた。

磁石のように影を引きつけるのは、穴というより、ゴツゴツとした石の塊だった。影は石をまきこみ、その下にとるとると伸びていった。触手の先端が辿り着いたところで、再び影を広げた。

『痛っ！』

広げた先で、焼け付くような痛みを感じた。そこは学校のグラウンドぐらいの広さの土地だった。太い木が密集して立っている。周囲には何か危険な物がある。感覚を研ぎ澄ましたが、人の気配はなかった。

『よし』

数秒とかがらずに、伸ばしていた影を引き戻した。

銀の衣の三郎太はいなかった。でも、彼が住む世界への入口は見つかった。

良は深い眠りについた。

16・凍りついた人

翌日、良は、家の裏の道を走る救急車のサイレンの音で目が覚めた。耳を澄ませば、町のおちこちで響いている。

「運ばれているのは、地面の下から突かれた人」
つぶやいた口元から息が白く伸びた。

室内とはいえ、よほど寒いのだろう。しかし、相変わらず薄着で平気だった。影の力を使っではいけないと厚着をしたこともあったが、息ができなくなるほどに気分が悪くなった。着膨れは、宿った影との相性が悪いようだった。

一階に降り、洗面所で顔を洗おうとして蛇口を捻った。が、カラカラと滑るように回るだけ、すぐにも止まってしまった。

「母さん、水が出ない」

「凍りついてしまったのよ。お風呂もよ」

台所から声が返ってきた。湯船をのぞくと、厚い氷が張っていた。

天井の水滴は短い氷柱つばとなっていた。

台所に入ると、母が濡れ手拭いを渡してくれた。倉庫から引っぱり出した灯油ストーブの前には、ミネラルウォーターのペットボトルが五本も並んでいた。

「その水、冷蔵庫に入れておいたから無事だったのよ。それにしても冷蔵庫が保温庫になってしまっなんて」

トースターの中のパンを見つめながら母は言った。

良は繋ぎのジャンパーに身を包んだ満と家を出た。

「さつきから、救急車ばかり走ってる」

ペダルをゆつくりと漕ぎながら、満が右に左に首を傾けた。

家々の軒先には、朝日を浴びた氷柱が美しく光っている。天気予報のとおり、空は晴れていた。

「今日こそは、暖かくなるよね」

「いや、いくら陽が照っても、温度は上がらないよ」

「どうして」

不服そうな満の問いかけを無視して、良は前に漕ぎ出た。謎めいた答えには、次々と質問がぶら下がるだろう。それは勘弁だった。

「安西君、おはよう」

弾んだ声がした。

振り返ると、白いダウンジャケットを着た蒼が、立ち漕ぎして寄って来る場所だった。満の首が亀のように伸び、寒さにあおられてまた縮んだ。

「兄ちゃん、誰？僕知らないよ」

「佐那河内村から引越してきた犬神さん。クラスメートさ」

横に並んだ蒼の顔をのぞきながら、満は小気味よくベルを鳴らした。

「これから毎朝、このお姉さんと一緒に？」

「ばか、今日はたまたまだ」

兄の急ブレーキに前に出た弟は、ハンドルをぐらつかせながら振り返った。

「お姉さん、兄ちゃんをよろしく。じゃあ」

「まあ、かわいい」

離れていく満に、蒼が微笑みながら手を振った。

灰色に凍りついた街路樹の下に、小さな花が咲いたようだった。

交差点に差しかった。

昨日、新一をはねた軽自動車はもうなかったが、代わりにすぐ先のバス停に人だかりが見えた。救急車のサイレンが近づいている。

良は蒼とともに自転車を降りた。

人だかりの中心に黒いコートを着た男性が立っていた。蠟人形のように身動きせず、顔には霜が降りている。バスを待っている間に凍りついてしまったのだ。

救急車が駆けつけた。人々は、担架を担いだ救急隊員に道を開けた。

「さあ、慎重に！」
声を掛け合いながら、隊員たちはこわばった体を担架に横たわらせ
た。隊員の一人が硬く結わえたネクタイを緩め、聴診器を服の中に
突っ込んだ。シーと口に指を当てる仕草に、見物人は声をひそめた。
「ただ。かすかに心臓は動いている。体は凍りついているという
のに」
隊員は首を傾げた。

「あつ」

良は小さな声を立てた。
たった今、男性の足があったところに、鋭く尖った透明な物が、突
き出していたのだ。ほんの一センチほどのそれは、瞬きする間にも、
アスファルトの照らつきの中に消えた。

錯覚？

横に並んだ蒼の顔を見つめた。黒い瞳は、確認するように下を向い
ている。

「私も見たわ。あの刀の先のような物で突かれて、あの人は凍って
しまったのね」

振り向きもせずに小さく言った。

「そう、温かさを取られてしまったんだ」
良は頷いた。

二人はゆっくりと自転車を漕ぎながら学校に向かった。

人を突く刃について、特殊な力をもつ二人の他は、誰も気付いてい
ないようだった。

『満、平気かな』

凍りついた人を目の当たりにした良は、先に別れた満の事が気にな
った。

「あの刃って、自転車に乗ってたら刺されないよね」

たぶん大丈夫だとは思いますが、安心するために聞いてみた。

「残念だけど、そうとも限らないんじゃないかしら」

「えっ。けどどうやって。だって、今見たとおり、刃の持ち主は地面の下にいるんだよ。宙に浮いているペダルに置かれた足は刺せないので……」

「そうね。だけど、あの刃は地面に溶けるように消えたわ。こちらの世界の論理では説明がつかないということよ。おそらくあの刃は、この世界と隣接する別世界から伸びてきている。下方からという条件はありそうだけど、どの程度の高さなら安全かは分からないわ。もしかしたら、足が着いている所、二階や三階にいても狙われる可能性があるかもしれないわ」

「うーむ」

確かに蒼のいうとおりだった。槍を構えた地底人がこの世界の地下に潜んでいるわけではないのである。

「それにしても、犬神さん、ぜんぜん怖くないみたいだね？あの刃が下から突き出してくるかもしれないのに」

「ええ平気。靴を履いていても、私の足の裏はとても敏感なの。何か変なものが近づくのを感じたら、頭で考えるよりも早く飛び退いているわ」

蒼は少し遠い目をして説明した。わずかに瞳が青く光って見えた。

校門が見えたところで、急に後ろから追突された。

慌てて足をついた良の横に

「出会って二日目で、もう一緒に登校ですか」と細長い顔がのぞきこんだ。圭太のにやにや笑いが鼻先にあつた。後方からは油の切れたチェーンの音が近づいてくる。

「良ちゃん、圭太君、ちょっと待ってよ」

着膨れで雪だるまのようになった新一がやってきた。事故で壊れた自転車の代わりに錆びついたミニサイクルに跨がっている。蒼の姿を見て、荒い息遣いを飲み込もうとしたが、すぐにゼーゼーとやりだした。

圭太の首には、昨日、蒼の家で二つに割った石が揺れていた。鎖のついた透明なバジケースに入れられ、さりげない飾りのようだった。

「三田君、昨日の水晶は？」

真面目な顔をして聞いた蒼に、新一は得意げに首にまわしたタコ糸を引っばった。

「ほら、このとおり、ばつちりだよ」

胸元からは、お守り袋が出てきた。

「この中だよ」

「なんだい、そりゃ。格好悪い」

小馬鹿にしたように、圭太が袋をつついた。

「せっかくの水晶なんだから、明るい所に出しておいたほうがいいわ」

蒼はバッグからポシエツトのような筆箱を取り出した。中にあった透明テープで、お守り袋の外にしっかりと止めた。

「これで、大丈夫」

普段、女の子が筆箱にいろんな物を入れているの見て、首を捻っていた良たちだったが、この時ばかりは感心した。佐那河内村というひっこんだ地域に住んではいたが、蒼もやっぱり女の子だった。

「犬神さん。その石って、そんなに大事なの」

良は不思議に思った。昨日の話では、持っていれば、まあいいからいだったのに。

「ええ。今朝、昨日の晩から起こっている事件について、長老様やお父さんと話をしたの。育みの気の減少は無視できないんだけど、やはりあれは、幻人がやっていることではないかって。

だとしたら、この石を身にまえば平気かもしれないって。ほら、幻人は安西君に丁寧に話しかけたっていったでしょう。だから、竜の影を育てた石の輝きを持った人には、手を出さないかもしれない。もちろん、ただの気休めにしかならないかもしれないけど」

蒼は、良の目をじっと見つめて話した。

「昨夜、町に影を伸ばしたことを知っているわよ……と言わんばかりに。」

「ふーむ、危ないところだった」

新一が頬を揺らしながら、胸の石を撫でた。

「何が？」良は聞いた。

「僕見たんだ。さつき家を出た時、ゴミの収集所で整理をしていたおばちゃんが、急に動かなくなってしまったんだ。怖くなって後ろを見ずにきたんだけど。あれも、幻人にやられたのかも」
へらへらしていた圭太の顔が硬くなった。

「夜明け前に、隣の家で救急車が停まっていた。もしかして、あれも？」

「たぶん」

良と蒼は頷いた。

「うむ。このことを知っているのは俺たちだけってことか。けど、皆に知らせた方がいいんじゃないかな。この町は危ないって。もしかしたら、他の地域では事件は起こっていないかもしれない」

「それは駄目だと思うわ」

圭太の言葉に蒼が首を振った。

「知らせたところで信じてもらえないから。それに町から出ていったとしても、どこからが安全かわからないわ」

「じゃあ、このまま指をくわえて見ているってこと」

圭太が蒼を睨みつけた。

「待てよ。犬神さんは本当のことを言っているだけだよ。睨んだって仕方ない。それに僕、できそうなことがあるんだ」

良は澄み切った青空に顔を向けた。

自分は幻人の世界への入口を見つけた。今度は影ではなく、自分自身が入り、銀の衣の三郎太という人を探して話をする。そうすれば、どうにかなるかもしれない。

「できそうなことって、なんだよ」

問い詰める圭太に、良は曖昧な笑いを返した。

話すわけにはいかない。熱血漢の圭太は一緒に行くと言い張るだろう。いつもの通り、新一も付いてくる。何が起こるかわからない幻人の世界に、二人を連れていくことはできなかった。

唇を尖らせる圭太の横で、蒼は黙って良の顔を見つめていた

四人は校門を抜け、自転車置き場に向かった。

17・広がる事件

教室では、凍りついた人々の話でもちきりだった。何人もの生徒が事件を目撃していた。

「あれは雪女とか妖怪の仕業だよ」

「雪女は想像上の妖怪よ」

「じゃあ、細菌だ。どこかの国が開発した生物兵器がまかれたんだ」
「違うわ、生き霊よ。凍り鬼遊びをしていてね、鬼を辞めることができなかった子ども生き霊が、あちこち飛び回っているのよ」

「誰かが、遊びは終わりって、その子に知らせなきゃ・・・」

良たちは、クラスメートの話を耳の端に聞きながら、それぞれの席についた。

圭太の隣には、みすずが皆の話に交わることもなく座っていた。憧れの人の登校をじっと待ってたのだ。おさげだった黒髪はわずかに茶色がかかり、ウェーブまでしている。

『女の子って、隣に座る男子で髪型まで変わるんだ』

良は首をすくめた。

やがてチャイムが鳴り、エスキモーのようなファーコートを着込んだ末本先生が入ってきた。いつもの陽気さはなく、学級運営の難題を持ちかける時のように硬い顔をしている。

「きりーっ」

日直の号令に、皆がガタガタと立ち上がった。鋭くなった丸い目が廊下側に向けられた。

「みすず、起立だ」

野太い声にも、みすずは身動き一つしない。その顔をのぞきこんだ圭太が、「あっ」と声を漏らした。

良と蒼が横に駆けつけた。先生も教壇を降りてくる。

「触わつてはいかん」

みすずに手を伸ばそうとした蒼に先生がどなった。さっきまで赤らんでいたその頬は、既に白く凍りついていた。

「生き霊が取り憑いたんだ！」

誰かが叫んだ。皆が席を立ち、窓際に逃げよった。慌てて転んだ生徒もいる。

「みんな、落ち着くんだ」

先生がまたどなった。静かに息を吸ってから低い声で言った。

「慌てちゃいかん。息を止めて、そうつと教室から出るんだ」

生徒たちは口を押さえて廊下に出た。しくしくと泣きだしている女子が何人もいた。

良たちも従った。新一は悪魔払いでもするように、首から下げたお守りを前に突き出していった。

「いいか。ようく聞いてな」

先生は言った。できるだけ落ち着こうとしているらしいが、顔は青ざめていた。

「まず、言わないといけない。みすずはちゃんと生きています。

朝の会議の最中に、教育委員会から連絡が入ったんだ。昨日の晩から、妙な病気が四国を襲ったらしい。徳島市内でも、病院に担ぎ込まれる人が、三十人以上も出ている。

それで病気の原因がわかるまで、学校は休みになることになった。皆はなるべく外に出ないで、家で待機しているんだ。

それでは、登校したてで申しわけないが、気をつけて家に帰ってくれ。決して寄り道はしないように」

生徒たちは息を止めながら教室に荷物を取りに入り、怖々と顔を見合わせて帰っていった。

「どうした？君たちも帰るんだ。先生は、すぐに保健所に連絡せんといかんのだよ」

目の前にたたずむ良たち四人に先生が言った。

「末本先生は、この事件を病気のせいだと思っているんですか」
「そりゃそうさ、他に何がある」

良の質問に先生は首を傾げた。他の生徒たちと違い、四人が落ち着いていることを不思議に思ったようだ。

「別世界から伸びてくる鋭い刃が、人を突き刺しているんです」
良は言った。

圭太たちもしきりに頷く。

「ふむ。この事件については、いろんな噂が飛び交っている。だがそれに耳を傾けてはいけない。すぐに医療の専門家が原因を探してくれる。それまでの我慢だ。さあ、お帰り」

邪険にこそ扱わなかったが、先生は首を振りながら四人の背中を押した。

「くそー先生、信じてくれなかった」

自転車を押しながら校門を出たところで、圭太が小石を蹴った。他のクラスや学年の生徒たちが早々と四人の横を過ぎていく。

サイレンが聞こえてきた。いつも耳にする救急車とは違う低い音だ。ほどなく深緑色のトラックが、曲がり角の向こうから走り込んできた。運転席の上の赤い非常灯がクルクルと回っている。

「あれって救急車・・・」良はつぶやいた

「あれは自衛隊の医療班の車だよ」

新一は目を細め、通り過ぎる車を見送った。車は学校に入っていた。

「なんで自衛隊が・・・それに、まさか」

圭太が何か思いついたらしく、空を見上げた。

低い轟きが、どこからともなく近づいている。やがて爆音とともにヘリコプターの編隊が現れ、上空を掠めていった。

その時だ。

火事や異常気象を知らせる放送塔のサイレンが鳴り、アナウンスが流れはじめた。

・・こちら四国管区災害対策本部、これより住民の皆さんに、お知らせがあります。

原因不明の病気にかかった人が、県内および四国各地に見つかりました。外に出ている人は、感染防止のために、ただちに家の中に入り下さい。繰り返します・・

「まさかつてなに？」

放送が終わったところで、蒼が圭太に尋ねた。

「町に自衛隊が入り込んでいる。ひよつとしたら、四国はやつかいな病気に汚染されたと考えられて、本州から切り離されてしまったかもしれない」

「ちよつ、ちよつと待ってよ」

新一が顔をこわばらせながら、ジャンバーの裏ポケットからケータイを取り出した。

「今、大阪に出張に行ってる父さんに電話してるからね。あ、もしもし、パパッ」

三人は頬をひくつかせて話す新一を見守った。

「えっ、本当なの？じゃあ、僕らどうしたらいいんだい。ご飯は・・

「ケータイを耳から離れた新一は、圭太の顔を見つめて頷いた。

「お察しの通りだよ。本州と四国を結ぶ橋は既に通行禁止になっている。船も飛行機も皆ストップするらしいよ。感染症の研究班が東京から派遣されて、病気の原因を突き止めるんだって。

それで治療法が見つかるまで、関係者以外は四国への出入り禁止だつてさ。生活に必要な物資は、外から運んでくれるから問題ないって」

「とんだ見当違いだ。それにいきなりすぎるよ」

「まあ、仕方ないさ。大人なりに精一杯、考えてのことだよ。むし

良はばやいた。

る、対応が早くて誉めてもいいくらいだ。いきなりだったのは、自衛隊の準備ができるまで、待っていたからじゃないかな」

珍しく圭太が落ち着いた口調で言い、良に向き直った。

「あとは事情を知っている俺たちに任せられたってことだ。さっき、できることがあるって言うていたよな。そいつをやってみようよ」「熱血漢の圭太に、火がつこうとしていた。

良が話せば、まちがいをなく乗ってくる。それは駄目だ。幻人の世界に行くのは、自分だけでなくては。

「いや、それが忘れてしまったんだ」

なんとか取り繕ったが、圭太の目はじつと探っていた。

「いいんでない。良ちゃんは、忘れたっていつてるんだから」

「新一、俺らは良を助けるために、長老さんから詳しいことを教えてもらったんだ。お守りの水晶をもらったのも一緒さ。良が何かやるうとしていたら、俺たちも付いていく。そういうものじゃないか」「責めるように話す声に、新一の顔がこわばった。

「そんなこと、圭太君に言われたくないよ」

「なんだと!」

圭太が新一の胸ぐらを掴んだ。

「やめろよ」

良は二人の間に分け入った。

「本当に忘れてしまったんだ。思い出したら、絶対話すよ」

嘘をついている自分が苦しかった。でもそう言うしかなかった。

18・良の決意

「じゃ、何かする時には連絡してな！」

「了解」

良は、交差点の向こうから大声で話す圭太に手を振った。新一は振り返りもせず自転車を漕いでいつている。

「ねえ安西君。友だちを大切に思うのはいいけど、一人で抱え込んじゃだめよ」

横に立つ蒼が静かに言った。

「夕べ、あなたの影が町に広がっていくのを感じたわ。それで三人であちこち走っていたら、とある場所で、影は地面に溶け込んでいった。たぶん、幻人まほうじゆうとの世界に影を伸ばしたんでしよう？」

「やっぱり知ってたの」

良は目を見開いて蒼を見つめた。色白の顔がきりつと締まった。

「私たちは竜の影を守る者。その影が動けばすぐに気づくし、後も追いかけるわ」

「隠し事はできないってことだね。僕、君に聞きたいんだ。幻人の世界への入口だけど、それがどこなのかはつきりしない。市役所の南あたりなんだけど・・・」

「それを教えたら、私も連れていってくれる？あなたの影に包まれなければ、私は幻人の世界に入り込めない」

良はしぶしぶ頷いた。出逢ってまだ二日目の、しかもこんな可愛い娘を、未知の世界に連れていくのは抵抗があった。しかし、蒼とその一族の人は、遙か昔から自分が宿している影を守り続けてきた。彼女の提案を断るわけにはいかなかった。

「これから行く？」

「うん」

これ以上、人々が凍りつくのを見るのは辛すぎた。

「ちょっと待っててね、長老様たちに説明してくるから。とりあえ

ず、安西君は家に帰ってて。すぐに迎えに行くわ」

蒼は軽く自転車にまたがり、颯爽と去っていった。その早さたるや、競輪の代表選手でも決してかなうまい。

家についた良は、チャイムに手を伸ばしながらも、その手をそつと引いた。

あんな放送が流れた後のこと、母は首を長くして待っている。出かけるなんていったら、どんなことをしても止めようとするだろう。心配をかけることになる。でも、目の前で泣き顔を見るよりはましだった。

そのまま折り返し、蒼の家の門陰に自転車を置いて待っていた。やがて蒼が出てきた。後ろには二人の大人が立っている。

「お父さんたちも一緒に行ってくれるの？」
期待をこめて聞いた。

「それは・・・」
答えにくそうな蒼に、長老が代わった。

「安西君、先にも話しているが、わしらは影を守る者。もし幻人の世界に行った君に、万が一のことが起こったら、影は君の体を離れることになる。こちらの世界に影が戻ったら、すぐにその行き先を追いかけなければならぬ。君の付き添いは蒼に任せ、わしらはこちらから、君の宿す影の気配を追いかける」

がっかりしたが仕方なかった。長老たちの仕事は、自分ではなく影を守ること。かえって、はっきり話してくれたことがありがたかった。

良は、三人の後について歩いていった。なぜ、車を使わないのか不思議に思ったが、すぐに理由はわかった。

大通りは車でごったがえしていた。マスクをかけた自衛官らが、一台ずつ車を停めて話をしている。歩行者にも同じようにしていた。

「ああやって車を停めて、行き先を確認している。本州に渡る橋では、不平をいう人とそれを押さえる自衛官とで、さぞかし賑わって

いることじゃろう。

それにしても熱心なことじゃ、おそらく彼らは、四国管区の隊員。わしらと同じく、四国に足止めだらうに」

長老は気の毒そうに眉をひそめた。

四人はビル横の小道に入っていた。昔は用水が流れていたところだ。今はコンクリートで蓋がされている。車が通らないので、自転車で出かける時の便利な抜け道だった。裏道、裏道を通り、ほどなく市役所の白い建物が見えてきた。

『引越してきて間もないのに、こんなに道を知っているなんて』
良は、軽やかに歩く三人の後ろ姿に舌を巻いた。

「さてと、着いたわい」

そこは、市役所から五十メートルほど南の小道だった。ちょうど市場の裏側にあたる。

「かなり古いが、よく手入れをされている。誰かが大切にお参りしているのじゃろう」

老人は横にたつ祠に手を差し入れ、中の石像の頭をすりすりと撫でた。

『お地藏さん』・・良ははっと気がついた。

「僕の影が地面に潜り込む前に巻き込んだゴツゴツした塊。そのお地藏さんだったの」

白髭をしごきながら長老はにんまり笑った。蒼が口を開いた。

「そう。私たちも驚いたわ。人々を苦しみから救うための地藏菩薩が、幻人の世界への入口だったなんて」

「でもお地藏さんなら、他にもいっぱいあるんじゃないかな」

「確かにそうじゃが、これはまったく特別。大地に根つき、常に祈りを捧げられている。君は実際、地藏菩薩を見たことがあるんじゃないか」

問い掛けに、良はしげしげと小さな石像を見つめた。

左手に数珠を持ち、右手に杖を持ったその姿は、旅に出たお坊さん

のようだった。顔は小さく微笑み、見ていると、こちらまで優しい気持ちになってくるようだ。

「地蔵菩薩。お地蔵さんでしょ。いろんな所で見かけているんだけど、あれ、どこにあるんだっけ・・・」

良は首を傾げた。

老人の顔が少し険しくなった。

「有史以前から、人々は大地の各所に心をとめる場所があることに気づき、様々な祈りを捧げてきた。地蔵菩薩への信仰が広まると、当の場所に大地の神様として石像を置き、さらに熱心に願い、感謝の言葉を唱えるようになった。

じゃが、今、それが忘れ去られている。大地からの力こそ欠けるが、町なかには地蔵菩薩はたくさんある。だのに殆どの人の目には映っていない。人々は自然への信仰を失い、大地への感謝の気持ちも失ってしまっておるんじゃ」

「長老、彼らが追いつきました」

蒼の父が口を開いた。市場につながる曲がり角に目を向けている。

「やはり、友情とはいいいものよ。二人とも隠れてないで出ておいで。老人が顔をほころばせていった。

魚屋の看板の後ろから、罰が悪そうに二人の若者が顔を出した。

「圭太に新一、おまえら！」
良はどなった。

その拍子に涙がどつとこぼれた。二人は良の横に駆け寄り、さんざん頭や肩を小突いた。

「おまえの考えていることなんて、すべてお見通しだよ」

「良ちゃん、もっと遅く歩けんの。もうくたくた」

二人はいったん良を睨みつけて、にたりと笑った。良と別れてからすぐにも引き返し、自転車を置いて後をつけていたのだ。良は、蒼たちについていくので精一杯、まったく気づいていなかった。

「見知らぬ世界への旅は、人数が多い方がよいに決まっとる。それ

に、すごい力をもっていたとしても、友情の力にはかなうまい」
老人の声に、良は改めて二人に手を伸ばした。

「だましてごめん。一緒に来てくれるか？」

「そんなん、答える必要なし」

二人は差し出された手を思い切り叩いた。

「ならば出発じゃ。皆で手を繋いで祠を囲むのじゃ」

言われたとおり、四人は手を繋いで輪になった。

「長老さんたちは行かないの？」

「二人には、やらなくてはならない別の仕事があるんだ」

不安そうな新一に良は答え、二人の手を握る手に力を込めた。やり方はわかっていた。

二人の首に掛かっている石をちらりと見て、あの洞窟の中の青白い光を思い浮かべた。

背後にある自分の影が、わずかに濃くなったように感じた。

『まだ弱い』

ぐっと神経を集中した。

「安西君、私の目を見て」

言われたとおり、祠をはさんで立つ蒼の目を見つめた。大きな黒い瞳が青白く光りはじめた。

輝きは徐々に強くなっていく。急に体が軽くなったような気がした。影が後ろに大きく立ち上がっている。

『影よ、前に』心に強く念じた。

体の中心をとおり、影は前に伸びてきた。

二人の友人は、怖さのためか蹴くちやになるほどに硬く目をつぶっている。しかし、手を振り解くことはなかった。

影は、四人と祠を霧のように包み、やがて石像の中に溶け込みはじめた。

目の前に、井戸のような黒い穴がぱっくりと開いた。その中に引かれていく。足が地面から離れまいと抵抗している。良は消えそうに

なる意識のなかで叫んだ。
「前に進むんだ！」

19・幻人の世界へ

良はもがいていた。飛び込み橋から川に落とされた時のよう。訳もわからず、水にもまれながら暗闇に沈んでいく。

・息ができない、早く出たい・
やがて急に上昇しはじめた。明るい光が射したかと思うや、スポンジのような物の上に投げ出された。

深く呼吸しながら辺りを見回せば、そこは薄暗い林の中だった。地面には厚い苔が生えている。

目の前には、幹まわりが五メートルはあるつかという大木があり、大きなウロが開いていた。神社の神木のように細い注連縄が巻かれている。周囲にはやはり太い木々が立ち並び、鉛色の空に向かって伸びていた。

「ぶはー、到着したか」

隣に横になっていた圭太と新一が目覚めました。

「うっ、た、助けて」

良の顔を見上げた二人は、目玉をひんむいてのけぞった。二人の横にあった灰色の塊が、ムクリと頭を上げた。それを見た良も驚いた。ハスキー犬よりも大きな犬。それは狼だった。

「私よ、蒼。そんなに驚かないで」

白く尖った牙から風の唸りのような低い声が漏れた。蒼は狼に変身していた。

「こつちが犬神さんてことは、そつちは良？」

圭太が、蒼と良を順ぐりに見つめた。

「僕に決まってる。何を言ってるんだよ」
ひどく話しくかった。

顔に手を当てると、鋭く伸びた爪が鼻を引っ掻いた。口の中には、犬歯のような歯が並んでいた。

「僕、どんな格好なの？」

「まるで蝙蝠の化け物だよ。口が大きく裂けて目が赤く光ってる。背中には翼も生えてる」

「ほら、犬神さんの家で、おまえが変身しかけた。あれと似ているみたい」

二人の言葉に良は首を回した。なるほど薄い膜をもった黒い翼が、背中に生えている。

「私たち、まほろしひこ幻人の世界にやってきたのよ。ここでは、宿している影や精霊に似た姿になるのだから。でも、安西君が半分、人間の姿を残しているのに、私はほとんど変わってしまったわ」
蒼が唸った。

「ほとんどっていつか、全部のような気がするけど」
圭太が小さく突っ込んだ。三人の男子はフワフワの苔を叩いて笑った。

「けど、ここが幻人の住む世界なん？木がいつぱい生えてて、すごく落ち着くみたい。それにぬくぬく温かいや」

言いながら圭太はジャンパーを脱いだ。後に続いた新一は、ポケットから携帯電話を取り出して、あれこれいじっていたが、

「だめやん、これ」と放り投げた。

良は、翼の生え際に破れている制服とワイシャツを引き千切った。Tシャツも破れていたが、中に毛むくじやらの胸が見えたので、そのまま着ておくことにした。毛皮に変わってしまったのか、あたりに蒼の服は見えなかった。

四人は木々の間を歩きはじめた。

木陰であるのに、地面には、二つの黒い影が、恐ろしい速さで回転しながら流れていた。形はぼやけていてよくわからないが、四人のあとを追いかけているように見える。

「これってもしかしたら、長老さんと犬神さんのお父さんの影か。いやおかしい、ここは下方の世界だから、二人の影は、空のずっと高い所にあるはず」

見上げたが、木々の梢の先には、何もない鈍色の空があるばかりだった。影を映し出す姿ある物も見あたらぬ。

「安西君、上の世界とか下の世界とかいう考えは、捨てなくてはだめよ」

「ほんと頭が混乱する。だいたい狼が女言葉で話すのも、おかしいよ」

ぼやいた圭太の足を、鋭い牙がかみついた。

「いてて、ごめん。悪気があったわけじゃないんだ」

少し進むと、さざめく水の音が聞こえてきた。そして、いきなり林は終わった。

四人の前には、白銀色の砂浜が小さく弧を描いていた。その先には、紺色の海が澄みわたり、幾つもの島が浮かんでいる。あちこちの波間には小舟が揺れ、中に乗った人が忙しそうに働いていた。

「あの人たちが幻人？漁師にしか見えないや」

一番手前、八十メートルほど先の小舟を見つめながら、良はつぶやいた。

「のどかだね。水、触わってみようつと」

新一が普段では想像できないほどの素早さで、砂浜に向かって駆けだした。

胸騒ぎがした良は後を追いかけた。波打ち際のすぐ前で、先に蒼が疾風のように走り寄り、新一の前をさえぎった。

「だめ！」

新一はつんのめって転び、砂だらけになった。

「どうしたっていうんだい」

三人の後を追いかけてきた圭太が聞いた。

「ここは私たちの世界ではないのよ。美しく見える物が、優しく受け入れてくれるとは限らないわ」

「そりゃそうだけど、こんなに綺麗な海だよ。悪さをするなんて思えないよ」

新一は頬を膨らませた。

四人はザワザワと碎ける波を見つめた。白い泡の向こうでは、澄み切った水の底で、薄緑色の砂が煌めいている。

『確か昨日、ここで影を広げた時、激しい痛みを感じた。あれはいつたい？』

良は視線を巡らした。

空は鉛色だが決して暗くはなかった。自分の影を探したが、どこにもなかった。目の前で飛びはねながら砂を落としている友人の足元にも、影は見当たらない。その胸にぶら下がった石は煌めきをなくしていた。

『この世界には地面に映る影がない。自分が影そのものの形も現しているんだ。じゃあ、僕らの体の一部が海水に触れたらどうなる』
良は鋭い爪で手の甲を引つ掻いた。薄く出た血をＴシャツの裾で拭き取り、それを破った。

「良ちゃん、何するん？」

皆が不思議そうに見つめる中、破った裾を海に投げ込んだ。

血が布から滲み出ると、見る間にも海水の一部が黒く濁り、なまこの化け物のような形になった。そして棘を持った触手を伸ばし、水間に漂う布を掴んで大口を開けて飲み込んだ。そのまま小さく縮んだかと思うと、跡かたもなく消えた。

「見ただろっ」

良は振り返った。

「今のが、海に入った僕らの運命さ。この美しい水に飲み込まれて消えてしまう」

新一の口元が震えていた。歯を打ち鳴らすカチカチという音が漏れた。

「俺たち、これからどうするんだい」

圭太が良に向き直った。恐ろしい顔を目前にして、口元が少し引きつっている。

「やることは一つ。銀の衣の三郎太に会いに行くんだ。あの人は、まちがいなく話を聞いてくれる」

「でも、どうやってその人を見つげるんだ？この海には入れんし、俺たち舟なんてもってないんだぜ」

良は、圭太の声を聞きながら、波間に揺れる小舟に視線を注いだ。舟はすべて、先ほどより接近していた。四人に気づいていたのだ。

「良ちゃん、どうする」

新一が破れたシャツにしがみついていた。

「慌ててはいけない。まず、こちらから敵ではないことを示さなくては」

良は海に向かって手を振った。

自分の見かけが恐怖を呼ばないように、優しく、優しく。それに応じて、接近する舟のスピードは増した。乗っている人たちは皆、骨ばっていて背が高かった。穴の開いた布を首から通した簡素な服を着ている。こちらを向きながら櫓を漕いでいる。

浜辺は、数十隻の舟に囲まれた。

新一は良の背に隠れるように立った。さすがの圭太も灰色の狼にぴったり寄りそっている。

「異形の者よ、おまえたちは何者か？」

舟の乗り手のうち、一番大柄な男が口を開いた。赤い唇に上下に生えた長すぎる犬歯が剥き出した。鼻は外国の人よりもっと高い。その周囲で、他の男たちは、物干し竿のように長いモリを構えていた。獲物をつく鋭い刃先は、つららの先端のように透明で、それは四人に向けられていた。

良はその刃先に見覚えがあった。今朝、凍りついた男の人の足元に見えたものだ。男たちはあのモリで人々を突いているのだ。

『とすると』

舟の上に目を走らせると、銀色の桶のような物があり、黒い魚の背

が、中にうごめいているのが見えた。

『人の持つている温かさは、この世界では黒い魚となって、モリに突かれている』

良は悟った。

波間には、二匹の黒い魚が、残像を引くような速さで泳いでいた。わずかだが止まっている時もある。砂浜にさしかかると、魚は形のない影になった。付かず離れずいつも良の近くにいます。やはり長老と蒼の父さんの影に違いない。

先ほど話した男は、チラチラとそちらに視線を走らせている。

「僕たちは、別の世界からやってきたのです。銀の衣の三郎太という人に会いに」

良は答えた。

「ここは、光の精霊が宿る神聖な場所。だが先ほど、木々は奇妙な色に輝いた。さては、おまえたちこそは、蒼き空を奪った邪悪な者なのではないか。それに三郎太などという者はここにはいない」

男は紫色の目を光らせて話した。良の背後で歯をかち合わせる音が大きく響いた。

「怪しい者たちよ。すぐにも自分の世界へ帰れ。ここはおまえたちの訪れる場所ではない」

男は鋭く言い放った。

「駄目だ。僕らは、自分の世界を救うためにここにやってきた。探している人に会わなければ帰るわけにはいかない」

良の言葉に、男たちは構えていたモリを大きく後ろに引いた。

「安西君、この人たちには話が通じないわ」

蒼が低く話した。

「なんと！」

鼻にしわを寄せて男が唸った。

「獣が口をきいた。やはり、こやつらは邪悪な者だ。皆の衆、帰してはならぬぞ。放て！」

「危ない！」

良は振り向きざま、新一と圭太の腕を掴んだ。背中にぐつと力が入った。翼がバサリと広がったのを感じた。何十本ものモリが空気を切り裂いた。

『飛ぶ！』

心に念じた。

翼が力強く打ち下ろされ、良は二人を抱いたまま空に舞い上がった。

実際、一瞬の出来事だった。

さすが黒い魚を突いているだけあって、モリを投げる幻人の腕の動きは、人の目には映らないほどに早かった。二人の友人は驚く暇さえなかったに違いない。

下には、灰色の塊が、予想もできないような走り方をしながら、林の奥にすつ飛んでいくのが見えた。

『犬神さん、無事でいてくれ』

祈りながら夢中で羽ばたいた。

『この感じ・・・』

以前、自分は洞窟の中で宙を飛んだ。おぼろげに思い出したようだった。でも、はっきり意識をもって飛ぶのは初めてだった。

高く上昇していくので精一杯だった。水平に飛ぼうとして体をよじると、羽ばたきは遅くなり、波間に落ちていきそうになった。

「良、よけいなことを考えるな！」

腕の中で、圭太が苦しそうに呻いた。新一は何も言わなかった。

そのまま恐ろしいジグザグ飛行が続いたが、やがて、グライダーのように空を滑ることを覚えた。風を切る翼の音を聞きながら、飛びたい方向に頭を傾ける。それだけでよかった。

良は、先ほどいた犬の頭の形をした島を目の奥に刻みながら、大きく旋回した。

破れたTシャツをハタハタと抜ける風が気持ちよかった。遙か遠く

に、白く霞む山が見えた。

20・海胡桃のおばば

どのぐらい羽ばたいていたのだろう、鉛色の空には赤錆色が混じっていた。

眠ったのか、気を失ったのか、良の腕の中の二人の体からは、すっかり力が抜けていた。

先ほどから背中がきりきりと痛み、腕は燃えるように熱くなっていた。特殊な体にも、力の限界はあるのだ。

やがて空の明るさは消え、夜が訪れた。小島の幾つかが薄青く光ってはまた消えた。良は、間近な小島の浜辺に舞い降りた。黒い海には赤い炎が点々と浮かび、人影が動いている。幻人は火をともし、漁をしていた。

「ふわー」

砂の上に寝かせていた新一があくびのような声をたて、ごそついた。隣の圭太がビクツと跳ね起きた。

「やっぱり、夢じゃなかったんだ」

「えっ、夢でないの」

新一も目を覚ました。

そのまま二人とも沈黙した。海に揺れる炎にじっと目を凝らしているようだ。

おしゃべりで、いつも動き回っている友人らの沈黙、なんと声かけしたらよいものか・良の気持ちは落ち込んでいった。

危険があることは覚悟していた。しかし、少なくとも幻人たちには快く受け入れられるだろうと思っていた。まさかモリを投げつけられるなんて。それに探していた人はいなかった。ああ、蒼は大丈夫なのだろうか。

「なあ、もしかしたら、僕について来たこと、後悔しているんじゃないんか？」

二人に問いかけた。

しばらく返事はなかったが、新一がぼそりと聞き返した。

「良ちゃん、今のって質問？」

「俺は質問なんて聞いていないぞ。良が自分に聞くってこともありえない」

圭太が続いた。

「俺たちは、良が何かできそうだっていったから、面白そうだと思っ
てついてきただけだ。きつと、できそうなことで頭が一杯で、口
から変なものが漏れてしまっただろう」

二人の言葉はきつくて温かった。

『僕は、後悔って言葉を二人に押し付けようとしていた。犬神さん
は大丈夫だ。なんといいても、狼の精霊の力を持っているのだから
良は襲いかかる不安を押さえ、明るく答えた。』

「そうさ、やれることはある。今は、ちよつと翼を休めていただけ、
二人が重すぎてな」

「あー腹すいた。今日は昼も夜もご飯ぬき。幻人、あの捕まえてい
た魚、くれないかな」

新一が辛そうに話した。

「ちよつと待てよ」

良は、黒い魚の正体を二人に説明した。

「うげー新一、それでも魚を食べたいなんて思うか？もし、それが
末本先生のものだっいたらどうする？」

「それは勘弁。いや、意外に美味しいかも」

カラカラと笑う二人につられ良も吹き出した。が、急に息が詰まっ
た。

暗闇にぼつり、炎が浮かんでいたのだ。

「どうしたの良ちゃん？」

「誰がいる」

良のこわばった声に、新一も圭太も固まった。炎はゆっくりと近づ
いてきた。

「ひいー、や、やまんば」

新一が引きつった声を出した。

無理もなかった。髪をざんざんと伸ばし、紫色の目を光らせた恐ろしい老婆の顔が、手にした蠟燭の炎に揺れていたのだ。

「迷い童たちや、そんなところにおらんと、こつちゃ、おいで」

老婆は掠れ声で話し、骨ばった指をコリコリと曲げて招いた。

良は身震いした。

老婆は、昔話の挿し絵とそっくりだった。森の中で迷った人を優しく誘っては、むしゃむしゃと食べるやまんば。

「だ、や、やまんば、こら、られたちを食べようたって、そ、そうはいかんぞ」

圭太が舌をかみながら言った。

「この婆が、迷い童を食べるとな。ヒヤッヒヤッ、時間はいくらでもあるので、来たくなったら、おいでませえ」

老婆はそのまま踵を返し、木々の暗闇に帰っていった。奥の方にちんまりとたつ小屋がほのかに見えた。

三人は拍子抜けした。老婆がもつとしつこく誘い、それに応じなかつたら、本性を現して襲いかかってくると思っていたのだ。

「誰だよ。やまんばだ、なんて言ったのは!」

急に怒ったように圭太がどなった。

「良ちゃんが、変な声で脅かすからだよ」

「なんだよ、人のせいにするなよ」

良はコツリと新一の頭を小突いた。新一は大袈裟なぐらいに痛がった。ハツと気づいた。自分は今、二人を抱きあげて飛べるほどの怪力を持っているのだ。

「ごめん、力加減をまちがえた」

「謝るのなら、さっきのおばあさんに食べ物をもらってきてよ」

新一が弱みにつけこんでおねだりした。良はもう一度、今度は指で

軽く小突いてやった。

「いででで！」

新一は、さらに大袈裟に痛がった。

「二人とも遊んでないで考えろよ。あのおばあさんが敵か、味方か」
圭太が冷静に言った。

良は『言い合いの口火を切ったくせに』と言いたいのを我慢して、
「そうだな」と頷いた。

「考えてみれば、やまんばなんて、すごく失礼なことを言ってしまったよ。良の見かけを悪くすることもないし、普通に考えれば、親切そうなおばあちゃんだよな」

圭太がいい、

「うん、確かに。それに言うなら、やまんばでなくて、なんて言うんだらう。島んばか、海んばかな」

妙なところに首を傾げながら新一も同意した。

「ここは疑念を捨てて、素直になろう」

立ち上がった良に二人も続いた。

足元に気をつけながら歩き、すぐに小屋に行きついた。大きさはキャンプのテントぐらい。四、五人が入ったらいっぱいになってしまっただらう。葦簣あしぢみの下がった入口の前には蠟燭が燃えていた。肉の腐ったような臭いが漂っている。

小屋の周囲には、太い木がごろごろと生えていて、ゴルフボール大の丸い物が、あちこちに転がっていた。手に取ってみると、シワシワした皮の中に、硬い種のような物が入っていた。臭いの正体はこれだった。

「これ、胡桃くるみかな？」

圭太も手に取ったが、「くっさー」と投げ捨てた。

他にとりたてて奇妙な物はなかった。もし、人を食べるやまんばなら、高く積まれた骨の山とか、それを埋める怪しげな穴があるはず。

『こら！まだ疑がってる』

良は一人、苦笑いした。

小屋の横板は隙間だらけだった。中をのぞいても暗闇の他、何も見えない。ただ、スースーという息づかいが聞こえるだけだ。

「おばあさん、寝てるよ。さっき、おいでって言ったばかりなのに」
圭太がぼやいた。

三人はそのまま、その場に寝ころんだ。これから、どこに行ったらよいかわからなかったし、とりあえず老婆が起きるのを待つことにしたのだ。ひよっとしたら銀の衣の三郎太のことを知っているかもしれない。

最初に到着した島と同じく、地面には厚い苔が生えていた。柔らかな感触は毛布よりもふわふわしているほどだ。

「なあ、俺たちの家族、どうしてるかな」

圭太がぼそりと言った。

『いつもは家族なんていらないうつてくせに』
良は小さく微笑んだ。

圭太は八人家族。弟が二人いて、曾祖父までいる。農業をしているので家族はいつも近くにいる。皆がおしゃべりらしく、夕食の時はうるさくて、TVなど観られたものではないらしい。おまけにチャネル争いも激しい。「また、あのバラエティが観られなかった」と、始終文句を言っている

「今、時間は夜中かな、母さんが起きてたら、夜食のお裾分けがもらえるよ。あつ、お祖母ちゃんに新作ソフトを買ってっていうのを忘れてた」

新一が舌打ちした。甘えん坊の新一。父親は出張ばかりしていて、ほとんど家にいない。母親も仕事をしていて、帰ってくるのは夜。兄弟はいない。新一の面倒をみているのは、祖母で、母親が帰宅すると、同じ敷地にある離れに帰っていく。

「家がいいよ。のんびりしほうだい」いつも、新一は言っている。

「みんなカンカンさ。よりによって、こんな大事件の時に、僕らが

いないんだもの」

良は頭から角を生やす仕草をした。

父さんと母さんが、眠りもせずにおろおろしている姿が目に見えるようだった。その横では、満が声も出さずにゲームをしている。皆、自分の帰りを待っている。

考えると辛くなってきた。

「待てよ。長老さんが、うまく嘘の連絡をしてるかもしれない」
良は付け足した。

「えっ、どんな？」 圭太が聞き返した

「うん、例えば・・・」

答えに詰まった。うまい嘘はなかなか思いつかなかった。

「僕らはさ、旅に出たんだよ」

新一がフオローしてくれた。

「偉大な旅だよ。僕らは凍りついた世界を救うために、遙か地の底に住む賢者に会いに行ったんだ。もちろん道中では、戦いがあつたり仲間とはぐれたりもするけど、最後は賢者から魔法の杖を授かつて、皆でいっしょに地上に帰るんだ」

「まるでゲームやん・・・けど、それ、すごくいい」

圭太が満足そうに息を漏らした。

「信じてくれるように、うまく脚色しなくちゃな」

「きつと大人は信じないよ。でも、僕は信じる！」

良のつぶやきに、新一がつけ加えた。

三人はそれから黙り込んだ。

『自分を信じる！』

新一の言葉は、良の胸を強く叩いた。

心に、光を放つ灯台が浮かんだようだった。進むべき道は必ずある。

21 海胡桃のおばば2

木の擦れる高い音がした。

鬱蒼と繁る木々の向こうに、赤い炎がゆっくりと動いている。一隻の小舟が島に近づいていた。三人は誰言うもなく立ち上がり、小屋の後ろに身をひそめた。舳先に松明をともした小舟は砂浜にまわってきた。

『じつと、しとれよ』

太い声が響き、砂を蹴つて男がやってきた。

「おばばや、これ、海胡桃のおばば」

男は入口の前でどなった。中でごそごそと動く音がして

「川の三つ又かえ。年寄りの眠りを邪魔するな」と掠れた声が返った。

「起こしてすまねえ。いやな、一番の輝きの島で化け物が出てな、用心するように言いにきたんだが」

ジャラリと葦簾のあがる音がした。老婆が外に出たのだろう。

「それぐれいのこと起こすな。この歳になつては、化け物なんぞ関係ねえ」

良たちはほつとした。老婆は味方だった。

「それより、魚の差し入れはどうした」

「すまん、それどころでなくてな。とっつかまえた化け物のかたわれを運んでおるのよ。驚くな、口をきく狼ぞ」

良たちは耳をそばだてた。

「ほえー、それはたまげたこっちゃ。で、どないするつもりじゃ」

「決まっとるわ。丸太ん棒組んで、ぼうぼう燃やしてしまうのよ」

「そしたら安心じゃの。川の三つ又、道中まだ長いで気をつけてな」

「おうさ。おばば、三つの日と空けずに魚を持ってくるで。待つといてくれ」

陽気な声を残し、男は砂浜に帰っていった。

「俺に捕まったのが、運の尽きだ」

声とともに何かを棒で叩く音がし、低い獣の唸り声が続いた。やがて小舟は岸を離れていった。

「犬神さんが捕まった。どこかで火炙りにされてしまう」

良は目を見開いた。

「助けに行こうぜ。今なら幻人は一人だ。なんとかなる。俺を抱えて舟まで飛んでくれ」

圭太が言った。

「これい、慌てるな！」

老婆が小屋の後ろにまわってきた。

親指ほどの長さになった蝋燭を摘んでいる。寝癖がついたせい、髪の毛は逆立ち、先ほどより恐ろしく見えた。

「口をきく狼つつうのが、あんたらの仲間つつうことは気づいとるわい。じゃがな、迷い童は水につかると、どこかに消えてしまう。舟の上はやっかいじゃ。助けるなら、陸に上げられてからにせえ」

「おばあさん、あの舟がどこに行くのか知ってるの」

良はきいた。

「ああさ」

老婆はこっくり頷いた。

「四角入り江島じゃ。山の麓の入り江にや、丸太ん棒がたんとあるわい」

「それって、高い山がある島？」

良は、上空からちらりと見えた山を思い出した。ここからはずっと遠い。

「おお、そうじゃ。翼のあるあんたなら、ひと飛びじゃろう。もうちいとは、ここにおれ」

老婆は三人を小屋に招き、天井からぶら下がった燭台に蝋燭を置いた。

小屋は一面に藁が敷きつめられていた。隅には、鈍く光る銀色のたらいとザルが置いてある。外に転がっていた物の中身か、木の実の黒い殻がザルの横に山になっていた。他にはなにもなかった。

老婆は嬉しいことがあったように、三人を見てはニタラニタラ笑っている。

「おばあさんは、僕たちのこと、化け物とか邪悪な者とか思わないの？」

良は聞いた。よけいなことを考える前に、まずは質問だ。

「浜辺で仲ように話す化け物があるかいな。それに若い衆は知らんじやろうが、空が青かったころは、迷い童がちよこちよこ来たもんじゃ。変なもんが取りついたりする童は、姿を変えたりもしていた」
良をじつと見つめた老婆は、目を細めた。

「・・・迷い童が来たらもてなせ。やがてわしらを豊かにする・・・昔からの言い伝えじゃ。じゃからに、あんたらをこうして招いたんじや。なにせ、久しぶりのこと。もてなしの用意なんぞ、しておらんかったわい」

老婆はカゴを手にとると、三人の前に置いた。小さなドングリが底に溜まっていた。

「腹空かしとるんじやろう。お食べや」

「これ、シイの実だ。いただき」

圭太がザクリとカゴの中に手を伸ばし、一粒を口の中に放りこんだ。良は思わずその頬をはじいた。よその世界の食べ物を口にすると、二度と元の世界に戻れない。何かの本に書いてあった。

「何すんだよ。殻ごと飲んじまったじゃないか！」

「え、飲んだって」

良は青ざめた。圭太はわけが分からんと睨みつけている。なんと説明してよいものか、言葉に詰まった。

「ヒヤハツハハ、毒など入っておらんわい」

老婆が大きく笑った。やたらと長い犬歯のほか、歯はほとんど抜け落ちていた。

「安心せい。ほの実は、もとは迷い童が持ち込んだもの。ほれが木になって実を結んだんじゃ。まずくて、いざって時の食いもんとしておるだけじゃが、童はよう食べたもんじゃ」

「ほれみろ！」

圭太がまた一粒摘んでガチリとかみ、殻を吐き出した。

「素朴なお味ですな」

すでに、新一もガチガチとやっている。

もう遅い。老婆の言葉を信じるしかなかった。

『こんな時こそ、よけいな知識を披露しろよ』

いったん新一を睨みつけてから、良もシイの実に手を伸ばした。殻を取り、わずかに甘みのある実を、一粒二粒、かみこんだ。

とりあえず、体には何も起こらなかった。隣の二人にも変わった様子はない。

カゴの中の実は、あつという間に殻だけになった。間食にもならないぐらいの量で、腹が膨れるわけがない。新一はカゴをかきまわして実が残っていないか確かめていた。

「ごちそうさまでした」

良と圭太が丁寧に言った。

「あんたらの食べるんを見てたら、わしも腹が減っちまった。ほー明日の分じゃがの・・・」

言いながら老婆は、銀色のたらいに手を伸ばした。ズバンツと黒い魚を掴むと、大口を開け、一口で飲みほしてしまった。

良たちは言葉をなくした。二、三十センチはあるうかという魚を、ぱくりと飲んだ老婆の食いぶりにも驚いたが、>人の温かさくが、こんなにもあつさり食べられてしまうなんて・・・

「今食べた魚、美味しい？」

良はおそるおそる聞いた。

「美味いっちゅうもんではないわ。食べては祟りが起こると言われたが、他の魚がおらんのう。海胡桃などでは、すぐに腹が減っ

ちまっ

老婆は渋そうな目をして、黒い殻の小山を見つめた。

「青い空が戻るまでの辛抱じゃわい」

「青い空？」

「こつちや、こい」

老婆は重そうに腰を上げ、小屋を出た。

浜辺に出たところで老婆は海を指さした。

「よう、目こらしてみてみ」

黒い海には、ポツポツと赤い炎をともした小舟があつた。時折り、あちこちが薄青く光っている。島におりる時にも見えた。海に浮かぶ小島が光っていた。

「輝きの島がぼんわか光つとるじゃろう。昔は、昼間でも眩しいほどに光つとつたわ。ほんで青い空があつて、美味しい魚もわんさかおつた。ここんとこ、ちいと光が増えたようじゃ。もしや、昔のようには輝きだすかもしれん」

「輝きの島っていっぱいあるの？」

良は首を捻った。確か最初の島もそう呼ばれていたはず。

「そりやな。この国にや、いくつかの大きな島がとんとんと離れてあつてな、その一つ一つの周りに、数えきれんほどあるわい」

・ ・ ・人は大地への信仰をなくしてしまつた・ ・ ・

良は、長老のけわしい顔を思い出した。

人は昔、命を育む大地に救いを求めたり、感謝の祈りを捧げていた。お地藏さんを見ては手を合わせていた。それがめつきり減つてしまつた。

お地藏さんは、こちらの世界への入口。ということとは、大地への祈りが減つたせいで、輝きの島は光らなくなつたのではないだろうか。そして青い空がなくなり、魚も減り、幻人たちは > 人の温かさくの魚を食べはじめた。

でも、そうすれば、人々は凍りつき、祈りの総数は減っていく。結局、青い空は蘇らなくなってしまう。黒い魚を食べてはいけないというしきたりは、そのことへの警告だったのだ。

良は、そんなことを知らずに、銀の衣の三郎太に「食べれば」なんて言ってしまった。

しかし最近、輝きの島は光るようになったという。たぶん、自分たちの世界で、凍りつき事件がきっかけで、大地への祈りを思い出した人が出てきたのだ。なんという皮肉。

『いや、ちよつと待て』

幻人たちが、黒い魚を食べはじめたのは、ずっと以前からのようだとすると、人が凍りつくことは、前からあったということ？

とにかく、三郎太に早く会って、話をしなければ。

「おばあさん、銀の衣の三郎太という人を知りませんか。銀色の羽織を着た人でもいいんですが」
良は丁寧聞いた。

「ほんなの知るわきゃない。他の者の名など知るわきゃない」

老婆は腰をまげて笑った。

「なんだそれ？」

圭太が突っ込んだ。

「名を知ってるんは、名づけ親と鍛冶屋、それに忠誠を誓った人だけじゃ。他人に名を知られたら、わしやはその人の奴隷じゃわい。ほれ、わしは海胡桃のおばば。小屋の外に海胡桃が生えとるからの。さっきの男は、三つに分かれた川の中洲に家があるから、川の三つ又。住んどう場所の特徴からとった呼び名を使う。本当の名前は、はて、はてじゃ」

そう言っつて着物の腰から、切り出しナイフのような小刀を取り出した。

「わしやは、これを持って世を去る。刃の奥に名が刻まれておるでの、そんで生まれ変わった時にや、打ち直して新しい名を刻んで

もらつのよ」

「おばあさん、銀の衣って呼び名をつけるような場所ないの？」
新一がきいた

「あるわきゃなかるう。衣の色を、名にかぶせるなんぞ、世捨て人か、坊さまじゃわい」

「世捨て人か、坊さま・・・」
良はあつと叫んだ。

銀の衣の三郎太は、祈りの言葉を使い、さらに禁じられた魚を食べ続けてよいものかなど聞いていた。そんなことを尋ねるのは、

「お坊さんって、どこにいるんですか」
息せき切つて聞いた。

「じゃあな。坊さまつちゆうのは国中を旅しておられる。もし、こ
ん近くで、旅の疲れを癒しておられるなら、やはり四角入り江島じ
や。あすこにや、坊さまの寺があるからの」

老婆の返事に、良は背中にぐつと力を込めた。翼がバサリと広がっ
た。

「圭太、新一、行こう！」

「へっ、どこに？」

急な言葉に、二人ともきよんとした。

「犬神さんが連れていかれる四角入り江島。銀の衣の三郎太もそこ
にいるかもしれない」

二人を抱き寄せた良は、老婆に頭を下げた。

「おばあさん、シイの実、ありがとう」

砂を巻き上げながら、大きく羽ばたいた。

「またこいや。今度は、クリつちゆうもんも、たんと拾っておくけ
えな」

掠れ声が打ちたつ翼の下に聞こえた。

22・四角入り江島

海に点々と漂う赤い炎を見ながら、良は羽ばたき続けた。

用心のため、後を追っているだろう二匹の黒い魚が小舟に近寄らないようにジグザグに飛んだ。その度に、腕の中の二人は大きく揺さぶられ、悲鳴を漏らした。

やがて前方に、海上を突き進む一つの炎が見えた。櫓で漕いでいるわりにはかなり早い。その上空を飛んだ時、力強い吠え声が響いた。蒼を乗せた小舟だった。

「犬神さん、俺たちに気づいたんだ」

圭太が喜びの声をあげた。

舟はまっすぐ前に進んでいる。その先には高く聳える山影があった。麓には炎がコの字型に並んでいる。入り江に沿って数知れない篝火が燃えていた。

「四角入り江島！」

良は一際大きく羽ばたいた。

炎の熱気が立ち登る入り江を斜めに過ぎ、山の中腹の林の中に降り立った。

黒い木々を透かして、入り江の一部が見えている。数十隻もの舟が栈橋に並び、幾つもの人影が舟の中で動いていた。重い物を打ちつける鈍い音が響いてくる。

「あれって舟の手入れをしてるんだよね。夜なのに、幻人って働き者だね」

新一が感心したようにいった。

「さてと、お坊さんの寺というのを探さなくては。犬神さんが到着する前に、僕らへの誤解を解いてもらわないと」

「そこに銀の衣の三郎太がいるんだな」

「もしかして、たぶんな」

圭太が「はつきり言え」とばかりに良の頭を小突いたが、あまりの石頭に息を吸った。

林を少し下り、土の剥き出した小道に出た。

コの字の入り江が一望でき、篝火の赤みが、それぞれの顔に映っている。ということは、入り江からもこちらが見えるということ。三人は道端の木々に寄りそうように下りていった。と、すぐ先で小さな炎が揺れた。

一人の幻人が蠟燭を片手に坂を登ってきていた。取つてのついた銀色の深鍋をぶら下げている。

三人は慌てて横に折れた。目の前には、茅葺きの小屋がたっている。壁の横にそつと並んだ。

炎は追いかけるように曲がってきた。良らは押し合いながら小屋の裏側に回った。

板壁の隙間から、室内がのぞけている。

蠟燭を持った幻人の男は、板間に上がってきた。厚く敷いた藁の上にそつと座ると、そこに寝ていた人がムクリと起き上がった。女だった。生まれたばかりのような赤ん坊を胸に抱いている。

男は深鍋から魚を掴み出すと、女の口の中にツルリと落とした。魚を飲み込んだ女はにこりと微笑み、男は赤ん坊の頭をそつと撫でた。そのまま二人は横になった。

黒い魚を食べていることを気にしなければ、まったく幸せそうな家族の風景だった。

「これは素敵な悪夢だよ」

圭太が息を漏らした。新一は頭を振りながら後ずさったが、その足元で小枝が折れた。

男が、がばりと跳ね起きた。

「今の音はなんじゃ！」

太い声を出し、あちこちに目を配っている。

「裏の方から聞こえたわ」

危険なものから守るように赤ん坊を抱きしめた女が、こちらを睨みつけた。

「さては山の獣か・・見てくる」

男が立ち上がった。

三人は思わず顔を見合わせた。良はいつでも飛び立てるように二人に腕をまわした。

その時、ヴォーと地面を這うような低い音が響いた。

「何事だ。知らせ貝を吹き鳴らすなど、ただごとではない。おまえも一緒にこい」

幻人の夫婦はそのまま小屋を出ていった。

「ふう、危ないところだった」

良は溜息を漏らし、掴んでいた二人の腕を放した。

三人はそつと軒先を回った。どこから出てきたのやら、幻人たちが次々と小道を駆け下りていった。なかには幼い子どもの姿もあった。海を見下ろすと、入り江の先にくいぐいと近づく炎があった。

小舟だ。舳先に『見よ！』とばかりに松明を重ねて立て、まっしぐらに進んでくる。それを迎える棧橋の周囲に新しい篝火が次々と燃え立った。

入り江は、あたかも山火事のように赤く染まった。

「犬神さんに乗せた舟がやってくる。この様子じゃ、銀の衣の三郎太を探している暇はない。行こう！」

三人は土の坂を下りていった。

・
・
・

港には息苦しいほどの熱気が渦巻いていた。赤い炎に照らされて、千人を超える幻人たちがうごめいている。その中心を、首に縄を巻かれた狼の姿の蒼がずいずいと引きずられていた。

良たちは人気のなくなつた棧橋の陰に回り込み、身を伏せて様子を

窺っていた。

「こやつは邪悪な者の使いだ。獣の姿をしているが言葉をしゃべった」

縄を握りしめた男が、野太くどなった。

周囲に寄った人々は、長い棒でしなやかな背中を叩いた。その度に蒼は牙を剥き出して唸った。

どなり声と痛々しい唸り声、それに篝火の燃えるパリパリという音・それらを浴びている良の体の奥では、激しい脈打ちがはじまっていた。

やがて蒼は、入り江の中央に引き出された。首に回された縄は、太い木の杭に括りつけられた。

「丸太を運べ、囲い木を組むんだ！」

舟作りの材料か、入り江の中央に高く積み重ねられていた丸太が次々と運ばれ、蒼の周りに組まれていった。

「犬神さん、焼き殺されちゃうよ」

新一が泣きべそをかきながらいった。

「もうすぐ突撃する。準備してよ」

良は、震える新一と、体に力を込めた圭太に腕を回した。二人の手には、棧橋に転がっていた石を結わえた棒が握られていた。

蒼の姿が丸太の間に見えなくなった時、幻人たちは輪になって座った。祈るように手を合わせている。そのうち一人が立ち上がった。

炎を吹きあげる長い棒が、その前に用意されている。

「やめろ！」

良は叫んだ。

幻人たちが一斉に振り向いた。

立ち上がった男の後ろの女が、銀色の羽織を差し出そうとしているのが視界の端にちらりと映った。が、もはや何も考えられなかった。喉を駆け昇った灼熱の炎を吐き出しながら、良は大きく羽ばたいた。

23・輝きの谷

「こらっ、いい加減、目を覚ませ」

「良ちゃん、もう駄目、足くたくた」

体の内側で熱いものが、また騒ぎはじめた。胸のあたりに中途半端に残っている。

『吐き出したい、この熱さを！』

良は口を開いた。途端、足に鋭い痛みが走り、はっと目を覚ました。目の前に、圭太と新一が立っていた。淡い灰色の光の中で、引きつった顔をして笑っている。

良は咄嗟に息を吸い、喉元まで登っていた熱い物を飲み込んだ。体を動かそうとしたが駄目だった。太い木の杭に、後ろ手に固く縛られていた。

そこは入り江の中央、先ほど、蒼が繋がれていた場所だった。

「強くかんでしまったけど、足、大丈夫？」

唸り声が尋ねた。足元に灰色の狼がいた。

「犬神さん。無事だったんだね」

ほっと息を漏らした。

目の前の二人が顔をしかめた。炎ほどではないが、かなり熱かったらしい。

「僕はどうして縛られ・・・」

良が聞こうとした時だった。

「手荒なことをいたしました」

静かに響く低い声が聞こえ、銀色に鈍く光る羽織を着た人が前に進み出た。プラチナカラーの短い毛が生えた頭を深く下げている。

この人こそは・・・まちがいない、影の散歩で会った人、銀の衣の三郎太だった。

圭太と新一は後ろに回り、縄をほどきはじめた。何かこそ言っている。

「どうした？内緒話なんかするなよ」

「良ちゃん、頭痛くない？」

新一がのぞき込み、「ああ、聞いてしまった」と圭太の嘆きが続いた。

良は自由になった手で頭をまさぐった。髪の毛のあちこちに固まりかけた血がついていた。以前にも同じような経験をした。

高所から落ちたのか・・・それとも・・・

首を回して圭太の顔をのぞくと、とぼけるように横を向いた。腰の縄をほどいている新一も視線をそらせるように下を向いた。

「さてはおまえら、僕を殴ったな。それも、あの馬鹿でかい石のトシカチで」

「安西君、二人はあなたがこの入り江を燃やしてしまうのをくい止めたのよ」

「えっ」

あたりに目を配れば、棧橋が一つ黒焦げになっていた。

入り江の奥にのびる山道には、幻人たちがひしめいていた。怖々とこちらを窺っている。腕や顔に布を当てている人も数人いた。

すっかり事情が飲み込めた。

圭太と新一が目の前に立っていたのは、目覚めた良が、滅茶苦茶に炎を吐き出すのをくい止めるためだったのだ。

「怪我をした人はたくさん？」

良は誰にもなく聞いた。

「棧橋の近くにいた者が、少しばかり火傷を負いました、家で横になっっている者もおりますが、明日になれば元気になるでしょう。お仲間が、即座に行動して下さったおかげです」

答えてくれた三郎太は、縄をほどき終えた二人にも頭をさげた。

「ほれみろ。理由もなく友だちの頭を殴る奴が、どこにいるかって

いうんだ」

「溜まつていたストレスも、ちよつと取れたしね」

圭太と新一が胸を反り返した。

「僕の頭は、壊れた舟じゃないんだぞ」

良は、にやりと笑う二人の頬を爪で軽く引っかいた。

「とにかくはありがとうだね。じゃあ、二人へのお礼として」

ブホオオー・天高く、巨大な炎の柱を吹き上げた。

夜はすっかり明けていた。

入り江を赤く染めていた篝火も、今は白い煙をくすぶらせているだけだ。鉛色だが、決して暗くない空が広がっていた。

四人は、山裾の岩壁を彫り込んだ「寺」に案内された。

狭い板戸をくぐった奥には、教室ほどの広さの空間が広がっていた。床一面に厚い織物が敷かれ、壁一面に金粉をまぶした仏像のようなものが彫られている。中央の青石を組んだテーブルには燭台が三つ並び、豊かな光を周囲に投げかけていた。

「では、ごゆるりと」

蜜のような甘い香りがする飲み物をテーブルに置いた女が、頭をさげてしずしずと出ていった。

「三郎太さんつて、王様みたいだね」

良は、話の切り出し口をどこにするか困っていたが、隣に座る新一が自然に口を開いた。

「王様とはいかなる者かわかりませぬが、わしは国中を旅する坊主人々の苦しみを聞き、生きる道を説き、時には、災いをもたらすものを、消し去る役目もいたしております」

「でも、お坊さんにしては、皆へいこらしすぎのような気がする。

お寺だつて、他の人の家よりずっと立派だし」

新一のあけすけな言葉に、三郎太は朗らかに笑った。

「ははは、この世界の人々は、己を生かしてくれているあらゆるものに、常に感謝しております。海、山、川、大地、光、数え上げれ

ばかりがない。だから総てのものに耳を傾けるわしのような者にと
ても親切なのです。それにこの寺は、わしらが足を停める仮の宿に
過ぎませぬ」

すっかりくつろいだ雰囲気だった。良は、床に体を伸ばしたい気持
ちに駆られながらも、姿勢を正した。

「三郎太さん、僕たちはあなたを探していたんです。でも人々は、
名前はともかく、銀色の羽織のことも知らなかった」

「わしが羽織を身にまとうのは、特別な儀式を行う時だけです。そ
のことを知らぬのも当然といえば当然のこと。加えて申しますと、
あの輝きの島で、ふわりと漂う良殿の姿に名をお伝えしたのは、こ
の世に光と豊かさをもたらす方と信じたからです」

「俺、三郎太さんに気づいてもらおうとして、大声で名前を叫んで
しまった。あなたは皆の奴隷になってしまっ」

寺に案内されてから、ずっとうつむいていた圭太が力なくいった。

「いや、あなたはちょうど良い機会を与えて下さった。わしはあな
た方へのお手伝いがすみましたら、今の生を断ち切ろうと思うてお
ります。この体も厳しい旅を続けるには、歳を取り過ぎました」

三郎太の外見は、海胡桃のお婆ばよりずっと若く見えた。背筋も伸
び、低い声には張りもあった。幻人の歳というものはわからないも
のだった。

「それは、死んでしまうということですか」

顔をあげた圭太がしょんぼりと聞いた。

「そうではございませぬ。ご安心下さい」

三郎太は目の前で湯気をたてる飲み物に手を伸ばし、美味しそうに
すすった。その様子に、圭太の表情も幾分和らいだ。

「どれどれ、僕も」

だらりと胡座をかいている新一が、飲み物に手を伸ばそうとした。
が、その指先に蒼がかみついた。

「ひっ！」

「犬神さん、本物の狼みたいだよ」

青い顔をしてのけぞった新一をしり目に、良は言った。

「だって言葉で注意するより、かんだほうが楽なんだもの」

鼻の上にシワを寄せて笑う蒼に、良も身を引いた。

「これは失礼。あなた方は異界の人。こちらの世界の物を口にしてはならないんじゃない？」

三郎太は慌てて茶碗を下に置いた。

「へっ、だって僕ら」

顔を引きつらせた新一に、

「あのシイの実は、僕らの世界から持ち込まれたものだから大丈夫」
自信はなかったが、良はしっかり言ってやった。

「さて、良殿、お仲間からあらましはお聞きしておりますが、こちらに來られたご用の向き、今一度、お伺いしたいのですが」
きっちり座り直した三郎太が尋ねた。

良はこれまでのことを総て話した。しかし、黒い魚を食べるなどだけは言えなかった。＜人の温かさ＞は、この世界の人にとっては命を繋ぐ貴重な食料。それに凍りつき事件の起こる前から食べていたらしいのだ。

三郎太は驚いたり、しきりに頷いていたが、最後にぱちりと膝を叩いた。

「そちらの世界で生じている不可思議なこと、よくわかりました。
それで黒い魚に起こった異変が納得されました」

「異変？」

「ええ、漁に出ている男たちの話ですが、急に、魚が再生しなくなつたそうなのです。本来なら、モリで突いてもすぐに新しい体が生まれていたのです。さすがに祟りを怖れ、再生したての魚を突くことはなかつたらしいのですが」

良は驚いた。

「じゃあ、やはり、人々は前にも凍りついていたんだ。でも知らぬ間に元に戻っていた」

「そういや、普段でも急に背中辺りが寒くなることあったよ。風邪の引きはじめかな、なんてね」

圭太が言った。落ち込んでいた気持ちはどこかに消えたようだ。良も納得した。

思い起こせばいろいろあった。疲れてもいないのに、足が引きつったり、ぼうつとしてしまったり・

それは総てではないにせよ、こちらの世界で黒い魚になっている自分の温かみが、幻人のモリに突かれた時だったのだ。

「問題は、黒い魚が突かれることでなくて、再生しなくなったことなんだ」

「僕たちの世界が、凍りついた人を溶かすものを無くしてしまったってことだね」

良の言葉に、鼻の穴を広げた新一が続いた。

「育みの気だよ。それが減ってしまったから、自然の物と同じように、人間も凍ったままになってしまったんだ」

圭太がズバリといい、良たちも「それだ！」と声をあげた。

三郎太が首を傾げた。

「あなた方の世界とわたらの世界は、互いに大切な物を分け合っているようです。」

そちらの世界で、大地への祈りが乏しくなったことで、輝きの島は光を、空は青さを失いました。しかし、そちらで俄にわかに起こった事件は合点がいきませぬ。【育みの気】とやらが減っておられるそうですが、わたらの生活ぶりは、ここ十数年あまり、何も変わってはいないのです」

「こちらの世界で、最近、光とか、大地へ祈りが、遠退いてしまっているということは？」

蒼が聞いた。

三郎太はそつと微笑んだ。

「こちらの者は、日々、生まれ落ちた島の奥にあるく輝きの谷に祈りを捧げています。漁に出ている者も、夜が訪れる時に、そちらの方角に手を合わせて祈るのです。古来より変わらぬ営みです」

「それは、お地藏さんへの祈りとすごく似ている。きっと、そこから僕たちの世界に流れ込む祈りの力があるんだ。その力こそが育みの気で、どこかで詰まってしまうてる。だよな？」

良は言った。

単純過ぎるかもしれないが、今の段階で考えられることは、それしかなかった。

横に座る蒼が耳を立てて頷いた。

「ならば、これから、あなた方が向かわれる所が決まりましたな。

ゆるりと膝も伸ばされてはおられませぬが。参りますかな」

「うん、こつちじゃ、何も食べられないし」と新一がぼそり。

一同が、きりりと顔を引き締めたのを見てとった三郎太は、すつくと立ち上がった。

「輝きの谷へ、ご案内いたします」

・
・
・
・

寺の外では、幻人たちが勢揃いしていた。時に畏れるような視線を良に投げながら、三郎太に手を合わせている。

「皆の衆、これまでの様々なお心遣い、感謝いたします」

三郎太は深く頭を下げた。そして振り返り、腰に差してあった小刀を良に手渡した。

それは海胡桃のおばも持っていた小刀だった。柄には、尾を噛み合わせて輪になった二匹の蛇が刻まれている。

「良どの、それでわしの胸を突いて下され」

「何言ってるんですか。そんなことできないです」
突然で、ありえない申し出だった。

良は激しく首を振ったが、その手を三郎太は力強く握り、そっと鞘を抜いた。

「それは新生の刀。わしらが死んだ時、刀はいったん墓に置かれ、後に生まれた赤ん坊に渡されます。死んだ者の魂は、新しい命の中で生まれ変わるのです。」

人に名を知られ、今の命を断ち切る時は、その名を知った方に新生の刀で刺していただく習わしです。そして刀はその方に託されます。良殿、わしはあなたにお願いしたいのです」

「でも、あなたは死んでしまう」

「その刀には、わしの魂が宿っています。それで貫かれた体は、傷つくことはなく、消えていくだけです。ですがご安心を。あなた方を輝きの谷にご案内するぐらいの時はあります」

三郎太の顔に不安はなかった。

これはこの世界のしきたり。よそからきた者があれこれ言えることではない。それに何より、自分を信頼してくれているからこそその願いごと・・・

良は覚悟を決めた。

「じゃあ、刀は、後でどうしたら？」

「良殿、それはあなたの影に包んで、オジゾウサンを経てこちらにお返し下され。」

さすれば、やがて刀は見つけられ、誰か赤ん坊のもとに届けられるでしょう」

良は微笑みを浮かべる顔をもう一度見つめた。そして硬く目をつぶり、「いきます」と一声、小刀を前に突き出した。

「ああ」

誰かの掠れ声が漏れた。

「感謝いたします。刀を引いて下され」

穏やかな声に目を開けた良は、そっと手を引いた。恐る恐る触れた

刃先に、濡れた感触はなく、目の前の笑顔は変わらなかった。そのまま小刀に鞘をかぶせ、ズボンのベルトにしっかりと差した。

「では参りましょう」

三郎太は何事もなかったように、山側を向いて歩きはじめた。痛みを我慢しているようには見えない。足取りはしっかりしている。

山道をしばらく登ると石段が現れた。

ツルツルと硬そうな緑色の石だったが、中央は凹んでいた。両脇に生え出した木々の枝はきれいに刈り込まれている。長い年月、人々は輝きの谷に祈りを捧げるために、この石段を往復しているのだ。

「安西君、見て」

隣を歩く蒼が囁いた。

五、六歩前を歩く老人の姿が、一拳分ほど小さくなっていた。着物の裾を石段に擦っている。階段を登るスピードが早くなった。いつの間にか、髪が黒みがかった。

「皆さま、ついてこられますかな」

ほどなく振り返ったその顔は、瑞々しく精悍な若者の顔だった。三郎太は若返っていた。低い声は、心なしに高く滑らかになっている。

紅色の鳥居のような石門をくぐったところから、木々の間に、煌めく霧が立ちこめはじめた。地面が震えている。先を急ぐ三郎太の姿がぼやけていく。

・・良殿、二つの世界の架け橋を、ぜひに・・

子供のような声が聞こえた。良と蒼は霧の奥に走り込んだ。

雲間から射す陽の光を逆さまにしたように、深い谷底から、光が立ち登っていた。

対面する切り立った岩壁の頂きから、轟音とともに大滝がなだれ落ち、光をまぶした水煙が、絹の流れのように漂っている。

そして足元の平らな岩には、なかば着物に埋もれた赤ん坊が、抱いてくれとばかりに手を伸ばしていた。

良が、柔く壊れそうな体に腕を伸ばした時、息を切らした新一と、その重い腰を押していた圭太が追いついた。

「まさか、この赤ちゃんか、三郎太さん」

喘ぎながら圭太が言った。

「彼は、生まれ変わろうとしているんだわ」

「誰に？」

「それはわからない」

矢継ぎ早に言葉が交わされるなか、赤ん坊は満足そうに微笑んだ。

見ている間にも、体はさらに小さくなり、良の指間からすり落ちた。

三郎太であったものは、光の塊になっていた。それは後ろに回り、

新生の刀にすつと入り込んだ。

「あー、消えてしまった。で、僕たちは？」

轟く滝の音に、新一は頬をひくつかせている。

「まさか、ここから飛び降りるなんてことはないよね」

その胸にぶら下がっている石のかけらが、光にかざしているように煌めいていた。

圭太は注意深く谷底をのぞいていたが、やがて首を振った。

「だめだ、降り口はどこにもないや」

「ここは輝きの谷、そして僕たちの世界の光が呼んでいる。育みの気の詰まっている所は、深い谷の底のずっと先、僕たちの世界にある」

良は、二人の友人の肩に手を回した。

新一はガチガチに固まっていた。蒼の滑らかな毛皮が、三人の膝のあたりを優しく撫でた。

「じゃあ、行くぞー！」

四人は、光を帯びた水飛沫の中に飛び込んでいった。

良の腕に誰かの手がしがみついていた。その手をしっかりと握った。

背中にはもはや翼は生えていなかった。

水煙の中、切り裂くように流れる風が心地よかった。白い輝きが体

を突き抜けていった。

24・ガラスに囲われた大樹

良は石が剥き出したガレ場のような斜面に投げ出されていた。乳白色と暗がり混じった不思議な空間・徐々に目の焦点が合ってきた。

「また穴の中だ」

そこは膝立ちするのがやっとの広さの洞穴だった。二十メートルほど登ったところから光が伸びている。

大理石だろうか、白い結晶がそろそろと周囲の壁から突き出している。奥に目をやると、大人の太腿ほどもある薄黄色の木の根が見え隠れしていた。

どこからか軽やかな水音が漏れていた。腕を伸ばし、すぐ横の平らな結晶に手をかけると、雲母ように表面がはがれ、亀裂を伝って細かい水が流れ出た。

「みんな無事か？」

ほどよい冷たさを手に感じながら、地面に伏せている三人に声をかけた。

「元の世界に帰ったのね」

人の姿に戻った蒼が、白いダウンジャケットの上で首を振った。圭太と新一も顔を上げた。

「まったくすごい迫力だった。癖になりそう」

「僕は、プールのスライダーで十分だよ」

いつも通りの圭太と新一だった。

良は、念のために顔と背中をまさぐった。もはや鋭い牙も翼も生えていない。もちろん、Tシャツの背中も破れたままだった。

「僕ら本当に帰ってきたんだ」

ほっと息をつくのと、急に喉が乾いていることに気がついた。尖った結晶に口を寄せ、水をすすった。

「うまい！」

思わず大声で叫んだ。

喉を伝わった水は、手足の爪の先まで染み通るようだった。

「どれどれ」

三人も寄つてきて喉を潤した。

「水ってこんなに美味かったんだ」

皆、胃の中から水音が聞こえるほどに飲み、さんざん笑った。

なぜかおかしくてたまらなかった。腹の底から温かさが沸き上がり、喜びが溢れてきてしかたなかった。

ゴトリ・・・

笑い転げる良の腰から何かが落ちた。柄に二匹の蛇が刻まれた小刀だった。

突然、現実に引き戻された。

「僕らは輝きの谷を抜け、この世界に戻った。そして、ここには育みの気の源がある」

「もしかして、この水が？」

「きつと、そうよ。水を飲んで美味しいのはわかるわ。でも、アルコールじゃあるまいし、体の内側から温まってくる水なんて聞いたこともないわ。この水こそが、私たちの世界に流れこむ幻人たちの祈り、育みの気そのものなのよ」

蒼はそう言つてダウンジャケットのチャックを下ろした。幻人の世界でジャンパーを脱ぎ捨てていた圭太と新一はほつと胸を撫で下ろした。

「大切な水を、あの大蛇みたいな木の根が独占している。きつと、それが詰まりの原因なんだ」

穴の奥に目をやりながら、良は言った。

「とりあえず、ここを出よう」

四人は光の射す方に、這い登っていった。

「あつ」

目の奥に、痛いほどに眩しい太陽の光が射し込んだ。後から出てきた三人もしきりに目をしばたいている。

明るさに目が慣れたところで振り返れば、これまた、眩しく輝く巨大な塔が、空を突き刺さんばかりに聳えていた。

それはただの塔ではなかった。送電線の鉄塔より三回りは大きい。

太い鉄柱は、数知れぬ枠で覆われ、その一つ一つにガラスがはめ込まれていた。

そしてその中に、一本の巨木が生えていた。高さはゆうに百メートルを超えているだろう。幹まわりは、三、四十人の人が手を繋がないと届かないほどであった。

「セコイヤの木だ。でも、こんなに大きいのがあるなんて。ここ、日本じゃないのかな」

新一の声を横に、良はあたりを見回した。

周囲は白く煙った山々に囲まれていた。四人がいるのは、山の中腹あたりか、凍りついた灰色の木々が、ずんと後ろに伸びていた。そして向き直った視界の右半分は、深い谷、左半分は高層ビルのようなガラスの塔が占めていた。

塔の奥に目を凝らすと、向こう側に一筋の道が走っていた。深い谷を渡る幅四メートルほどの道。それはダムの水門だった。その上を、数人の人が行きかっている。

塔との境目あたりに入口があるらしく、姿を消し、また現れていた。その歩き方や服装は、どう見ても日本人だった。

「ここは日本。僕らはどこかのダムの縁にいる。新一、セコイヤの木って、普通どのくらいの高さなんだ？」

良は聞いた。

「だいたい三十メートルぐらいかな。アメリカなら百メートルぐらいもあるらしいけど。こんなに高かったら、とっくにギネスブックに載ってるよ」

新一は流暢に答えた。まったく凶鑑物になると、大人顔負けの知識を披露する。

「ということは、あのばかでかい木が、育みの気を独り占めしているってことか」

圭太が唸った。

先ほどいた洞穴の深さは、セコイヤの木の根元近くまでであった。木との距離は十メートル以上あるが、あれほどの太い根の持ち主は、他に見当たらなかった。

「ちがうよ。あの木は千年ぐらいは生きている。そんな前から事件は起きてないでしょう」

新一が反論した。

「そうだ。事件の原因は木じゃなくて、あの塔なんだ。あの木は、育みの気の原因を吸い上げて、気体として僕たちの世界に放出してくれている。それをあんなガラスで覆ってしまったから、事件が起こったんだ」

良の言葉に、新一も納得したように頷いた。

「きつとガラスで覆われて、エネルギーをうまく放出できないから、あんなに大きくなったんだ」

「問題は、誰がそんなことをしたかだ」

「良ちゃん、今って一月だよな」

塔の下に目を向けていた新一が、妙な質問をした。圭太はうんざりというように首を振ったが、良は気になった。

ベルトに差した小刀を手に取り、鞘を抜いた。三郎太の胸を貫いた時、その刃は銀色に光っていたが、いつの間にか、薄く錆づいていた。

「どうしてそんなこと聞くんない」

「ほら、あの根元の周りに生えている木が花を咲かせている。ちょうど五、六月の季節みたいに」

確かに巨大な木の根元には、アセビやツツジのような灌木が、白い

花を咲かせていた。

「そりゃ、セコイヤの放出するものが、他の木を元気にしているってことじゃないか」

口を尖らせる圭太に、良は小刀を差し出した。

「ついさつきまで、この刀の刃は光っていた。それが数日たったみたいにな、錆が出ています。僕らは幻人の住む世界に、たった二日いただけ。だけど、こちらでは、何十日も日が流れていたんだ」

自分でも馬鹿なことを言っていると思った。でも思い当たることはあった。ずっと良に付き添っていた黒い魚は、常識を超える速さで泳いでいた。少しだけ止まって見えたのは、眠っていたからなのではないだろうか。

そして今、空に浮かぶ太陽は、冬のヴェールをすっかり脱ぎ払っていた。高く誇らしげに輝いている。

「そんなことって・まさか浦島太郎みたいに、何百年も経っていったなんてことはないよな」

「それはないと思うけど」

良は刀の刃についた錆の薄さを見ながら答えた。もちろん自信はなかった。

「犬神さんは、どう思う？」

蒼はさつきから、黙ってあたりを見回していた。

「わからないわ。私、長老様とお父さんを探しているの。二人の気配はあるのに姿は見えない。この近くにいるはずなのに」

蒼は、塔の土台の一つが埋め込まれたダムの水門をにらんだ。

「あそこにいるような気がする」

新一がほっとしたように肩をおろした。

「よかった。犬神さんのお父さんや、長老さんまでが生きているってことは、何百年も経ってるなんてことはないものね」

「まあ、な」

良はあえて反論することはなかった。

ガラスの塔の下にいるなら、人間の寿命も伸びているかもしれない。しかし、それを口にするのは、あまりにも恐ろしいことだった。

「とにかく、あの人が出入りしている所。塔の下の水門と重なっている所に秘密がある」

良は立ち上がり、ズボンについた土埃をはたいた。

「あそこにいるのは、善人、悪人？」

「そいつは行ってからのお楽しみだよ。育みの気を独り占めしている奴に、善人はいないと思うけど」

新一と圭太も立ち上がった。

「お父さんたちの気配が弱い。体の力が奪われているみたい」
蒼がつぶやいた。

四人は凍りついた山肌を滑るように下りた。塔の土台にはすぐに行き着いたが、厚いガラスが行く手を阻んでいた。入口はどこにも見当たらなかった。

「みんな、ちよつと離れて」

良は大きめの石を掴んでガラスにぶち当てた。だが、鈍い音を立てて跳ね返されただけ。塔の下に潜り込むには、向こう岸に渡り、水門の上の入口から入るしかないようだった。

「ねえ、セツコクがあんなに咲いている」

新一が、ガラスに鼻を押しつけて中に見入った。手を伸ばせば届くような所に、白い花びらをたれた蘭の花が咲いていた。小さなカタバミも可憐な黄色の花を咲かせている。塔の内部は自然の息吹に溢れていた。

「行こう」

圭太が、太った体に手をかけた。悲しそうな顔をして新一は歩きはじめた。

右手には、普段ならダムの水が流れ出しているはずの深い谷がある。そちらからは、向こう岸に渡れそうもない。四人は左に進んだ。

ガラスの塔を過ぎてすぐに、巨大な人造湖が現れた。水はスケートリンクのように一面凍りついている。

『やはり、あの洞穴の中の水は特別な力をもっている。あの周囲には、氷のひとかけらさえなかった』
良は思った。

斜面を下って湖の前に出ると、一メートルほどの高さから氷の上に飛び降りた。氷はひびが入ることもなければ、軋みも聞こえなかった。

四人は湖の上を注意深く歩いた。百メートルはあっただろう。せり上がる水門の壁を横に見ながら、ダム反対側の岸边にたどりついた。

灰色に膨れた土の崖を登ったところに広場があった。しきりに車が訪れている。

「俺たちもお客さんになれるかな」
圭太がつぶやいた。

「お父さんたちは、お客さん扱いされていない。でも、行かなきゃ蒼が大きな目を見開いた。不安そうな新一は何か言いたそうだったが、蒼の強い口調に唇を結んだ。

四人は水門の上を歩きはじめた。

25 水門の中の修験者

「あなたたち、子どもだけで来たの」

高い声に振り返れば、厚いスキーウェアを着た中年女性が立っていた。

感心しきりのようだが、良の方は見ようとしない。圭太と新一は取りあえず制服を着ているが、良ときたら背中が破れたＴシャツ姿。ダムの水が凍るほど寒いのに、気が狂っているとも思ったのだろう。

「そうなんです。私たち、家族が皆、凍りついてしまつて。それでここまで歩いてきたんです」

蒼が上手に取り繕つた。女性は目をひんむいた。

「ここまでつて！ここは四国山地の真ん中よ。麓から車で四時間もかかるのを・・・」

「ええ、途中まで親切な人が車に乗せてくれたんです」

「あら、そうなの」

女性は納得したようだった。

「ねえ、おばちゃん、僕らお金を持ってないんだけど、中に入れてもらえるかな」

圭太がかまをかけて聞いた。

「心配いらないわ。光の大使様は、見返りなんて求めないはずよ。

偉いお方で、自分が誰なのかも名ならない。ここにいる代理の方も、きつとく氷解の薬を分けてくれるはずだわ」

女性は目を潤ませながら答えた。きつと大切な人が凍りついているのだろう。

「帰りはどうするの。よかつたら、車、乗せてあげるわよ」

「ありがとうございます。先に行った男の人が、待ってて下さるつておっしゃたんです」

蒼が丁寧に頭を下げた。良たちもぎこちなく腰を折った。

「そうよね、困った時には助け合わなくてはね。じゃあ、先に行くわね」

ほほえみながら、女性は四人を追いぬいていった。

「ここは四国山地の真ん中。これから会うのは、光の大使の代理と呼ばれている人。そして凍りついた人を溶かすく氷解の薬を皆に分けている」

良は語られた言葉を繰り返した。

「偉い光の大使だつて！そんなの嘘っぱちだ。偉い人なら、とつくにあの塔を壊しているはずだ」

圭太が吐き捨てるようにいった。目の前にはガラスの塔が迫っている。女性はその手前に黒く開いた入口を降りていった。

向こう側にいた時には見えなかったが、ガラスに覆われた水門の先、セコイヤの木の根元近くにも、黒く開いた入口があった。

『育みの気は、あそこから水門の下に流れ込んでいる。氷解の薬と名をつけられ、人々に配られている』

四人は暗い入口に足を運んだ。

急な階段を三メートルも下ると、ダム管理用に作られたのだろう、薄暗い電球のなんだ細い通路がのびていた。躊躇うことなく足を前に進めた。

途中、ビニル袋を手にした数人と擦れ違った。袋の中には、薬のような白いカプセルが二十個ばかり入っている。皆生き生きと歩き、希望に満ちた表情を浮かべていた。

さらに進むと、天井から厚い透明シートがぶら下がっていた。それをめくり、少し行くとまた一枚、また一枚。シートをめくる度に、空気が濃くなつていくようだった。四人の口元から流れる白い息が消えていく。温度は確実に高くなっていた。

「念入りなこつた。こんなことまでして、育みの気が外に漏れないようにしている」

圭太が鼻を鳴らした。

四枚目のシートをめくった先に、頑丈そうな鉄の扉があった。良は立ち止まって振り返った。三人の友人は、じっと目を見つめてからうなずいた。

良はいったん深呼吸し、思い切ってドアを引いた。

明るい光が漏れ出した。先ほどの女性が跳ねるように出てきた。

「氷解の薬、手に入れたわ。これで夫も子ども救われる。大丈夫。ありがたい祈りの込められた薬で、あなたたちの家族も元に戻るわ！」

興奮したように話して離れていった。

目の前には、こじんまりとした部屋があった。広さはせいぜい学校の階段のおどり場ほど。天井には、電灯が煌々としている。六台の液晶モニターが棚に並び、ダム周囲の様子を映し出していた。部屋の向こう側に続く通路の扉は開いていた。

モニターの前に卓上カレンダーがあった。めくってあるページは、二〇〇〇年、五月。やはり、幻人の世界に行っている間に、四ヶ月もの時間が過ぎていた。幸いなことに、浦島太郎ほどにはならず済んだようだ。

良はほっと息をついた。

「ここ、巨大ダムじゃないのに、こんな部屋があつて、管理モニターまでついでる」

新一が首を傾げた。

部屋の奥まったところには、畳が二枚しかれ、場に相応しくない祭壇が置かれていた。甘い匂いのするお香の煙が、白いカプセルの詰まったガラスケースの上で揺れている。

「よく来たね」

祭壇の横に置かれていた屏風の片翼が折れ、そこに正座していた男が顔を上げた。

坊さんのように頭髪を剃り上げ、すり切れた白い着物を着ている。歳は四十から五十才の間だろう。やつれてはいるが、顔色はよく、とても健康そうだった。細い顔には薄い笑いが浮かんでいた。

「君たちとは少し話がしたい。他の人には少し待ってもらおう」
優しい声音で話すと、男は立ち上がり、良たちの後ろの扉に鍵をかけた。

奇妙な雰囲気をもった男だったが、育みの気を独占するような悪者には見えなかった。

男は壁際により、モニター横のマイクに向かって話した。

「光の大使の代理より、氷解の薬を求めてこられた方々にお伝えする。急に祈りが必要になったゆえ、しばらくお待ち願いたい」

なんのためかはわからないが、男は懐から透明なピンを数本取り出し、畳の隅に拳で打ち込んだ。よく見れば、他にも三本ばかり打ち込んであった。そして祭壇の前に戻ると、畳の上に座った。

「君たちも、立っていないで座りなさい」

力強い男の声に四人は従がった。

「ち、ちよつと待った。あんたがいくらいい人に見せかけても、俺たちは騙されないぞ」

上擦った声で圭太がどなった。祭壇上の多面鏡の前の蠟燭に火をともしながら、男は振り返った。

「ほほう、なかなか勇ましい青年だ。名前はなんという？」

男は目を細めて微笑んだ。肩すかしを喰らったように圭太はそのまま黙り込んだ。

「あつ！あの蠟燭を消して」

苦しそうな蒼の音が響いた。良は横を見ようとしたが、首はギプスで固定されたように動かなかった。腕も、まるで他人のもののようにまったく自由にならない。

「犬神さんに何をした！」

圭太がすぐに反応した。立ち上がって男に掴みかかっていたが、男の動きは武道の達人のように素早かった。あっという間に硬い床の上に投げ飛ばされ、ウツと唸ったきり動かなくなった。

「道なき山を歩き続け、時に、熊と戦いながら修行を積んだわしにかなうわけがない」

男は軽くいった。

「圭太君！」

新一が動こうとしたが、男の黄色く光る目ににらまれ、そのままばったり突っ伏した。

「ほう、この二人は普通の人間というわけか」

穏やかな目で床に倒れた二人を見つめた男は、一転、鋭い視線を、良と蒼に向けた。

「一人は影を守る一族の生き残り。もう一人は、邪悪な影を宿した少年というわけだな。正月のトレイルラン大会で迷子になり、ひよっこり姿を現した高校生、安西良。佐那河内村での出来事には、常にアンテナを張っていたが、村の広報に小さく載った顔写真と名前、しっかり頭に刻みつけておったよ。わしは、天照てんしょうという。娘は気づいているかもしれないが」

「くそつ、人の名前を呼び捨てにするな！」

良は立ち上がるうとしたが駄目だった。動くのは目と口だけだ。

「無駄だ。邪悪な者をもつ影は、この魔封じの鏡の放つ光と、水晶のクギで押さえられている。おまえたちは動けない」

蠟燭の炎に照らされた二人の影は、先ほど男が打ったピンの上に薄く伸びていた。ピンは鈍い光を放ちながら、絵を留める画鋏のように二人の影を固定していたのだ。

「あんたは何者だ。僕らは邪悪な者なんかじゃない」

良はどなった。

「彼は、光の神を信じる狂信者よ。前に話したでしょう。私の一族を殺した修験者がいたって。それが彼よ。気づくのが遅かったわ」

蒼の悔しさの涙が、畳にぽつりと水滴が落ちた。

「悲しいことよな。邪悪な者は、己の邪悪さに気づかない。二時間ほど前に訪れた二人もそうだった」

「長老さんたち・・二人をどうした」

「おまえたちと同じだ。別室で神の光のもと、きちつと座っておるわ。取り憑いている獣の霊を捨てれば、自然と自由になれるのだが」

「私たちは、宿している精霊を手放したりしない」

「そして災いをまき散らす影を守るか？」

天照と名乗る男の顔が引きつった。見開いた目が、再び黄色く光りだした。

「人々は古来から、あの山で光の神に祈りを捧げてきた。それにも関わらず、災いは起こり続けた。地の底で、邪悪な影が人々の願いを喰らい続けたからだ。その力の怖ろしさは知っているはずだ。華奢な体に宿っただけで、山肌を数キロにわたって焼いてしまった」

「ちがうわ。安西君に宿った影は、光を求める心のエネルギーが洞窟に溜まったものよ。山火事を引き起こしたのは、宿っただけで、まだ使い方を知らなかっただけ。

災いを影のせいにするのはお門違いよ。影そのものに善悪はない。邪悪な影があるとすれば、それは、人の心の際に入りこむ鬼の影だけだわ」

こわばる口調で、蒼が懸命に話した。

天照の顔はいくぶん赤味を帯びていた。

「では尋ねるが、邪悪ではない者の影が、何故に、わが聖なる光に捕まっておる」

「私、今、わかったわ。あなたの術には力なんてない。私たちが動けないのは、水晶の発する高い周波数が、私たちの高いエネルギーを持った影とシンクロしているからだわ。聖なる光なんて、あなた

の思い込みに過ぎないわ」

「小娘が！わしを侮辱するか。事実を見よ。現に邪悪な影がこの少年に宿り、人々が凍りつくという災いが起こっているではないか」
言いながら天照は、細いロープを取り出し、床に倒れている圭太と新一を縛った。

「僕は、災いなんか起こしていない。あんたこそがその犯人じゃないか！」

「好きなだけ言うがいい」

天照は、もはや顔色を変えることはなかった。蒼も縛りはじめている。

「あんたはセコイヤの木をガラスで覆ってしまった。木が放つ育みの気を閉じ込めたところから、事件は起こっているんだ」

「わしなら逆のことを言う。この上に建つ鉄塔は、おまえたちのような者から、セコイヤの木を守るために作られはじめた。そして災いが生じる数日前に完成した。おまえたちが、いかに影の災いをばらまこうとも、ここを訪れる人は助かるのだ」

良は悟った。この男には何を話そうと理解してもらえない。たとえ幻人の世界に行ったことを伝えても無駄だろう。

天照は息を荒立てながら、良にもロープを回した。着物に染みついている汗の臭いが鼻をついた。

26 水門の中の修験者2

『おかしい』

何かが胸の奥に引っかかった。

遊園地に行つて、満とシーソーで遊んだ時のような奇妙な違和感。

・ ・ ・ なんて、こんな所にオンボロシーソーがあるんだよ・ ・ ・

自分がいったばやきを思い出しながら、良は改めて視線を走らせた。天照の持ち物に、飾り気のある物はまったくなかった。今、座っている畳は、色あせて黄ばみ、あちこちがささくれ立っている。祭壇にしてもそうだ。よく見れば、ただの木箱のようにしか見えない。

しかし一方、棚に並んでいるのは高価そうな液晶モニター、なにより、外には巨大なガラスの塔がたっている。コンクリートの土台と鉄塔、数知れない巨大ガラス。数千万、いや、数億円もの費用がかかっていることだろう。

目の前のみすばらしい修験者と、煌めき聳えるガラスの塔とは、あまりにも不釣り合いだった。

『修験者は、ただの代理。誰か大金持ちの黒幕がいるにちがいない』
それらしき手掛かりを探そうと目を動かした時、天照の溜息が漏れた。

「ほほう、これはいかなる力をもったものか。永遠を現す二匹の蛇が刻まれておる」

天照は、良の腰から引き抜いた小刀をしげしげと見つめた。

「それは、大切な人からの預かり物だ。返せ！」

良はどなった。三郎太の美しい魂が汚されているような気がした。

「むきになるか。すると邪悪な力を宿した物だな。光の神のもと、わしが預かっておこう」

天照は小刀を注意深く祭壇に置き、蠟燭の炎を両手に挟んで消した。同時に、こわばっていた良の体が急にほぐれた。縛られたまま、畳につつぷした。

ほどなく祭壇上の鏡がビリビリと震えだした。床からも振動が伝わってくる。

「さて、迎えが来たようだな」

天照はテレビモニターをちらりと見た。そこにはダムに接近する二機のヘリコプターが映っていた。一機は太いロープにコンテナをぶら下げている。水門の上で待っていた人が、激しい風にあおられるように岸边にもどった。

先に到着したヘリコプターから、ハシゴが投げ落とされた。背広を着た男たちが下りてくる。やがて靴音が響き、扉が荒々しく叩かれた。

「天照、影を守る者はおとなしくしているか？」

「おお、先ほど連絡した二人に加えて、新たに二名を捕まえましたぞ。一人は例の影を宿している」

天照が鍵を開けると同時に、六、七人の男たちがなだれこんできた。みな百八センチを超えるような大男だった。

「こやつらは？」

鷹のように鋭い目をした男が、圭太と新一に顎をしゃくつた。

「普通の人間だ。だが、こちらの二人と行動を共にし、邪悪な影に心を奪われてしまっており。その胸にぶら下げた石も、関係しているかもしれない」

天照は二人の首に煌めく石のかけらをもぎ取った。

「ならば一緒に連れていこう。先に捕まえた二人は？」

天照は開いたままの扉に視線を投げた。男たちの行動は早かった。奥に二人が駆け込んだかと思うと、肩に軽々と人を担いで出てきた。針金で体中縛りつけられている。

「お父さん。長老様！」

蒼が叫んだ。その声により二人は顔をあげた。

「皆、無事でなによりだ」

首に針金を食い込ませた蒼の父が、硬い笑顔を浮かべた。

同時に良たちも担ぎ上げられた。

「こいつらの始末は先生がきっちりつけてくれる。安心して人々の救いを続けてくれ」

リーダー格の男が振り返りながら話し、天照は手を合わせて応じた。

男たちは薄暗い通路を足早に進んだ。

水門の上に出た時、風が激しく殴りかかってきた。頭上でヘリコプターが、空気を叩き切りながらホバリングしていた。目の前に、緑色のコンテナが扉を開けて待っていた。良たちは、そこに乱暴に投げ込まれた。

扉が閉じられて間もなく、暗闇の中で、体がぐらぐらと揺れはじめた。コンテナを宙吊りにしたまま、ヘリコプターが飛び立ったのだ。風にあおられているのか、床が大きく傾いた。ズルズルと滑った良は、誰かの体に激しくぶつかった。

「痛い！」

目を覚ました新一の悲鳴が、小さな空間にこだました。

良の心が燃え立ちはじめた。

修験者、天照に感じた疑問は解消された。やはり誰か、ヘリコプターを所有できるような大金持ちが、あのガラスの塔を建てたのだ。

天照はただの手下か、うまく利用されているだけ。いったい誰なのだ、人々を苦しめる黒幕は！

ギリギリと軋んだコンテナの扉から、針の先ほどの光が忍び込んだ。

『影の力』

「安西君、気持ち落ち着かせるんじや。力を使うのはまだ早い」
胸の内を読んだような言葉。長老だ。

『怒りや憎しみ。それをもって影の力に身を任せたら、何をしでかさかわからない。もし、こんな所で蝙蝠の化け物に変身してしまつたら・・・炎を吐き、大切な人たちの命を奪うことにもなりかねない。』

押さえる、押さえるんだ』

深く息を吸い、長く吐いた。ただそのことだけに集中した。コンテナはぐるぐると回転しながら揺れ続けた。誰かの呻き声が痛々しく響く。

『いつまで続くんだ』

心が叫びはじめた時、いきなり鼓膜が破れるような音がして、コンテナの揺れがおさまった。どこかに降ろされたのだ。

次いで、金属を削るドリルの音がかん高く響き、頭上に穴が開いた。そしてシューというガスの吹き込む音。苦みのある嫌な臭いが充満する。

『催眠ガス、それとも毒ガス？』

良の意識は遠くなり、再び暗闇に突き落とされた。

27・黒幕の野望

良は青草の香るレンゲ畑に寝転んでいた。空には太陽が穏やかに輝いている。温かさが見えない手となり、硬く強ばった手足を揉みほぐしてくれているようだ。

正月のトレイルラン大会以来、こんなにのんびりしたことはなかった。

「こんなことしていいのか」

良はつぶやいた。

「いいのよ。ほら、向こうをご覧ください」

優しい声に従って顔を横にすると、川を隔てた向こう岸で、父さんと母さんがバドミントンをしていた。満はその間に座っている。こんなに気持ちがいいのに、外にまでゲームを持ち出している。それはともかく、良はほっと息をついた。

「事件は解決したんだっただね」

「そのとおりよ」

耳元で声が聞こえた。

目を寄せると、一匹のモンシロチョウが、菜の花にとまって羽根を揺らしていた。

「ねえ、もっとお話を聞かせて」

「どこまで話したんだっけ？」

良は先ほどから、この蝶と語り合っていたのだ。

ほとんどは良が話し、蝶は「大変だったわね」と言葉を返してくれていた。

「ほら、こちらの世界に戻ってきて、凍りついたダムを渡ったところまでよ」

「そうだったね」

良は小さくうなずき、また語りだした。

「それでダムの水門の上を歩いていると、親切そうなおばちゃんが、

声をかけてきたんだ。それがおかしいんだ。おばちゃんは僕の方を見ようとしない。なんでだと思っ

「ふふ、そこまで結構」

笑いを含んだ返事だった。蝶の声ではない。

「どうしたの」

横を見れば、いつの間にか、隣に咲いていた菜の花は凍りつき、蝶はどこかに消えていた。向こう岸に見える父さんたちが、どんどん遠くなっていく。川の上流から、巨大な氷の塊が音もなく滑ってきていた。岸を引き裂くように広がっていく。

「待つて！僕をおいていかないで」

叫んだ声が虚ろに響いた。太陽の光が点滅しはじめている。

カチカチ カチカチ。

「安西君、協力ありがとう」

光に黒い影が浮き出て、にやりと笑った。

「うわっ！」

両手で草を握りしめた。引きちぎって影に投げようとした。が、手は動かない。

「来るな」

良は硬いクッションに背中を打ちつけた。

目の前でデスクスタンドの電球が点滅していた。両手は椅子の肘かけに括りつけられていた。

「まことに驚くばかりだ」

天井に乳白色のライトがつき、六十才ぐらいの男が顔をのぞきこんだ。いかにも金持ちらしい仕立てのよい背広を着こんでいる。どこかで見た顔だったか思い出せなかった。横には白衣を着た無表情な女が立っていた。

「君、もう用はすんだ。部屋を離れたまえ」

「それでは失礼いたします」

女は丁寧な頭を下げて出ていった。女の声・・・優しさはなくしてい

だが、それは今まで話していた蝶の声だった。

そこは会議室のような広間だった。

男の後ろには、透明なガラスで仕切られた小部屋があり、圭太と新一、蒼がしきりにガラスを叩いていた。かなり厚いらしく音は聞こえない。蒼の父と長老の姿もある。皆、ロープや針金をほどかれていた。

「それにしても興味深い話を聞いた。もう一つの世界の者の祈りが、この世界の自然を支えていたとはな。君からの話だけなら、単なる妄想と笑っていたかもしれない」

男は感嘆まじりのため息をもらした。が、すぐにも笑いを浮かべるように脂ぎった頬が突き出した。

良は顔をそむけたが、その先の広間の入口に、大きな顔写真入りのポスターが張ってあった。

・・おまかせ下さい

美しい日本の自然、私が守ります。

乱堂金一・・

『乱堂・・』

良は思い出した。テレビでよく見かける政治家だった。確か、誰も推薦していないのに、次の総選挙では総理大臣なる主張し、世間で笑い者になっていた。

良たちはこの乱堂という男にすべてを話してしまったのだ。先ほど広間を出ていった女の催眠術にかかれて・・。

「あんたが、あのセコイヤをガラスで覆ったんだな。自然界が必要としているエネルギーを奪うために」

良は乱堂をにらみつけた。

「ああそうだよ。だが、最初からそんな大それたことを考えていたわけではない。仕事の成り行きで、そうなってしまうただけだ。わしの政治家としての信条は知っているかの？」

「そんなの知るか」

「自然保護だよ、君」

乱堂は唇をなめ、大げさに腕を広げた。

「もう十年も前のことだ。あのダム建設がはじまった時、地元住民が、セコイヤの木の保護を国に訴えた。ところが肝心の四国の政治家や役人たちは、訴えが遅すぎると知らぬふり。それでわしにお声がかかった。選挙区ではなかったが、わしは仕方なく真冬の現地に視察に出かけた。

驚いたよ。セコイヤの木の根元には、食事もとらずに薄着で祈り続ける修験者、天照がいたじゃないか。わしはピーンときた。あのセコイヤの木は、ただならぬ力を秘めているとな」

良は再び顔をそむけた。鼻の先でグフグフと笑う男の生臭い息に気分が悪くなったのだ。

が、声は耳元で続けられた。

「わしはセコイヤの木を保護すると宣言した。地元の住民は大賛成。あの頭のかたい天照も手を叩いてくれた。そこでわしの本格的な仕事が始まったわけだ。

ダムの水門に、監視用の小部屋を増設することからはじまって……まったく、あの塔を建てるために、どれだけの金を遣ったか。周囲をおおえば、すぐに木は成長してガラスを突き破ってしまう。

高く伸びて伸びて、ようやくこの正月に完成したが、まあ、今となつては安い投資だったわ。セコイヤの木の力を手にいれるための工事が、はは、完成してみれば、この国の安定を実現するための偉大な仕事になっていたのだからな」

やはり天照は、この男に利用されているだけだった。一途に光の神を信じる瘦せた男が哀れに思えてきた。

「安定を実現する？あんたは人々を苦しめているだけだ」
良は低く言った。

「それは違うぞ。苦しむからこそ人々は救われるのだ。今の日本は、苦しみを忘れてしまっている。だからほれ、大地への祈りを忘れて

しまった。生きているという当たり前のありがたささえも忘れてしまった。

最近、人々は救いを求めて祈りはじめた。他人と手を取り合い、真剣に生きはじめた。たしか幻人といったかの、やがて彼らの国にも青空が復活するだろう」

口の中に血の味がした。

いつの間にか、良は唇を強くかんでいた。

幻人の世界で、輝きの島は薄く光りはじめていた。確かにこの男が言うことは当たっていたのだ。

「あんたは、何をしようとしているんだ」

「言っただけだ、日本という国の安定の実現だよ。わしが人々の祈りの中心に座ってな。」

君は知らんかもしれんが、全国には、冬になっても葉を落とさないおかしな落葉樹が数本ある。育みの気の吹き出し口は、まだ幾つかあるんだ。それらをすべてガラスの塔で覆えば、わしの計画は完成する。世界にも目を向けたいところだが、まあ取りあえずは日本でな。

わしは人々を導く偉大な父となる。かつての総理大臣になる夢など、比べるほどもない小さなものだったわい」

乱堂は太った体を揺すりながら、背広のポケットに手を突っ込んだ。開いた手には、薬のカプセルが十数個握られていた。

「この中には、あのセコイヤの木の周囲の空気が入っている。それを吸えば、凍りついた人々は元に戻る。だからな、今の四国の人々にとっては、どんな物より貴重ってわけだ。それをわしはこの手に握りしめている」

乱堂は、カプセルの一つを鼻の横で力チリと割り、大きく息を吸った。

「君たちを捕らえ、すべてを知った今、時は満ちたのだ。謎の光の大使が名前を公表してもよい時がやってきたのだ。もはや天照に用

はなくなつた」

良は目を見開いた。いったい天照の役目とは何だつたのか。

「まったくあの男を抱き込んでおいてよかつたよ。彼は君たちが神聖な場所を破壊するためにやってくるかと信じていた。そして見事的中。おまけに妙な術を使って君たちを捕らえてくれた。遊び半分で山の修験者に耳を傾けていたが、思わぬ拾いものをしたつてわけだ」
太った顔がにじんで見えた。目から涙がこぼれていた。なんでこんな奴に話をしてしまったのか。そのことだけでも自分が情けなくなつた。

「ちくしょう」

良は唸つた。

「気持ちを押さえたまえ。影の力を使って炎を吐けば、大切な友だちも黒焦げだよ。さあ、最後の時を有効に使いたまえ。君がもてあましている竜の影とやらは、後で、わしがもらい受けてやるう」

乱堂は高らかに笑いながら部屋を出ていった。入れ代わりに黒服の男たちが入ってきた。良の縛られている椅子をガラガラと転がし、蒼たちのいる部屋の前に運んだ。鍵をはずして小さくドアを開けると、何も言わずに押しこみ、また鍵をかけた。

「良ちゃん！」

皆が駆けより、硬く結ばれたロープをほどいてくれた。

「催眠すごく長かつたけど、頭は大丈夫？」

新一が聞いた。

「ああ。でも中身は全部ひき出されてしまった」

良は舌打ちしながら話した。

皆の顔色はすこぶるよかつた。針金で縛られていた長老たちも元気そうだった。

「あの乱堂って奴、いやみにもほどがある」

圭太の指さす床の上に、たくさんの薬のカプセルが割れて落ちていた。部屋の中は、育みの気で満ちていた。

「くそ！」

良は椅子を高くかかけ、思い切りガラスにぶち当てた。わずかに撓んだのように見えるが、ガラスは無傷で椅子を弾き返した。

「特殊プラスチックだ。とてもではないが割ることはできない」
蒼の父が静かに言った。

「あの男は育みの気だけでなく、僕の宿している影も手に入れようとしています」

「じゃあ、安西君の命は・・・」

力のない蒼のつぶやきを横に、良は大人たちに向き直ったが、二人は黙ったままだった。

赤い顔をした新一が口を開いた。

「良ちゃん、何をしてもかまわないよ。あいつの秘密を知っている僕たちだって、どうせ殺されてしまっただ。それなら良ちゃんにやられた方がましだよ」

「新一、最後に格好つけるなよ。俺だって同じ気持ちさ。良、影の力を使って、この建物ごと、あいつを焼いてしまってくれ！」
圭太がまっすぐに背筋を伸ばした。

「最後なんて言うなよ。まだ終わっちゃいないんだ」

良は小さく言った。

いつになるかはわからない。しかし、最後の時は確実にやってくる。天井の片隅に備えつけられたカメラの横には、細い管が突き出ている。そこから通気音が聞こえはじめたら、すべてが終わりなのだ。

「安西君、あきらめよう」

長老が肩を落として言った。

「こうなることがわかっておいたら、やはり洞窟で君の息の根をとめておくんじゃない。乱堂の住まいは淡路島の東の端、まさかこんな所で命を落とすことになるなんぞ」

「長老さん、そんなこと言ってはだめだよ」

新一が半べそ混じりに言った。

「くそっ！」

怒りの声を出した蒼の父が、椅子を高く放り投げた。脚の車輪の一つが天井の電球を割り、部屋の中は薄暗くなった。

「長老のおっしゃるとおりだ。君が影を伸ばしたり、余計なことをしたから、話がこんがらかちまっただ。自由の身なら、竜の像の元に連れて行って命を奪ってやるのに」

そのまま良の腕を掴み、Tシャツを荒々しく引っ張った。

これまで冷静そのものだった人の行動とは考えられなかった。思わずよろめくと、今度は頬を強く叩いてきた。良は床に崩れた。

「良は、悪いことなんかしていない」

圭太が、蒼の父に掴みかかっていた。

28・竜の召喚

『二人は、僕に何かをさせようとしている』
床に崩れかけた時、確かに耳元で聞こえた。

「一か八かだ、安西君」

蒼の父はそう囁いた。

圭太の怒りの声を聞き流しながら、良は考えた。

『竜の像に影を返せ』

二人が言ったのは、そういう内容だった。

・奪われる前に、影を伸ばし竜の像に返す・
電撃のように閃いた。

果たしてそんなことが可能なのだろうか。しかし、一か八か、やってみなければわからない。

良は冷やかな床に頬をつけたまま意識を集中した。心をかすかな影に乗せていく。

「安西君、大丈夫？」

蒼が顔をのぞきこんだ。その目は、お地蔵さんの中に入り込んだ時のように青白く光っていた。体から 床に触れる圧迫感が消えていく。力を得た影が、蜜のように流れはじめた。

ここ、乱堂の住まいは淡路島の東の端、長老は言っていた。しかし方位磁石などなく、どちらがどの方角かわからない。

良は影を薄く広げた。

広い屋敷を出たところに、砂浜の感触があつた。そのまま浜辺にそって影を伸ばした。すぐにも空中に伸びる道を見つけた。

明石大橋・淡路島と本州を結ぶ巨大な橋。ということは・

近畿圏の地図を頭に描いた。影を伸ばす方角がわかった。

『よし』

良は、捕鯨船から撃ち出される話のように影を突き出した。狙った鯨に向かい、ロープのついた話が一直線に飛んでいく、そんな感じだ。ただし、もっと細くもっと早く。

凹凸の激しい地面を、影はまっすぐに南西に伸びていった。途中、影から伝わる感覚がなくなった。海上か海中を走っている。根元から押し出す青白い光が強くなった。不安定になった影に勢いが戻った。加速しながらぐんぐん伸びていく。

地を走るザラザラとした感触が蘇った。上り下りが激しくなる。山に入った。いったん止まり、先端の感触を高め、歌舞伎の蜘蛛糸投げのように触手を前に広げた。

一本の触手が、山麓の煉瓦調の建物に触れた。ステップの前の大きな石をそろりと撫でる。

佐・那・河・内・村・役・場・・・読めた。

他の触手を縮めて一本にまとめ、舗装された道をうねりながら登っていく。やがて砂利の敷きつめられた広場についた。

『トレイルラン大会のやり直した、ゴールはまた違うけれど・・・』
記憶に刻まれたコースのUターン地点で触手を再び広げた。今度は小さな魚も逃さない投網のように。

『あつた』

周囲とは明らかに感触の異なる場所があった。凍りついた木々の茂みに、ぽっかりと空間が開き、人の手が入った角ばった岩が転がっている。良が落ちこんだ穴があつたところだ。

影に重みを持たせた。大岩の下に一ミリほどもない隙間が開いていて、タラリと流れていく。

『とつとつ見つけた』

穴の下に広がる洞窟の壁を伝い、突き出している巨大な塊を包み込んだ。

『竜よ。僕はあなたに、影を返しにきた』

影の先端に、心の言葉をこめた。

沈黙・

そして岩が震えた。

『おまえの肉体は未だ命を保っている。わしに影は返せない』
竜の形をした石像が話した。

『でも、僕は返さなければならぬ。さもなければ他人に取られてしまふ』

『それはわしの知らないこと』

『では、あなたの影は汚されることになる。新しい宿り主は、人々の祈りとはかけ離れた自分の欲のためだけに、影の力を使おうとする』

『おまえはわしを脅しているのか』

岩の微震動がわずかに大きくなった。

『僕は、影を返したいだけです』

『ならば、命を捨てる！』

『それができないのです。僕は今、自分の体をどうすることもできない』

竜の石像がぐらりと揺れた。ガラガラと岩のかけらが落ちていく。

『よかろう。おまえの命、奪いに参ろう』

大音響が轟き、石像の感触が少し滑らかになった。良の体から伸びた影の先端が、鍾乳石に溶け込んだ。次の瞬間、影は一気に縮みは

じめた。まるで長く伸ばされたゴムの端が放たれたように。

「安西君、目を覚ませ」

目を開くと、かがみ込んだ蒼の父が、頬を平手打ちしていた。

「竜がこつちにやってきます。僕の命を奪いに。もう海上に！」
良は叫びながら飛び起きた。

薄暗がりの中、細い影が部屋の外に伸びていた。もはや、それは思うようにならなかった。

「聞いたじやろう、乱堂。おまえはもはやこの若者の命を奪えない。おまえが代わって影を宿せば、さてどうなるか。今度はおまえの命が、竜の標的となるやもしれん」

長老が天井カメラに向かって話した。

「くそつ、謀りおつたな。わしはここを去る。貴様らは竜の餌食となれ！」

壁に埋め込まれたスピーカーからわめき声が聞こえた。天井の管からは、かすかな通気音が聞こえはじめている。

「皆、床に伏せる！息を止めるんだ」

蒼の父がどなった。

次の瞬間、ガラガラと凄まじい音が響いた。縮む影の糸に乗り、轟音はどんどん近づいてくる。最後に重いきしみが聞こえ、

ガボツ！

死をもたらすガス管もろとも天井が吹き飛んだ。部屋を仕切っていたガラスが枠から外れ、外側にゆっくり倒れた。

29・竜の召喚2

見上げた紺色の空には、赤い光が薄く滲んでいた。口を開けた天井の一角に巨体が翼を広げて立っていた。

「翼竜・・・ケツアルコアトルス」
新一が呻いた。

だがそれは、図鑑に見る翼竜より遙かに重厚な威圧感に満ち、体長は優に二十メートルを超えている。余分な岩や土が付着しているためか、体全体がごつごつと粗く見える。

「約束通り、命を奪いに参った」

風の唸りのような低い声 flowed。同時に良は竜との間をつなぐ影に引きずられ、宙に上がっていった。

「良、いっちゃだめだ！」

圭太が叫びながら、体にしがみつこうとした。だが、すでに高すぎた。

「いいんだ。これしか方法はなかった」

静かに言った良に恐怖はなかった。重い荷物をおき、ベッドに横たわるような感じがした。

竜は、大木の根のような足元から、二メートルほどのところに良を降ろした。

二階建ての大屋敷だったのだろう、周囲にはへしゃげた壁と太い柱がいくつか残り、瓦やガラスが散乱していた。外には、刈りそろえられた松の木が頭をのぞかせていた。

空の赤い滲みはさらに広がり、黄色が混じりはじめていた。太陽が半分顔を出している。夜明けだった。

「オーフ、我が影」

竜が、鋭い鉤爪のついた翼を良に振り上げた。

「待たれい！畏れ多き竜よ」

下の階から、長老が声高くいった。

「ご自身の誠の姿をごらんあれ」

恐ろしい顔が、ゆっくりと傾いた。翼の動きは止まっている。

「安西君、影を、竜の形にするのよ！」

蒼の叫びが響いた。

・・・影を竜の形に・・・

良は蒼の言葉をそのまま繰り返して、朝日に長く伸びる自分の影を見つめた。頭の片隅に青白い光が思い浮かぶのと同時に、体が急に軽くなった。

人の輪郭をなくした影が、墨のように濃くなっていく。すぐにもそれは翼を生やしはじめた。

「そんなに小さくはない。もっと大きくたくましく」

つぶやきに応じて、影は幾倍にも膨れあがった。竜の巨大な足の下に移動していく。

「さようなら、影」

漏れだした言葉にバラバラと雹が降るような音が続いた。

力なく顔をあげると、目の前の巨体にひびが入り、不純物が混じった石のかけらが剥がれ落ちていた。太い首を回すたびに激しく落ちてくる。中からは眩しい光が放射されていた。

「フーウ」

ぐるりと首を回して自分の体を眺めた竜は、太陽に向き直って大きく震えた。表面に残っていた細かなかけらが、風に流されていった。

良は目をしばたいた。

滑らかな白い巨体が、朝日を反射してきらめいていた。動かなければ、美しい大理石の彫像のように見える。内側からも放たれる光と

の相乗効果で、なおさらに眩しく見えた。

「ウーウウ、わしはこの体に相応しい影をもって目覚めた」
緑色の目が良を見つめた。体と同じく内側から輝いている。笑っているようにも見えた。翼は、巨体の胸に折りたたまれていた。

「残念だが、交わされた二つの言葉は果たされない。影を得たわしはおまえの命を奪わない。命あるおまえはわしに影を返さない」
良は視線をさげた。

竜と結ばれている細い影は、まだ残っていた。

30・巣くっていた鬼

「ひゃー、ぶったまげたな」

どこから登ってきたのやら、圭太が駆け寄ってきた。腰を曲げ忍び足になっている。他の皆も後に続いていった。

「一族が守りし影の主よ、我らにお言葉を」

長老が眩しく輝く竜の前で膝をつき、手を合わせた。蒼と父もその後ろについた。

「影の守り人たちよ。出会いの言葉の代わりに、問いを投げよう。

おまえたちは光り輝くこの体を目にした。これより先、おまえたちが守るのはどちらだ、わしか、それとも影か？」

竜が聞いた。鋭く威厳に満ちた声だった。

圭太と新一が、良の後ろに隠れようとして体をぶつけ合った。

「もちろん、影でございます」

長老は力強く答えた

「さて興味深い。その理由は？」

「今こそ、あなた様は、竜の体を持たれて我らが前に現れられた。

ですが、あなた様の本質は、人々の祈りによつて生まれた恵みの光そのもの。そのお方を守ろうとしても、目が眩むばかり。元より、

我らの宿命は、光を支える影を守ることでありますからに」

「フウハー、なるほどの。では、いま一つ尋ねよう。もしやおまえたちは知っていたのではないか。祈りの現れであるわしが、輝く体

を持って目覚めた時、若者の命を奪うことはない事を」

「確証はあらず。なれど、厚き信心は仰せの通り」

「フウファハー、誠に賢き者たちよ」

竜は牙を剥き出して笑った。影の守り人である三人は深々と頭を下げた。

圭太が、蒼の父さんを殴った手をさすった。

「なんだよ、ややこしい。だったら最初から、竜を呼ぶように言えばよかったのに」

「二人は、乱堂と僕を騙したんだ。本当の事を言ったら、あいつはすぐに毒ガスを流し込んだ。僕も命を賭けてまで影を返そうとしなかった。それで、ぎりぎりの所で、竜をここまで連れて来させたんだ」

良は言った。

「けど、まだ竜と繋がれた影は残ってるよ。用はなくなったし、全部返してしまつたら」

細い影を指さしながら、新一が呑気に言った。

「それはできない!」

地鳴りのような声が響いた。

「影を完全に返す時。それは宿り主が命を失う時。おまえは彼に命を捨てよと勧めているのか」

「そんな、とんでもござりるません」

新一は舌をかみながら、亀のように首をすくめた。皆がクスツと吹き出した。滅多に笑わない蒼の父さんも、苦笑いを浮かべて額を小突いた。

「新一、用はなくなつたつて言つたけど、乱堂を見かけたのか?」

首をすくめたままの新一に代わつて、蒼が答えた。

「彼は死んだわ。崩れた壁の下で、息絶えていた」

「命つて、ほんと呆気ない・・・」

手をさすっていた圭太が、急に凍りついた。目を細めて横手を睨んでいる。

長老たちは、いつの間にか場所を移動していた。今話したばかりの蒼が、高く跳ね上がり、大人たちとの間に立った。

圭太が目を見開いた。

「おい、ありゃ」

壁の残骸の中に乱堂が立っていた。

「おまえは何者じゃ！」

長老が声を張り上げた。

「狼の精霊の宿り手よ。ぬしらは黙っておれ」

乱堂は、五メートル四方もある壁を、発泡スチロールの板のように蹴り飛ばした。

歩く度に体が膨れていく。筋肉が盛り上がり、着ていた服は縦横に裂けた。顔付きも変わっていった。目は赤くぎらつき、突き出した下顎には、乱杭歯がこぼれんばかりに生え出していた。解れた髪の中に黄ばんだ角が見えた。

「鬼だ」

良はつぶやいた。

鬼は見る間にも、竜と同等の体格に巨大化していった。

「安西君、あいつは君に取り憑こうとしている。我らが時間を稼ぐ。竜の影を動かして身にまとうんだ」

蒼の父が振り向きざまに言った。その目は青白い光を帯びていた。そして遠吠えとともに、蒼たち三人は狼の姿となった。

「影を守る者よ。やがて、ぬしらはわしを守ることになる」

鬼はゆっくりと前に歩んだ。足元の瓦が煎餅のように割れていく。狼たちが鋭い牙を節くれた足に突き立てた。

「ぐずぐずしないで。鬼は、命を亡くした肉体には長く留まれない。あなたに宿って、影の力をも奪うつもりなのよ」

蒼の声が響いた。

「邪魔をするな。影はわしと交わり、より強い力を得る。守り甲斐があるだろうが」

太い腕が足元をなぎ払った。三匹の狼は宙に飛ばされた。くるりと体を捻って着地し、再び飛びかかっていく。

「竜よ、僕らを助けて下さい」

良は輝く巨体に願った。

「わしは光が形を成して現れたもの。闇の現れである鬼とは表裏の関係。戦おうとしても、擦れ違えばかり。無理にかち合えば、この世に【無】が訪れる。あれと戦えるのは、わしの影。この体とは別に宿ったわしの影」

身動きしないまま竜が答えた。

『鬼と戦えるのは、別の体に宿った影。それは・・竜の影を身にまとった・・僕』

「安西君、早く！」

蒼の声が細くなった。遠くに弾かれた小柄な狼が足を折って倒れた。圭太と新一は床にへたり込んでしまっている。

『やるしかないんだ』

良は息を吐きながら目をつぶった。竜の足下に伸びる巨大な影に意識を注ぐ。

『影よ。そのまま前に！』

祈りながら目を開けると、既に影は移動し、ゆるりと地面から立ち上がるうとしていた。良は腕を広げ、迎えるように湾曲した影に足を踏み出した。彼は、白く輝く竜と全く同型の巨大な黒い竜へと変化した。

「ふふ、見事見事」

鬼は、不気味に笑いながら近寄ってきた。

「竜の影を宿す者よ。おまえは恵みをもたらす陽の力に満ちている。だが、その力は使い方によっては、破壊をもたらす陰の力に転じることもできる。よく考えよ。妬みと恨みに満ちた人の世で、陽の力を持つことが如何に孤独かを。陰の力を用いることの満ちたりた思いを。」

さあ、わしと手を結ぼう。さすれば、お堅い竜との柵は断ち切れる。わしは、おまえが用いようとする陰の力に大いに手を貸そう」

毛むくじやらの腕が、親しい友人のように伸びてきた。良の片方の翼がばらりと垂れ、手を差し出すように、ゆっくりと上がっていった。正義の心に導かれるものであれ、力そのものには、善悪の区別はない。その力が、強いエネルギーと手を結ぶことを望んでいた。鬼の後ろに横倒しになった三匹の狼が見えた。気が逸れたためか、はっとして翼を畳んだ。

「よくも犬神さんたちを」

胸の奥に熱い物が込み上げてきた。同時に、翼が再び上がっていく。

「良ちゃん、怒っちゃだめだ」

新一の喘ぎ声が聞こえた。

「自分を見失ったら、鬼に取り込まれるぞ」

圭太が続いた。

「小僧らは黙っておれ」

前に進んだ鬼は、若者たちを叩き飛ばした。

「怒れ、怒れ！怒れば、楽になれる。わしと一緒にになれるぞ」

含んだ声で鬼は言い、黒い胸を激しく突いてきた。倒れた床がバリバリと崩れ、良は下の階に落ち込んだ。

31・巣くっていた鬼2

『心に炎を思い浮かべるんだ。怒りに燃える炎じゃない、温かさに満ちた炎を』

良は自分に言い聞かせ、倒れる時に見えた赤い太陽を心に描いた。

「友よ、離れるでない」

恐ろしい顔が、崩れた天井からのぞいた。

良は鬼の顔を目がけ、胸に沸き立つ熱い物を吐き出した。それは地球の脈動、大地の奥底に流れる灼熱のマグマだった。同時に鬼もぶくぶくと何かを吐き出した。それは憎しみに満ちた人々の凍りついた顔、顔……。いてつく冷気に激突したマグマはたちまちに固まり、黒い岩となって砕け散った。

「わしを育てた人々の憎しみを侮るな。さあ、行くぞ」

穴の縁から降りてきた鬼は、重機のような力で良を羽交い締めにした。

「力を抜け、わしらは仲間だ」

良は身動きできなかつた。鬼の体がじわじわと重なってきた。

人の憎しみ、恨み、妬み……。冷たい針が無数の低い声とともに体に侵入してくる。

『優しさを求める孤独な心、その隙間に鬼は取り憑いている。探すのだ、人の心を』

竜の言葉が頭に響いた。

・・・そう、自分はまだ、竜と繋がっている・・・

その思いが、抵抗への諦めを打ち砕いた。良は、重なりつつある鬼

の体に、人の心を探した。

・・そんなくだらんこと、やめちまえ。おまえは、仲間と一体化しようとする自分を破壊しようとしているのか・・

耳の奥でキイキイと甲高い声が聞こえ、意識は幾度も遠退きかけた。

二体の胸部が重なった時だった。

『一緒に遊んでおくれよ』

いきなり声が聞こえた。

良は心を澄ました。

『成り上がりのぼんぼん野郎、俺たちが遊んでやっているのは、おまえが金持ちだからだよ。遊んでほしけりゃ、小遣い持ってきた』
胸の奥に縮こまったかけらがあつた。あちこちから辛い言葉を投げられている。

『俺だつて、好きで金持ちに生まれたわけじゃない。畜生、見返してやる。おまえらを俺の足元に跪かしてやる！』

かけらは精一杯に罵った。

『・・やあ』

良は、胸の奥に感じるかけらに声を掛けた。

何をしてよいか分からなかったが、自然に心が開いたのだ。

『誰だ！奴らの仲間か』

鋭い声が返るとともに、小さな映像が見えてきた。

砂利だらけの道端に一人の少年が座っていた。泣き腫らした顔で辺りを見回している。それは幼い頃の乱堂だった。

戦争成金でのし上がった乱堂家の一人息子。その顔には、まだあの憎々しさは張り付いていなかった。

血の通った友人との関わりを求め続け、結局、いつも裏切られた孤独な少年。悲しい経験が、人を憎しみきれない透き通った瞳に、次々と映っては消えていった。

『あまえは誰だつて聞いているんだ!』

『僕は、君に会いにきた者』

良は映像の中の少年に、そつと心の手を差し伸べた。少年が求めているものを自分は持っている。それが分かっていた。

・・良、俺らが付いてる。踏ん張るんだ・・

かすかに聞こえる友人の声に応じるように、心の手に小さな灯火がついた。

『それを俺に?』

少年には良の手は見えず、灯火だけが見えたようだった。疑い深い目つきをしながらも、灯火に腕を伸ばそうとしている。

『坊や、そいつに騙されちゃいけない。温かそうに見えても、うわべだけだ』

声が響き、少年は腕を引いた。その足元からは、黒い影が伸び出ていた。それは鬼の形となり、ゆらゆらと立ち上がった。

『この灯火は君にあげられる物ではない。でも、温かさを分かち合うことはできる』

鬼の影を無視し、良は思ったままを伝えた。言葉を飾りたてても、役に立たないことは分かっていた。

『途中で、引つ込めたりしない?』

『うん、君が求めるなら』

『騙されるな。信じるほどに後で辛くなるぞ』

黒い影が、少年の耳元で囁いた。

『本当に引つ込めない?』

少年は吹き込まれる言葉を払うように、頭を振って必死に聞いた。ただただ灯火の近くから響く良の声にしがみつこうとしていた。

『僕は君を裏切らない』

良は力強く頷いた。掌の灯火が一回り大きくなった。

少年は再び腕を伸ばし、灯火に手をかざした。

『これ、すごく温かいや』

顔をほころばして無邪気に笑った。

ウイギーー、

朽ちて倒れる古木の軋みのような声・黒い影は飛び散った。

目を開けると、隣に乱堂の冷たい体が横たわっていた。顔は静かに微笑んでいるように見えた。首を回したが、鬼の姿はどこにもなかった。良は元の姿に戻っていた。

眩しい輝きが辺りを包んだ。見上げれば、翼を広げた竜がこちらをのぞきこみ、その間の中空には、妖精のように透き通った少年が浮かんでいた。ゆっくりと上昇していく。

「我が元に」

低く話した竜は、ヒナを抱く母鳥のように少年を迎えた。少年は満ち足りた表情を浮かべ、光の中に消えていった。

良は息をついた。傷付いていた少年の心は救われたのだ。そして鬼は消え去った。

「でも・・・」

やりきれない思いが残った。乱堂の言葉が胸に引っかかっていた。

・・・人は祈りを、生きているありがたさを忘れてしまった。そして最近、祈りはじめた・・・

根っこの所で、人の心の温もりを求めていたあの悪党は・・・やり方や目的は、間違っていたかもしれないが、人々の祈りを復活させたのだ。幻人の世界で、輝きの島は光を帯びはじめていた。

『畜生、他に方法はなかったのか』

心の声が聞こえたかのように、緑色の目がじっと見つめた。

『おまえは一人ではない。傷ついた仲間には我が光を与えた。さあ、

できることを果たせ』

竜と結ばれている影が短くなり、良を上階に引き上げた。

すでに蒼たちは人間の姿に戻っていた。皆、しっかりと立っている。

「本当にあいつはいなくなっただの」

新一が不安そうにあたりを見回した。

「鬼は、乱堂の心に巣くっていた」

髭を撫でた長老が口を開いた。

「そして、彼の孤独な心が癒された時、鬼は居場所を失ったんじゃ。しかし、いなくなっただけではない。砕け散った鬼のエネルギー体はやがて集結し、再び取り憑く人間を見つけるじやろう。人の心は、鬼の言葉にたやすく応じてしまう。それに世には、人に取り憑いている鬼が何匹もいるはず。油断はできんぞ」

しゃがれた声は、皆の胸に重く響いた。

「行かなくては!」

良の口から言葉が漏れた。

「僕ができることを待っている人々がいる。何ができるかなんて分からない。でも、行かなくては」

「影の宿り主よ」

竜が低く首を垂らした。

「おまえが行くなら、わしも行くということ。さあ、わが背に」

足を踏み出した良の腕を、圭太が引いた。

「俺たちも乗せてくれるか、聞いてみて」

「俺たちって?」

新一の顔がこわばった。

「当然、俺とおまえだよ。良一人を行かすわけにはいかないだろう」

「そりゃそうだけど」

「私もよ。影を守る者を忘れてはいけないわ」

蒼が首を突っ込んできた。

「そう言っていますか」

良は竜に聞いた。

「美しい光は互いに求め合う。オオーウ、それを邪魔だてするものは何もない」

竜の体がさらに眩しく輝いた。

「じゃあ、遠慮はいらないってことですね」

良は滑らかな竜の背に登り、硬く突き出した背びれの一つに手をかけた。

「さあ、みんな」

「ほれ、親友が呼んでいるぜ」

べそをかきはじめた新一の太い体を圭太がせつついた。蒼が座った時、白い巨体は首を上げ翼を大きく広げた。

「安西君、わしらは暫くここに残る。今回の事件で、鬼の仲間はずらを敵と見なすようになったはず。今後、奴らと戦うためにも、乱堂が企てていた陰謀を調べておかんといかん。それに彼の埋葬もしてやらんとな」

長老が言った。

その隣で、蒼の父が腫れた頬を撫でながら、もう一方の手の親指を上突き出した。

「犬神さん、あれって俺へのいやみかな？」

「違うわ。頼んだぞって言っているのよ」

圭太と蒼の声を聞きながら、良は長老に頭を下げ、目の滑らかな背を撫でた。

「では、竜よ、お願いします」

「承知！」

翼が打ち下ろされた。

・・・良ちゃん、何処に！・・・

巻き起こった風に、新一の震える叫びが混じった。

32・二匹の巨竜

朝日を背に竜は羽ばたいていた。下方には緑あふれる淡路島が広がっている。その中央を広い道が突き抜けている。

本州から伸びる神戸淡路鳴門自動車道。一度、家族で大阪に行った時に通ったことがある。なにもない時なら、朝方でもバスやトラックが行き交っているはずだが、今は片付け忘れた玩具の道路のように物寂しい。

育みの気の密度の違いからか、竜の頭越しに見える前方の景色が、陽炎のように揺らめいていた。やがて、島の端の道を閉鎖する自衛隊の車列が見えてきた。

「お疲れ。ウイルスは見つかりましたか」
後ろから圭太の声が聞こえた。

大きく振り返ろうとした良だが、風がびよびよと頬を殴りつけ、慌てて前を向いた。気流は、竜の尖った頭部にぶつかり、斜め側面に切り分けられているようだった。

淡路島と四国を結ぶ大橋を越えたあたりから、風がサラサラと薄くなった。凸凹した海岸線は白く凍りついたままだった。

目の前には、灰色の巨島が横たわっている。五月の太陽が光を投げているのに、四国の大地は冬の景色のままだった。

四国一の川、吉野川の両岸には多くの町が開けていたが、明かりは見えず、焚き火のような炎がぼつぼつとあるだけ、まるでゴーストタウンのようだった。途中、四人の家がある町がちらりと見えた。

「父さんたちは、元気なのだろうか。僕のこと、どう思っているのだろうか？」

本音の所、静かに凍りついてほしかった。安らぎのないまま、数ヶ月も過ごすなんて辛すぎる。後ろに座る圭太と新一も、そう考

えているような気がした。

先に小さな塊が見えた。

見る間にも大きくなり、派手な音を立てて横をかすめ飛んだ。深緑色の大きな機体、自衛隊のヘリコプターだった。夜明け直後の時間だが、本州と分断されている四国に、生活に必要な物資を運んでいるのだった。

竜は、四国山地の上空を、ほぼまっすぐに飛んでいった。雪を冠した峰を次々と越えていく。

「目指すガラスの塔は、四国山地の中央です。その場所を知っていますか」

『わしの影を育てた光のかけら。おまえが心に描いた塔の下に見つけた。それがわしを導いている』

良の問いかけに、竜が心の声で答えた。

山々の巒のうち、棧橋のような遊歩道をおいた頂き、たぶん西日本で二番目に高い山、剣山だろう。それを過ぎて間もなく、深く切れ込んだ谷の向こうに巨大なダムが見えてきた。吉野川の水のコントローラー、早明浦ダムだ。その先に一回り小さいダムがあり、水門にはみ出すようにガラスの塔がたっていた。

それはもう十年以上も前の夏、早明浦ダムの水が干上がったから、その予備タンクとして作られた井野川ダムだった。

竜は煌めく塔の上空を旋回しはじめた。

『あれは!?!』

良は目を見張った。

竜が通った空の道に、飛行機雲のような白い筋が残っていた。ゆっくりと広がり地上に降りている。その下の灰色の大地は、瑞々しい緑色に変わっていく。

『竜の輝きは、育みの気と同じ力を持っているんだ』

『だが、それは一時のこと。自然は絶え間ないエネルギーを必要とする』

良の心に竜が答えた。

『では下に降りよう』

翼を折った竜は、水門の上に降り立った。

眼下に広がる水面は、さざ波を立てて煌めいていた。竜が上空を旋回したことで、厚く張っていた氷が溶けたのだ。緑の芽を伸ばしはじめた木々が、水面に映って揺らめいている。

氷解の薬を求めてだろう、ダムの横に一台の車が走り込んできた。運転手はこちらをのぞくなり、タイヤを軋ませてバックしていった。四人は竜の背を降りた。

「ひゃー、最高だった。なあ、みんな」

圭太がこわばった腕を大きく振った。新一は小さな目をぱちくりさせている。

「これからどうするの？」

蒼が、何事もなかったように冷静に聞いた。

「その問題をこれから解くんだ」

良はガラスにおおわれた巨木を見つめ、竜に向き直った。

「育みの気は、あの木に吸い上げられ、空気中に放出されています。あなたなら木を傷つけずにガラスを取り去ることができますか」

「フーそれはできない。わしの鉤爪でガラスを引き裂けば、落ちた破片はナタのごとく枝を断つだろう。炎やマグマを吐けば全てが灰になる」

竜は低く唸った。

「人々の祈りの現れのくせに、大したことないじゃん」

圭太がそっぽを向いて言った。蒼が青い顔をして、ひよる長い足を蹴り上げた。

「あんなの引っこ抜いてしまえば」

新一が軽く言った。圭太が論外だとばかりに、ブーツと唇を鳴らした。

「いや、意外といいアイデアかも。どうです？」

良は竜に聞いた。

「確かにあの大樹は傷を免れるだろう。だが、塔の土台を見よ。鉄の柱の一つはダムの水門に深く埋め込まれている」
なるほどその通りだった。

ガラスの塔を引き抜けば、水門に大きなダメージを与えることになる。なみなみと湛えられた水の圧力はダムを壊し、下流に洪水を引き起こしてしまう。ここからしばらく離れ、水が凍りつくのを待ったとしても、竜が近づけば、また溶けてしまう。

「ここまで来て、なにもできないのかよ」

圭太が怒りの声をあげた。

「怒ってもだめだ。冷静に考えないと」

良の声に、圭太は口を結んで睨み返した。

そう、怒っては駄目だ。怒りは破壊をもたらす。

『でも、待てよ』

良は閃いた。

「できそうな気がする。非常に危険だけど」

思ったことを、影の糸を通じて竜に伝えた。

「ガハー、それは面白い。小さな体で大それたことを思いつく」

竜は牙を剥き出して笑った。ダムの谷間に雷のような轟きが響いた。

「なにを話しているんだよ。俺たちにも教える」

圭太がじれったそうに足を踏み鳴らした。

「みんな、危なくない所に避難してくれ。それから車で乗りつける人にも、ダムに近寄らないように伝えてくれ」

良の真剣な顔に圭太は引き下がった。蒼は黙っていた。

「良ちゃん、大丈夫なんだよね」

「ああ、もちろん」

良の答えに、新一はくるりと向こうをむいた。

「僕は、良ちゃんを信じるよ」

言いながらダムの端によたよたと駆けだした。圭太と蒼も、良の肩にそつと手を置いてから新一の後を追った。

「まだ一人いる」

良は、ダムof管理室への降り口に目を向けた。頭を剃りあげた男が首を伸ばして、こちらの様子を窺っている。

「天照さん、こちらに来て下さい」
丁寧と呼んだ。

天照への怒りはなかった。彼はただ乱堂に利用されていただけだ。過去の悲しい出来事は、光の神を信じる頑なな信仰心が引き起こした事。無理強いはできないが、蒼もそのことを理解してくれることを願った。

そそと走り寄った天照は、輝く竜の前に平伏した。

「燦然たる輝きを放たれる光の神よ。あなた様は、とうとう、わしの前にお姿を現して下さった」

「天照さん、これから神様の行いをします。ここを離れて下さい」
「わしは御神のご出現を来訪者のラジオにて聞いておりました。淡路島で生まれた眩い光が、白い尾を引きながらこちらに向かったということを。そのお連れが、まさか君たちだったとは・・・わしはなんたることをしてしまったのか。それにそれに・・・」

やつれた男は悲しそうな視線を、ダムの端、おそらく蒼に注ぎ、コンクリートに額を擦りつけた。

「天照さん、すべて誤解だったんです」

良の声に天照はゆっくりと顔を上げた。そしていきなり懐から小刀を取り出して鞘を抜くと、自分の胸に突き立てた。

それは、良から取り上げた 三郎太の新生の刀だった。

「ああ」

まさに、あつという間の出来事だった。突き立ったはずの小刀は、

柄ごと、骨ばた胸の奥に消えていった。

「光の神よ。お目にかかれたこと、この世の最高の幸せと存じます。そしてあなたの使いの方へのご無礼、わしが過去にしでかした大罪、命を賭けてお詫びいたします」

喘ぎながら突つ伏した天照は、そのまま死んでしまったかのように動かなくなつた。

「修行僧よ」

呆気にとられたままの良の横で、竜が敵かに発した。

「おまえは死んではない。さあ、顔を上げ、この若者の言つた通りにせよ」

声に引かれるように、天照が顔を上げた。

「ああ、御神よ。あなた様は、わしに新しい命をお授け下さつたのか」

片手を胸に当てて、再び深く平伏すと、はじけるように立ち上がり、岸边に走つていった。

良はその後ろ姿を見送つた。

天照は死ななかつた。お地藏さんに供え、幻人の世界に送るはずだつた小刀・・こちらの世界の人に刺さつたらどうなるのだろうか。まあいい。それは後でわかること。今やろうとすることに集中だ。大きく息を吐きながら、頭を切りかえた。

「竜よ。それではいきます」

「いつでもよろしい」

良は、乱堂の屋敷でしたように、竜の影を立ち上げ、体を重ねて変身した。

そのまま翼を振り下ろし、空中に羽ばたきながら水門の前に構えた。巨大な姿でのホバリング・輝く竜と結ばれた細い影がスムーズな羽ばたきを教えてくれていた。

一方、ガラスの塔の上空にまいあがつた竜は、獲物を捕らえる大鷲

のように後ろ足の爪を鉄骨に食い込ませ、力強く翼を打ち下ろしはじめた。

俄に、嵐のような風が巻き起こった。

周囲に生えている木々が激しく揺れ、ダムの水が大波を立てて騒ぎはじめた。

ゴズンツ！

地震が突き上げたような短い音が轟いた。同時に、塔の土台が埋め込まれた水門にひびが入り、細い水が吹き上げはじめた。ひび割れを引き裂かんとする数万トンもの水圧に、コンクリートの壁が震えるような悲鳴をあげている。

「もうすぐだ」

良は赤く燃えさかる太陽を心に描いた。

光におおわれて上昇しはじめた塔の下、スローモーションの映像のように、吹き上げる水は激しさを増し、ひび割れに沿って広がっていった。そして突然、爆音とともに、水門は砕けながら前に倒れてきた。ダムが決壊したのだ。

『今だ！』

鋭い牙を噛み合わせた良は、喉の奥からゴボゴボと沸き上がってくるものを吐き出した。

マグマである。それも気化する直前のように眩い黄金色を発している。

稲妻のシャワーのように放出され、急に冷やされたマグマは、灼熱の石つぶてとなって激流を貫いていく。まるで無数の魚が川を登っていくようだ。

水は、その勢いにも劣らない莫大なエネルギーと出会い、白い蒸気となって昇り、巨大な笠のように空に広がっていった。あたりは厚

い霧におおわれた。

ほどなくダムの上流が見えてきた。

目の前には、泥の上に流れたマグマが、堰を造りながら飴色の泡を立てている。

上空からガラスの塔が降りてきた。数千度のマグマに触れ、蠟細工のようにひしゃげながら溶けていく。

『もう、よかろうぞ』

塔から爪を外した竜が、斜め前で羽ばたいた。細い影で繋がれた二匹の竜は、一度高く上空に昇り、ゆつくりと広場に降り立った。

胸の中に溜まっていた熱さがやわらいた時、良は元の姿に戻っていた。

ダムの水の大部分は水蒸気となり、また、新たにできた堰の向こうに留まっていた。

下流の谷には大量の水が流れ落ちたが、洪水を引き起こすほどではなかった。

白い世界の彼方に、太陽の光が霞んでいる。静かにそよぐ風に、辺りをおおっていた霧は、どこということもなく流れていく。

やがて、艶やかに青く光る木々が、ダムの周囲に現れ、激しく焼け焦げ、剥き出しになった土には、緑の草が芽吹きはじめた。

下流の山肌も、灰色のヴェールを脱ぎ去り、新緑の衣に着替えはじめた。鳥たちのさえずりが、あちこちから聞こえている。

育みの気に満ちた世界に、セコイヤの木が天高く伸びていた。マグマの熱に茶色く変色した大枝には、既に若葉の緑が混じっている。

さらさらと味気のなかった空気は、森の香りに溢れていた。

「やったな。俺なんか、宇宙がひっくり返ってもできなかったよ」
いつの間にか、圭太が横に立っていた。新一と蒼もいる。皆、晴れやかな笑顔を浮かべていた。

「ああ、やったよ。
けど一人でじゃない。僕を支えてくれた皆とやったんだ」
良は深く頷いた。

最終章・明日への飛翔

「いやはや、素晴らしい眺めじゃないか」

杉林の陰から、白い着物姿の背の高い男が顔を出した。大人だが、お兄さんと呼べるほどに若々しい。頭は剃り上げたばかりのように青々としていた。

「あなたは？」

良は聞いた。

元は誰だったか、うすうす気付いていた。蒼もそのようだ。戸惑うように唇を嚙んでいる。圭太と新一は気付かない様子で、いぶかしむように見つめている。

光の神を信仰し続けた修行者、天照。

顔付きは似ているが、ずっと若く別人のよう。しかし、衣の破れ方は変わらない。開いた口の中には、以前にはなかった長めの犬歯がのぞき、その目は、光の加減によって紫がかって見えた。

おそらく、まほろしびと幻人 三郎太が、天照の体を通して生まれ変わったのだ。天照の姿も残しているところを見ると、同じ体に、彼もまた生まれ変わったのに違いない。

「さあ、おかしなときさ。僕は自分が誰か知らないんだ。この格好からすると、仕事はお坊さんか何かかな。君たちは神様の友だちで、目の前に輝くこの竜の姿をした方が、これから僕が信仰する光の神あちゃ、いかん」

男は、自分の言葉にはっと気付いたかのように、竜の前にひざまずいた。

「若い男よ、おまえが信仰するのは、わしではない。見よ」

低く話した竜は、輝きを次第に強めていった。その巨体があることさえわからないほどに眩しさに満ちていく。

「どうだ、わしがわかるか」

「いや、眩しくて、なにがなんだか・・・」

男は口を尖らせて答えた。酸っぱい物でも食べたように顔がシワシワになっている。

「このお兄さん、変だぞ。お坊さんにしては軽すぎる」

圭太がこそりといった。

クスリと笑い声が漏れた。蒼の顔がほころんでいた。良はほっとした。蒼は心中のわだかまりを解いてくれたらしい。

ググツフ・・・

竜が咳ばらいをするような音を立てた。輝きは弱まっていった。

「わしの本質は光の束。命の豊かさを願う人々の心が生み出したもの。よって、わしは光の主ではないし、おまえが信仰するものでもない。するならば、光を生み出そうとする力を信仰せよ。それは人々の心の中に存在する」

「はあ？あなたを生み出そうとする力。それが人々の心にあるなんて。何か、ちつぽけなような・・・しかし、お言葉を信じます」

男は手を合わせ、顔を上げた。

「そんじゃ、竜様、事のついでにお聞きます。僕は自分の名前を忘れてしまったようなのです。かといって思い出す気にもならないし。どうしたらよいでしょう」

「名は大切なもの、思い出さねばならない。ならば、おまえを知るこの若者に尋ねてみよ」

竜は良に顔を向けた。

「えっ、」

急に振られ、良は言葉に詰まった。

圭太と新一がぐるりと目玉を回した。

・安西君が新しい名前を付けるのよ・・蒼が囁いた。

「なんだ。人が悪いな、坊やは」

若い男は眉を上げた。

「あなたの名前は、て天照・・天照三郎太」てんしょう さぶろうた

つい、思い付いた名前を言ってしまった。蒼がブツと吹き出した。

「天照つて、あのほら」

「それに三郎太つて」

圭太と新一が目玉を白黒させるなか、男は立ち上がった。

「その様子からすると、君たちも知ってたな。まあいいや。古臭いけど、天照三郎太、素敵な名前じゃないか」

笑いながら跳ね回り、四人に次々とキスをしてきた。

「良ちゃん、どうにかして」

最後に抱き締められている新一が叫んだ

「生まれ変わって、嬉しくてたまらないんだ」

良は、諦めるとばかりに小さく手を振った。

「安西君、ちゃんと考えたの？」

「二人とも名字がなくて変な名前だったけど、これでぴたっときたよ。でもキスしまくる修行者なんて聞いたこともない」

蒼のつつこみを圭太がフォローしてくれた。

良は息をつきながら笑った・・お地蔵さんに供えるはずだった小刀が、まさか天照の体に取り込まれ、三郎太とともに生まれ変わるなんて。

新一から離れた天照三郎太は、小躍りしながら竜の前に戻った。

「竜様、これから僕はどうしましょう」

「それはおまえが決めること。わからないなら、その若者たちと一緒に歩いてみてはどうだ」

天照三郎太は四人に振り返った。

「そうだってさ。で、君たち、どうするんだい？」

「どうするっていったって」

良たちは視線を交わしあった。こちらの世界で起こった問題は解決されたし、とりあえずは、家に帰るぐらいしか思いつかなかった。

「僕らは別として、竜はどうするのかな？」

新一がキスされた頬をゴシゴシこすりながら首を傾げた。

良は、輝く巨体に 問いかけの目を向けた。

「わしの果たす役割は、もはやないらしい。そして影の宿り主の命は消えそうにない」

牙の生えた口が、笑うように弓形に反った。

「ならば元の石像に戻るのみ。影の宿り主よ、この体を洞窟に戻されよ。その場にて、結ばれた影はおまえに返る」

「じゃあ、やはり僕は、あなたの影を宿し続けなければならないのですね」

良は頭を下げた。

嬉しいような悲しいような複雑な気持ちだった。竜の影を宿し続ければ、また大事件に巻き込まれるかもしれない。もしかしたら鬼が襲ってくるかもしれない。それに病の人を勝手に治してしまう。

影との付き合い方はわかってきたが、それを持ち続けるのは肩の荷が重すぎる。

「良、なに考えてるんだよ」

圭太が陽気に言った。

「俺たちがいるじゃないか。あんまり役に立たないけど、とことん付き合うぜ。なあ」

肩を小突かれた新一が「怖いことは勘弁だけど」と言いながら、にんまり頷いた。

「私もいるわ」と蒼。頬を赤くして「影を守る者だし」と付け足した。

胸に生じた詰まりを溶かしてくれるような友人たちの言葉だった。

「そうだったね」

良は微笑んだ。

これまでのことは一人でやったのではない。仲間と一緒にやったのだ。これからだってそうだ。重い荷物でも、一緒に持つてくれる仲間がいれば軽くなる。

「みんな、家に帰ろう」

背筋を伸ばし大きく言った。

「おう！」

三人が力強く答えた。

「じゃあ、僕も家に帰るってことだけど、はて、家は何処だったかな」

輪に入っていないかった天照三郎太が途方に暮れた。

「よかつたら家うちに来て下さい。私んち変わってるけど、きっと気に入ると思うわ。口数の少ないお父さんの話し相手になってあげて」
蒼が救いの手を差し伸べた。

「さあ、影の宿り主、そして仲間たちよ」

竜が首を低く下げた。

良たちは滑らかな白い背に跨った。天照三郎太も当然のように続いた。

「では、出発いたそう」

翼が振り下ろされ、四人を乗せた竜は空に舞い上がった。朝日の注ぐなか、凍りついていた四国の大地が、緑色に染め上がっていくのが見えた。

・
・
・
・
・

「家に帰る。とりあえずは」

頬に風を受けながら、良はつぶやいた。

幻人たちは、まだ青い空を見ていない。根っこの所では、問題は解決されていない。

大地への祈りを思い出した人は、凍りつき事件が過ぎた後でも覚えているだろうか。疑ってはいけないが、かなり怪しい。なにせ、ゆったりと時間の進む幻人の世界でも長期間続いている問題なのだ。ということとは、こちらの世界では、さらにずっと以前から、大地への祈りは薄れはじめていたことになるのだ。

今回の事件のことを明確に知っているのは、たったの六人。それで何ができる？

『違う！』

たったじゃなくて、とびきり素敵な人たち六人もだ。ちっぽけなことからでも何かができるに違いない。

「うへー、すごいな」

後ろから声が響いた。

気流に当たらないように振り返ると、天照三郎太が竜の背からずり落ちそうなくらい身を乗り出して、下の景色を眺めていた。身を切るような気流を浴びているはずなのに、無頓着にも笑っている。

良は目を細めながら頷いた。

『六人じゃない、七人だ』

もしや、三郎太の魂がこの世界で生まれ変わったのは、大切な意味があったのかもしれない。天照の熱心さも一緒に持っているとしたら、尚更だ。

『ホーイ、竜は、人の数には入らんのだろうか』

心に言葉が響いた。

『必要あらば、またこの体に影を伸ばせ』

白い竜が金色に光りはじめた。

それは今、良の心に見えた未来への光そのものだった。

「この体、すぐに眠らせるのは惜しい。古き人々が望んだ光の現れを、今に生きる人々にもしばし見せようぞ。影の宿り主よ、よろしいか」

「もちろん！」

良の言葉に、竜はひととき大きく羽ばたき、さらに高く舞い上がっていった。

「忘れてた。俺たち、もう高二だ」

「もしかしたら留年しちゃったかも」

遙か上空で、引きつった声が漏れた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6034f/>

Dragon Nests ~ 竜影の宿りし者

2011年1月5日22時41分発行